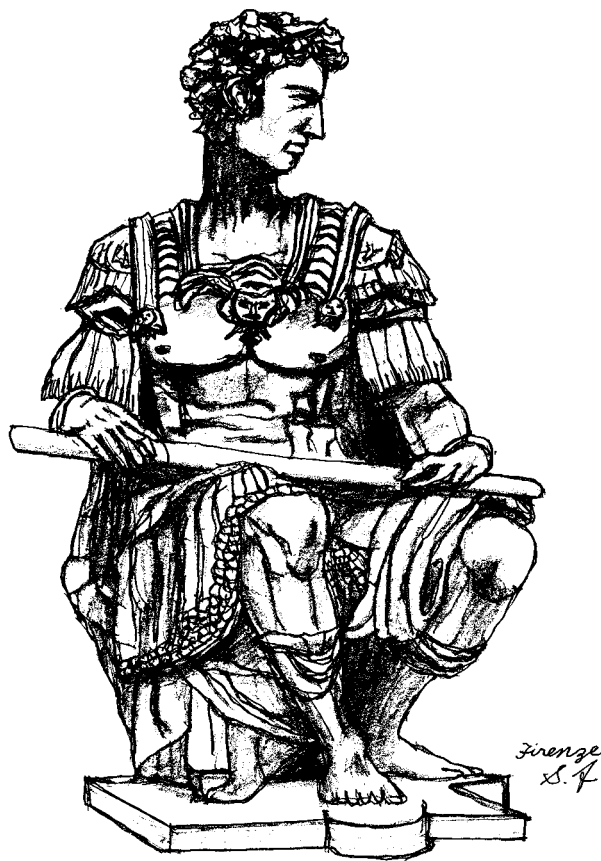


悠遊 第六号



企業OBペンクラブ

悠遊

第六号

平成十一年三月十七日

企業OBペンクラブ同人誌

《第六号》

目次

Ⅱ特集・この十年これからの十年Ⅱ

◇ペンクラブの十年……………	北田 純一	4
◇私の「この十三年、これからの十年」林	洋	6
◇八十四歳顛落す		
十年目に突然襲った異変……………榎本喜三郎		9
◇この十年……………岩崎洋一郎		12
◇「女の世紀」に一言……………岸本 義生		14
◇エネルギー複合化時代……………森田 茂		17
◇ヨーロッパの解体と統合……………豊前 華		20
◇歩き人生、この十年		
生涯プロジェクトの誕生……………三枝 亨		23
◇「これまで」と		
「これから」の十年を思う……………衛藤甲子郎		25
◇長寿はめでたいか……………藤岡 豊		28
◇グローバル経済のいまとこれから……………櫻井 清治		31
◇傘寿を前に……………中川路 明		34

Ⅱ自由テーマⅡ

◇この十年・これからの十年……………今村 亮		36
◇第五の人生 自己実現に向けて……………深尾 嵐山		39
◇世紀末ニッポン……………中川 十郎		42
◇これまでの十年、これからの十年……………新井 進		45
◇これからの十年 私の夢と希望……………東 与一		48
◇今後の十年……………松浦 武弘		51
◇変はる・変る・日本語が変わる……………石川 正達		54
◇老人たちよ、死ぬまでに反省しよう……………八木 大介		57
◇ルースキー・チャイ……………定直 正光		60
◇中国・西寧(シーニン)訪問記……………吉寄 清己		61
◇未刊行拙著「斜めに読む世界史」のむすび……………志田 渉		64
◇アナウンサー……………黒崎 昭二		66
◇悪魔のささやき……………多田 修		69
◇大学教授への転身……………西川 永幹		71

◇タクシーから見たお国柄……………	都甲 昌利	77
◇晩秋の高雄山……………	遠藤 俊也	80
◇学生全員が独自で 参列した校長の葬儀……………	野村 嘉彦	82
◇今昔物語……………	村田孝四郎	84
◇国語を使わない不思議な国 —シンガポール—……………	荘司 忠志	86
◇シベリア鉄道と日本(一)……………	大塚 滋	89
◇岐路に立つ日本経済……………	岡 政昭	92
◇婦巢本能……………	亀井 弘次	95
◇西域「敦煌」への旅……………	上澤 準一	97
◇バリアフリー……………	藤井 長治	100
◇言葉と文化……………	浅野 正春	103
◇外国語、肺結核との巡り合い……………	今川 確郎	106
◇旅とチョコレート……………	西島 力	109
◇歴史の不思議 —江沢民少年を咬んだ犬—……………	佐藤 正男	111
◇第四次中東戦争のこと……………	中村 爽	113
◇紙魚の咬き……………	吉井米三郎	115

◇戦時下の歌舞伎……………	関谷 裕彦	118
◇思いがけない旅の収穫 —ミャンマー旅行にて—……………	斉藤 勁	121
◇平成十年極月の雑記……………	水谷 汎	123
◇うなぎ捕り……………	竹内 京一	125
◇セミナー・プロデューサー……………	高橋 孝蔵	127
◇国際会計基準の本質と精神……………	許斐 義信	130
◇短歌サロンのこの一年……………	細川 謙三	134
◇ペン俳句 充実の一年……………	平間真木子	137
◇企業OBペンクラブのあゆみ(年表・年史)……………		141
◇執筆者名簿……………		146
◇事務局から……………	西川 知世	148
◇編集後記……………		

表紙の絵 新井 進
カット 吉井米三郎

特集・この十年これからの十年

ペンクラブの十年

北田 純一

この十年といえば企業OBペンクラブは間もなく創立十周年を迎える。総勢十名あまりで創立パーティーを開いたところがなつかしい。今は会員も八十名を超え組織も改まり、徐々にはあるが盛会に向かっているのはまことに慶ばしい。ところが、この十年をふり返ってまことに面白いことに気がついた。三人の会長の交替時期が、まるで神の見えざる手に導かれたかのように、見事に世相の移り変わりに対応している。

十年前の日本人は『国際化』を合言葉にしていた。テレビも雑誌も『国際化』というキャッチ・フレーズで溢れていた。企業OBペンクラブの設立も国際経験豊かな

企業OBをあつめ国際オンチの日本人を啓蒙しようということにあつた。狙いはまさに世相にぴたりだったわけである。そして『知らぬは日本人ばかりなり』『あつと驚く国際マナーの常識非常識』『アメリカ人と堂々わたりあう方法』『総合商社の未来像』などを次々と出版することができた。フォロー・ウインドが吹いていたのである。

やがて日本は最盛期を迎え円が高騰し、豊かになった日本人は大挙して海外ツアーに押しかけるようになった。大部分は観光目的だったが、その数はうなぎ登りにふえ、あつという間に一千万人を突破し、とうとう年間一千七百万人に達した。

もはや海外が珍しい時代ではなくなった。合言葉も曖昧な『国際化』から多少具体的な『ボータレス』にかわった。人々はそれほど外国を意識せず、大胆に行動するようになった。世界中どこへ行っても日本人がいる時代

になった。海外通の日本人は掃いて捨てるほど多くなった。こうなると生半可な啓蒙書では魅力がない。何らかの専門性が要求され、単なる経験談では受けつけられなくなった。その証拠に、何度となく企画した英語に関する本はついに出版社を見つけることができなかった。

出版社からは同じような啓蒙書でも、『国際マナー辞典』や『オーストラリア暮らし入門』あるいは『よくわかる商社業界』のように、体系的かつ網羅的なノーハウ書が求められるようになった。

一回目の会長交替はこのような時期に行われた。新しい会長は政治経済の勉強会や外人との英語トーク会などを準備し、会員の資質向上に努められた。

時あたかもバブル崩壊の時代であった。やっと築きあげた日本流のシステムが異音を発しはじめた。歴史始まって以来の豊かさの中で行き詰まり現象があらわになった。対応策をめぐり百論百出、正解がないまま価値観の多様化のみが進行した。合理主義、効率主義では解決できない事態と見受けられた。二百年の伝統を持つ経済学は弱点を露呈し、今まで顧みられなかった東洋思想や宗

教が人の心に蘇った。このような世相の中で俳句や短歌の勉強会が発足したのは着目すべき目配りであった。

一方、『六十歳からの知的生活』にはじまる六十歳シリーズは比較的好調だった。高齢化がすみ老後の生活ノーハウが求められ、そのスピーカーとして企業OBは打ってつけだった。『ゆつたり暮らす法則』が日の目を見た。日本人が経済成長一辺倒を脱し、心の効用に着目し始めた証拠である。

最近、世相は流れを変えはじめた。バブルが崩壊し資本主義の枠組みが音を立てて揺いだからである。アメリカからはグローバル・スタンダード化を強要される。そのアメリカではヘッジ・ファンドが問題を起こしている。政界も財界も学会も日本のリーダーたちは自信を失ってしまった。資本主義の賛美を一手に引き受けてきた経済学も鼎の軽重を問われざるを得ない状況にある。

最近、目覚ましい発達を遂げた学問がある。一つは宇宙学、なかなかく比較惑星学である。この学問により人間は地球を知りその限界を悟った。二つ目はバイオ・テ

クノロジ、生命現象の不可思議を解明し、人間をして自らの成り立ちと限界に目を向けしめるだろう。

この極大と極小の二つの学問が人類を変えようとしている。無限の成長を前提とした資本主義の誤謬が明らかになり、人間は身丈にあった新文明を準備することになるだろう。

三人目の私が会長を引き受けたのはこのような世相転換期にあたりと心得ている。だから『二十一世紀サロン』と名づけた勉強会をはじめ、みんなで時代の潮目を見極めようと心掛けているのである。



私の「この十三年、これからの十年」

林 洋

くも膜下出血で倒れる

今年（平成十年）九月、私は、ある市民運動の集会で強い発言をした直後、激しい頭痛に襲われた。しかし、日ごろの血圧は正常なので、脳内出血を起こしているとは露思わなかった。

念のためと入院したメデイカル・センターで、くも膜下出血であることが判明し、愕然とした。不幸中の幸いは、この病気の患者の五％にみられる動脈瘤が認められない良質の脳内出血という診断結果だったことである。鈍痛の頭を抱えてメデイカル・センターのベッドに横たわりながら、まるで深い灰色の淵に沈んだ心境で、終始前のめりの姿勢で過ごして来た独立後の十三年のことを反芻し、これからの十年のことを思った。

サラリーマン卒業から十三年

一九八五年、科学万博の年、私は、それまで勤めていた研究所を辞めて、技術士として独立し、交通事故鑑定の仕事を始めた。五十三歳だった。最初はやって行けるものかどうかとも判らなかったが、ちょうど、むち打ち症詐病問題に遭遇したこともあって、一年後には超多忙の状態になっていた。

そのような日常性の中で、私は私なりに人生総括の目標を持って歩んでいる積もりだった。研究所に在る間に交通事故鑑定に関する最初の理論体系的な本を書いていった。私は独立して交通事故の工学鑑定を実行し、それをベースにして交通事故鑑定の学問体系の整備と鑑定事例の紹介を煉瓦を積むように着実に実行して行こうと考えていた。確かに、理論的な本はその後、二冊書いているし、鑑定事例紹介の本も三冊出すことが出来た。鑑定の仕事は、一つ一つが問題発見、問題解析の企てで、元実験技術者の私が没頭するのに好適な仕事だった。

工学鑑定研究会の企て

こうして、交通事故の工学鑑定をしていると、年間四

十回くらいは裁判所に出掛けることになるので、否応なしに、他の工業分野の工学鑑定問題が目に入ってくる。

聞くところによると、法医学は十五世紀くらいからあるそうであるが、これだけ工業化が進んで来ると、裁判の場において、医学的知識だけではなく、工業分野の知識、見解が必要な場合が増えて来るのではないか。

私は、余り熱心な会員ではないが、日本技術士会に所属している。ここには、機械、電気・電子、建設、応用物理、化学等十九の工業分野の技術士が集まっている。一年前、私は、ほんの思い付きで、この技術士会の中にあらゆる工業分野の工学鑑定を引き受ける技術横断的な工学鑑定受諾組織、仕組みを作ってはどうかという提案をした。それが意外な反響を呼んで、今年、ようやく工学鑑定研究会というものがプロジェクト・チームの形で技術士会の中にできた。そこで、出だしの企てとして、セミナーを開こうとしていた矢先の発病だった。私の講義は、取り敢えず順延ということになった。

次の十年を思ふ

悪質のものではないということで退院し、溜まってい

た鑑定依頼の仕事をそろそろ再開した。事故現場の調査にも出掛けた。そうして、改めて、この仕事は私にとって、まるで業のようなもの、憑き物のようなものだなということを痛感した。事件の謎と格闘している時の私の精神状態は、野原に出て雑魚や野鳥を追いかけていた子供のころの無我夢中と変わるところがない。この仕事に溺れた俣すつと死んで行けばいいなと思う。

これまでも死をレトリックとして使うことはあった。若者にとって一番大事なことはいかに生きるかということだ。しかし、俺たち老人にとって一番大事なことは、いかに死ぬかということだ……というふうにエーカッコーシーを言ったものである。

しかし、本当は、親身なものとして死を実感してなどいなかったのだ。

しかし、今度の脳内出血で、軽薄な私も少しは「いかに死ぬか」を真剣な課題として考えるようになったような気がする。

急病が、否応なしに十三年目の節目を啓示してくれた。次の十年は、多分、死か、アルツハイマー引退で区切ら

れる十年なのだろうと思う。しかし、最後に、これで、いい人生だったと思えるようにならないかかなと自らに繰り返して言い聞かせる。

工学鑑定の学問体系の玉成と恥ずかしくない鑑定事例の積み上げ。これらは、私個人の自己実現目標の積もりで、これまでのペースで続けよう。猫の皮かも知れないが、虎の皮を残す積もりで。今年は、これは他力本願だが、日経メカニカルから『事故は語る』という事故解析の単行本が出た。そこにワン・オブ・ゼムとして私の事故解析例が七例載っている。十三年の節目で、来年あたり、次の鑑定事例集を出してもいいな、などとも思う。これらは、個人業だがもう一つ、工学鑑定研究会の方も、技術者の社会的責任として、力を入れて行こう。私の密かなボランティア活動のテーマである。

ただし、くも膜下出血が再発しないように、もう、前のめりの駆け足はやめにして、ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり。そう、ゆっくり歩きながら。

八十四歳顛落す

Ⅱ 十年目に突然襲った異変 Ⅱ

榎 本 喜三郎

一九九八年八月号の「マチュリティ談話室」で深尾榮助氏によって「精悍なビジネスマン」と見られた私が、前記のような標題の随想を書くのは、当ペンクラブ同人の諸兄に八十四歳からの警告を発する意図からである。

さきに八月十六日付けの身辺随想に小生は「身辺多忙八十四歳の弁」とした小文を呈し、厚かましくも自分の近況をお知らせした。その文中で触れた『新版 ジョンブル気質』は、お約束通り九月上旬に上梓して若干冊を野村嘉彦氏を介して会員諸兄に呈上した。そして、その後は相変わらず色々と遣えることを抱えて日を過ごしてきた。十月七―九日には大阪で日本海運経済学会の年次総会がある。同会は長い間メンバーであるし、つい先年、学会賞も授与されたことでもあり、毎年出席しているの

で、一九九八年も出席すべく、在阪の友人にホテルを予約してもらい、十月一日には新幹線の切符も手に入れた。

実にその夜、正確には十月二日（金）午前二時ごろ自分の身に異変が起こった、と知ったのは、実は翌日になってからである。いつもの通り、夜中に目覚めてミルクを口にとると、口の左隅からそれがだらだらと漏れて寝衣や台所の床を濡らした。二口、三口と口にするたびに、たらたらと左口の隅からミルクが垂れるのを気にはしたが、どうしてこうなるのかまでは考えずに、手近の布巾でそれを拭ってまたベッドに入った。朝（十月二日）になって五時の目覚ましを聞きニュースを聞いて、五時十五分に起きて朝の行事、まず髭を剃り、頭髪の手入れである。大きな鏡の前でカミソリや櫛を使って毎朝やることを一通り遣って部屋に戻ったが、その間、自分の顔に酷い異変が起こっていたのには気づかなかった。やがて起きだしてきた家内が「オヤッ お顔が少し変ですね」と言うので、鏡の前に行くと、確かに口が少々右に曲がっているし、左眼が半分潰れている。しかし、普段でも左眼は少し小さいようだし、口が少し曲がっているのは

「寝違えでもしたのではないか」という家内の言葉に自分も納得して食事を済ませ、銀座の会社に出掛けた。いつものとおり、大した用事はない。近くに机を並べて若い女子事務員が数人いるが、誰も私の顔の異変に気の付いた人はいないので、私もいつかそれを忘れた。事実どこにも何の痛みもないし、顔にひきつりも感じない。

やがて昼になって、その日約束してあった大学三年生の孫娘と一緒に食事をするので鳩居堂の前にやって来た。そして、私の顔を見るや「あら！ パパ！（家族内ではこう呼ばれている）顔が変よ、口が曲がっているわよ」と言う。「ああ分かってる」と言って、孫娘を予定していた新橋の近くの寿司屋へつれていく。そこで握ってくれる寿司をたべ、茶を飲むと、今度は全く口の中の具合がおかしいことに気がついた。茶が口の左隅からだらだら漏れる。食べたものが皆口のなかで左に偏って、右の歯の方に移らないので咀嚼が完全にできない。

どうにか食事を終えると、孫娘が「パパ直ぐに病院へ行きましょう。いつもの多摩川病院なら受診票も健康保険証もなくても大丈夫でしょう」と、先に立って私を引

つ張って急ぐ。とにかく事務所に戻ってカバンを持ったついでに、トイレで鏡の前に立つと、朝より余程ひどくなったのか、顔が大分崩れている。これでは人前に出られない。

地下鉄を乗り継いで一時間二十分で病院に着く。金曜日の午後である。まず眼科に行つて視力を計ったが、視力は正常である。女性の眼科医は「左眼が閉じられませんか、乾きを防ぐ薬をあげます。後は内科か外科へ行つて下さい」と言う。そこでまず内科へいった。しばらく待たされたあと「やはり外科へ行つて下さい」とたらい回しにあつて外科へくる。

これも幸い外来患者が少なかったので、直ぐに呼び入れられて、中年のきびきびした医師の前に掛ける。手の開閉や腕の屈伸、直立の姿勢やらを試みせた挙げ句、脳のCTスキャナーをとる。脳の断層写真も二十分くらいで出来てくる。これには異常はないらしい。外科医の説明によると、私は末梢性顔面神経麻痺に掛かったのであるという。さらに来週十月六日（火曜）に来て、この病状に専門的な医師の診断を受けて治療方法を決定す

ることになった。そこで、私は十月七日（水）から大阪で学会があることを伝えて、これをキャンセルすべきかどうかを尋ねると、意外にも「ああいいですよ。大阪の学会に出席するのは差し支えありません」と言われた。

私のは脳の方から来たのではないことが断層写真ではっきりしたから、小旅行など差し支えない、六日に専門医の診断を受けて、その処置をうけた後、その翌日から二泊三日の大阪行きはそのまま実行することになる。事実、その時の私は顔が少し歪み、左の眼が少し潰れている（このため視野が上下少し狭くなっている）ことさえ気にしなければ、どこも痛くもかゆくもない、体がだるいことも熱もないという状態だったから、日常生活になんら不自由はないのであった。それから思い付いて、家に帰って百科事典を見ると、あるある。この末梢性顔面神経麻痺が七百字くらい説明されている。そこに書かれていることが、今の自分の顔面とひき比べて、どんぴしゃりなので、思わず家内と顔を見合わせた。

この末梢性顔面神経麻痺は原因不明の場合が多く、ウ

イルス性やリユウマチ性のものがある。典型的な病状は左記の通りである。

①閉眼が不十分になる ②額の皺が消える ③口の片端が下垂する ④口笛が吹けない ⑤食べたものや飲んだ物が口角からこぼれ落ちる ⑥しかし視力は正常。

これらの症状が私の顔の左半面に現れている上に、口と下顎が右の方に振じり曲がっているのだから、全く見る影もない。かくして八十四歳の颯爽たる現役ビジネスマンは、あつという間に顛落したのである。こうなった原因は不明だが、多くの場合、長時間寒冷にさらされたり、過労、ストレスから起こるのだそうである。しかし、いずれの状態も、私には心当たりがない。発病から四日目の十月六日に、病院へ行き、病院の顧問をしている先生の判断で喉（星状神経節とあとで教えられた）に麻酔薬を注射してもらい、かなり強いらしい薬を三日間飲んだのが効いて、大阪の学会に二日間出席して帰京したときには、かなり正常の状態に戻りつつあった。何にしてもし一時の顔貌は何とも哀れなもので、後日のために十月三日（発病後二日目）の状況の顔写真を撮っておいた。

結局、喉への注射は七回やった。

思えば私は七十四歳まで、入院も、体に対する手術もしたことがなかったが、その歳に急性緑内障の手術と急性肺炎で十日間入院した。それが今から十年前である。それから十年目の現在、顔面神経麻痺にかかって一時は人中へ出られぬ面相となったが、どうやら現在は九五%まで回復している。一夜にして顔の造作を取り壊してしまったかと思うと、医薬による抵抗に遇うとたちまち二週間で元通りになる。命は時にこんな悪戯をするということを得ていなければならない。

ここで私はこの奇禍を乗り越えたら、後また十年くらい平穏で多忙な時のなかに身をおいて、次の目標にアタックするつもりでいる。ペン同人諸兄よ。人生には時にこんなことも起こることをお知らせすることで、この貴重なスペースを潰したことをお許し頂きたい。

この十年

岩崎 洋一郎

与えられたこの表題を前にして、改めてこれからの人生に思いをはせた。日本の将来は不透明で、これから先のことは分からない事だけである。統計や傾向予測の手法を駆使した堺屋太一の「平成三十年」によると、かなり暗いことになりそうである。真面目に考えると、憂鬱になりかねないので、頭を切り替えて自分自身について思いをめぐらせて見た。

愕然とした。と言うのは、これからの十年間を本当に生きてゆけるのか、全く自信のない自分を見いだしたからである。一九九九年二月に満七十歳になる。これは一つの区切りである。東京都からバスの無料バスを支給される年齢である。十年先といえは八十歳である。その年代の人は、テレビの「御長寿早押しクイズ」を見る限り、

かなりのボケぶりである。その姿を自分の身に置き換えてみる。老残としか言えず、身の毛がよだつが、これが人間の定めであらうか。

頭を切り替えて、「過去五年・今後五年」という十年のスパンに光を当てて考察してみることにした。特殊な仕事を担当していたせいで、サラリーマン定年は五年前に六十四歳で迎えた。その時は冷静に受け止めることが出来たと思う。まだ体力・気力・知力は衰えていないと自負して、個人でコンサルタントを開業してみた。在職していた会社には一切お世話にならない覚悟を秘めて。別に四十年も勤めた会社で遺恨があつてそうしたわけではない。しかし、会社の人間にとって、社長と同期の先輩なんて使いにくいことは明白である。そんな他人迷惑な面倒だけは、勘弁してほしい。

幸い、米国に男気のある人たちがいて、アメリカ・ビジネスマンの気持ちとロジックを理解する日本人が必要であるとして契約してくれた。借りた事務所には毎日、サラリーマン時代と同じようにワイシャツにネクタイ姿で、出勤することになった。お陰様で雑用を含めて毎日

何かと忙しい。クライアントの期待を裏切らずに、仕事の結果を喜んでもらえているので、こちらも嬉しい。

今までの経験を活かして、交渉に役立つ実用英語の本を書き、思いもかけず六千五百部も売れた。他の出版社からも、お誘いを受けて、二月下旬に、次の本が上梓される予定が確定している。文章の勉強の目的で、企業OBベンクラブに加入した。また、勉強の機会として日本ライセンズ協会の月例研修会に精勤した。

完全な遊びとして、青春時代から大好きであったジャズに時間を割くことも出来るようになった。思い切ってジャズ・ボーカル教室に通い、新しい仲間もできた。プロのバンドに伴奏させて大きな舞台で観客を前にして、手足が震えながら独唱する体験も初めて実践した。面白い人生、万々歳である。

しかし、これがあと何年続くのであろうか。ここらで考えてみようと思った。勇氣を持って現実の自分を真正面から見据えると、物忘れがひどい、肉体は確実に衰えていつている。集中力が続かない。日本語を英語に訳すときに、以前は瞬時に五つ六つの違ったセンテンスが

頭に浮かんだが、今は二つ三つしか浮かばない。ここは正念場である。つまり、老衰や死を視界に入れながら、将来の予想図を描かざるを得ない岐路に立たされていると自覚した。

では、今後どうするか。妻とも冷静に話し合えた。二人のうち、まず一人が先にあの世に行き、もう一人が取り残される。避けがたい事態であると認めあった。極めて冷静に客観的な自然現象として、お互いに受け入れている。

我が家は築二十年で、あちこち手を入れる必要がある。が、もう面倒くさい。一人になったら、一軒家は重荷であると妻も認識している。子供は男子で、将来はお嫁さんに下の世話までお世話になれるかも話題にした。あれこれと、これからの現実を見つめた結果、ケア付きのマンションに移ることにした。目下そのための調査や作業を進めつつある。この歳で引越は大変であるが、先に行けば困難さは増すばかり。まだ残照のある間に思い切って生活を切り替えようと妻と二人足並みをそろえた。一人で新しい環境に入るよりも、長年連れ添った同

志であるこの二人で立ち向かおう。

コンサルタント業は何時でも止められる。が、続けられる間は、続けよう。五年先まで生きていて、五体満足ならそこでまた、その先を考えよう。夫妻で、こう一緒の決意を固めたら、なにか気が楽になり、活力がもくもくと湧いてきた。

「女の世紀」に一言

岸 本 義 生

日本のこれからを「女の世紀」と呼ぶ評論家・文化人がいる。各方面で女性の活躍を予測していることだろう。

日本の社会は、ずっと男性中心の価値観が支配してきた。女性には、家庭にあつて良妻賢母たることを求めた。戦後、男女平等が唱えられるが、男性は社会で働き、女性が生計をまもる構図は変わらなかった。廃墟から経済

大国になった一因は、男女がそれぞれの役割分担を認め、両者ともいちずに働いたからである。

結婚式での先輩の挨拶は、新婦に「内助の功」を求めるのが定番だった。男性が心おきなく働けるように、女性はずべからく努めるべしということである。

一九七〇年代以降、女性の各方面への進出は、話題の提供者であっても、男性中心の社会に変化はなかった。

ところがこの十年はどうだったか。まず家庭の男性優位が崩れ始めた。女性には家庭でかなり強い足場を作った。結婚式の挨拶では「内助の功」が消えて「生涯のパートナー」となった。やがて良妻賢母は死語となり、広辞苑に辛うじて残る言葉になる予感がする。

彼女らが家庭で力を持ち始めるには、かなり前からその伏線があった。サラリーマン給料の銀行振り込みがきつかけで、彼女らの多くは「財布の紐」を握った。彼女らは、これを経済的自立と考えた。与えられていた者が、与える立場になった人も多い。マスコミは一日三百円亭主などと囃したのである。

昔も今も「お金」を握った者は強い。更に不景気は女

性の逞しさを認識させ、家庭内の立場を一層強くした。少しでも安い生活必需品を求めて東奔西走する。パーゲンセールにみせるバイタリティーは男性にはない。長引く不況は其稼ぎを増やし、彼女らの自立心を更に高めた十年ではなかったろうか。

それでは、これからの十年はどうか。医学・学術・法曹・行政・企業などで女性の潜在能力を引き出す機会は増えるが、同時に資質が本気で試されるだろう。

家庭内にしほると、女性はずますます強くなり「夫唱婦随」はどこかの国の昔話となる。男性が給料を稼いでいる間はまだしも、年金生活に入ると男性は徐々に地位を失ってゆく。家庭における役割の喪失が決め手となる。

女性は楽しみを求めて、亭主にお構いなく出て行くが、男性は家に閉じこもりがちとなる。かつて聞いたことのある「女房は壊れない洗濯機でもなければ、永遠の部下でもない」との言葉が現実味を帯びてくる。

レザークラフト、フォークダンス、大正琴、絵手紙、ニットの会、民謡と踊り……など十数種類の集会有る。これは都内の某勤労福祉センターのある日の会合だ

が、参加者は女性である。男性の集まりは閑暮ぐらい。毎日このような催しがあり、食堂は彼女らの笑い声で溢れ、確かに生き生きとしている。かくして女性は更に寿命を延ばし、老いても装い続ける。

長い間働いてきた高年層男性、また働いている中年層は、この時期、たしかに疲れている。女性が現在、かなり好きなことの出来るのも、女性の協力があつたにせよ、男性が心身を消耗して働いた果実であることを、忘れてもらつては困るのである。妻への「夫の氣遣い」こそ夫婦円満の秘訣という評論家もいるが、いまだに一方的に男性にだけ求めるのはいかなものか。

たしかに老年者家庭で役割を失つた男性は所在がない。男性も過去の未練を捨てて、ゴミ出し、掃除でも役割を持つことだ。老年男性の多くは、妻より先に死ぬことを願っているが、神様はそれを許すか判らない。簡単な料理ぐらい覚えておかないと、寝込まれたり先立たれるとうろたえることになる。男性も、女房ばなれして、自ら好きなことを求め、輝くことが大切である。

これからは在宅勤務も増え、中青年層の家庭では、男

性の家事・育児への参加なども見られるだろう。女性の発展はまことに結構なことだが、身近な問題で喜べない傾向もみられる。

一つは若者の結婚意欲の減退だが、特に女性に顕著という。若い女性の多くは親がかりで暮し、給料を好き勝手に使う今の生活を、出来る限り長く続けることを願っているようだ。

しかも、結婚しても、少子を好み、一人だけ出産の場合は、女性の八〇％は女の子を望むという。理由は、女の子は結婚しても、生涯を通じ親の面倒をみてくれるからだそうだ。そこには女性の打算があり、現在でも娘夫婦が同居を望むなら、別棟・二世帯住宅を建ててやるという母親が多く、現実これが増えている。

しかし、核家族化は先進国の常だから覚悟せねばならない。いつまでも子供が面倒をみてくれるというのは甘い考えである。今の老高年層は、金を持っているから、娘の一人や二人が居座ることは何でもないが、娘は早く自立させた方がよい。

今一つは子供の教育。特に幼少年時の「しつけ」であ

る。「躰」は家庭教育の大切な部分で、今の日本では父親の参加が不可欠である。外国生活の経験者は、承知の通り、日本と外国との母親の違いは「子育てのきびしさ」にある。

父親が仕事に忙しいなどを理由として、母親に任せ切ると、過保護になりやすい。それは、子供の自立心、判断力の欠如をもたらし、何も決断出来ない人間が増える。結果として何時までも親離れ子離れの出来ない歪んだ親子関係が続くことになる。女性には悪妻でもよいから賢母になって貰いたい。

世の高年男性は、自分の家族・係累がこれらについてどうなのか、目を光らせることが大切だ。日本の現状をみると、これからの十年は世界に通用する社会と人づくりに将来がかかっている。「女の世紀」が女の天国になることは困るのである。

エネルギー複合化時代

森 田 茂

人類は、古来、太陽などの自然エネルギーやそれから創られた木材などをエネルギーとして利用してきた。近世に至り、石炭がエネルギーの柱となって十八世紀の産業革命を支えた。十九世紀半ばに石油の発見が相次ぎ、石油は自動車や飛行機の燃料として欠かすことができなくなり、主役は石炭から石油へと移行した。

最近になって、地球環境問題がクローズアップされると、比較的、二酸化炭素の排出の少ない天然ガスが注目されてきた。石炭の固体燃料から石油の液体燃料へ、さらに天然ガスの気体燃料へと比重を移しつつあるが、これらの化石エネルギーは依然として世界のエネルギーの大宗を占めている。

かつて、わが国の一次エネルギー供給に占める石油のシェアが最高の七七%であったとき、一九七三年の第一次石油ショックが襲った。その折の社会の混乱は余りにも急激なものであったから、いまだ鮮明に記憶の中に残っている。

それを契機に、先進国ではエネルギーの節約が始まり、石油の需要動向に鈍化が見られるようになった。国際エネルギー機構（IEA）が石油火力発電所の新設を凍結したために、当時わが国の発電源の六割以上を占めていた石油火力は停滞気味となり、現在は十数%まで落ち込んでいる。

それをカバーするために、一〇%未滿だった原子力発電は今や、三分の一のウエイトをもつまでになった。天然ガス（LNG）を使った発電も急上昇し、五%から二三%になっている。また、かつて急減した石炭も、ここ十年間に少しずつ盛り返している。

このような脱石油の政策により石油のシェアは二十数%の下落をみている。しかし、先進国の中で、わが国とイタリアだけがまだ石油に過半数の依存をしている。

世界的にもエネルギー消費量での石油の割合はわずかながら下降気味になっている。先の石油ショック時には約五〇%あったものが、現在は四二%である。それでも石油の王座は変わらない。

しかも、石油、石炭や天然ガスなどの化石エネルギーが、世界のエネルギー消費量の約九〇%であることに変化がない。二〇一〇年になっても事情はあまり変わらないと予測されている。

さて、地球温暖化には化石エネルギーの燃焼から生じる二酸化炭素などの排出が大きな影響を与えることは今や議論の余地がない。

九七年十二月地球温暖化防止・京都会議（COP3）で、先進国の二酸化炭素排出量の削減が合意されたことは周知の通り。昨年十一月ブエノスアイレスでCOP4が開催されたが、具体的な課題は先送りされている。地球環境問題は複雑な重層的要素が関係してくるために、先進国間はもとより途上国との利害が錯綜している中で、総論から各論への解決にはなお難しい問題が横たわ

っている。

ところで、わが国の「長期エネルギー需給見通し」が九八年秋に改定された。それによれば、エネルギー政策の基本目標は、(一) エネルギーの安全保障 (二) 経済成長 (三) 環境保護 という三Eの達成に置いている。キーワードは「環境調和型エネルギー需給構造への転換」である。

「言うは易く行うは難し」だが、少なくとも、次の二点は地球環境保護のためにも遂行せねばならない。

一、エネルギーの需要構造の変換

産業・運輸・民生用などのエネルギー需要分野での省力化・多様化・クリーン化への変換が強く望まれる。そして、世界一の省エネルギーを達成しているわが国が、更なるエネルギー効率を追求するためにも、環境産業を育てて、環境技術の開発と普及を図る必要がある。

二、エネルギーの供給構造の変革

まず発電のエネルギー源の多岐化と火力発電の燃料選択の適正化 が挙げられる。三割以上の発電量を担って

いる原子力発電では、今後十年間に二十基分の新設が計画されている。最近、石油火力の新設の凍結が解除されたが、火力発電が主力である以上、石油、石炭や天然ガスによる発電の効率化と、クリーン化の革新的な技術開発が急がれる。石油や天然ガスの確認埋蔵量は数十年分しかない。二百年以上もある石炭の有効活用の一つとして、いま石炭ガス化複合発電が注目されている。

また燃料電池や太陽光発電などの自然エネルギーの普及を図り、一般家庭や商業ビルの電力需要を補充する強力な政策も不可欠であろう。

従来のエネルギーの集中生産、大量輸送のシステムから、オンサイトの分散型供給をシステム化するなどの経済社会の組み立てをすることにより、多様なエネルギーの複合化を図る必要がある。

今や、社会経済や地球環境を含めた総合的見地から、エネルギー需給のベストミックスを追究する時代になったと考える。

ヨーロッパの解体と統合と

豊 前 華

一九八九年のコメコンの崩壊

この十年を振り返って、最大の出来事は八九年の東欧の改革であろう。

この年のクリスマス休暇を、私は家族と一緒に、大西洋上に浮かぶポルトガル領のマデイラ島で過ごした。そこにルーマニアのチャウシェスク政権の崩壊というニュースが飛び込んできた。東欧変革の一応の完成である。

避寒地として、またマデイラ酒の産地として有名なこの島は、エリザベート皇后の滞在をはじめ、ハプスブルク家とは浅からぬ因縁をもっている。

ハプスブルク最後の皇后カール一世が一九二二年四月一日、その短い生涯を閉じたのも、この島であった。それから六十七年、その皇后であったチタのお葬式がウィ

ーンのシュテファンス・ドームで、その同じ四月一日、全欧州の見守るなか盛大に行われた。

これを合図とするかのように、この年八九年に東欧改革の動きが加速された。

この変革を決定づけたのは、フランス革命二百年を記念して、パリで七月十四日に開かれたG7によるアルシユ・サミットである。

この会議に先立ち、ブッシュ大統領は変革の進むポーランド、ハンガリーの両国を訪問した。ハンガリー国境の鉄条網をお土産にもってパリに現れたブッシュは、東欧支援をこの会議のメイン・テーマとした。

G7の東側諸国への援助の条件として、

一、言論の自由 複数政党制の採用

二、人権の確立 少数民族問題の解決

の二つが決められた。

その後、九月十二日には、ポーランドの「連帯」主導の内閣が発足し、マゾビエツキ首相が誕生した。

十月十八日には、東独ホーネッカー議長が辞任した。十一月九日にはついにベルリンの壁が開かれた。この日

は、ナチスがユダヤ人商店やシナゴグを破壊した「水晶の夜」にも当たっている。

フランス革命二百年目で、ロシア革命の成果が雲散霧消し、水晶の夜の十一月九日に、ベルリンの壁が開かれる。これは決して歴史の偶然ではない。ある意味で、我々は過去の歴史的な事実から逃れられない。

話を八九年十一月に戻すと、翌十日にはブルガリアのジフコフ書記長が辞任。さらに二十四日には、チェコ・スロバキアのヤケシュ書記長が辞任、と連鎖反応が起っている。

十二月に入ると五日、ワルシャワ条約機構が「ブラハの春」への介入を自己批判し、翌六日にはドブチェク元第一書記の名譽が回復され、一方、東独のクレンツが辞任した。

そして二十二日、ルーマニアまで騒ぎは波及する。二十四日に逮捕されたチャウシエスク大統領は二十五日処刑された。

八九年末までに、東欧諸国は援助の第一条件の複数政党制を導入した。しかも、ルーマニアを除いて、平和裡

に権力の移譲が行われた。

二〇〇六年EU統合への動き

今後の十年を考える上で、八九年以降の欧州での出来事をたどり、その中から将来を占う事件を拾ってみたい。

G7が第二の条件とした「人権の確立」については、ソ連邦に続いて旧ユーゴスラビアも解体し、今なおコンボ自治州では血なまぐさい紛争が続けられている。

一方、西欧諸国を見ると、九二年に曲がりなりにもEUが発足した。旧ユーゴが小国家に分かれ、欧州はEUに統合されるという現象は、一見逆に見えて、実は一つの動きである。

旧ユーゴから分離・独立したスロベニアとクロアチアがEU入りを熱望しているのを見れば明らかのように、旧ユーゴのような多民族国家のままで、単一国家が主権を解消しようとするEUの中に入ることは、不可能なのである。

この九二年という年は、フランスで第一共和国が発足してから二百年に当たる。ここには、フランス革命の鬼子である国民国家を否定しようとする強い意志が働いて

いる。

フランス革命のスローガンである「自由、平等、博愛」の思想は、ロシア革命へと発展した、と共產主義者は考えていた。そして、そのフランス革命から二百年後に、共產主義国家の夢もまた消えてしまった。

このアンシャン・レژیムを復活しようとする動きは、更に今後の十年、国民国家の否定に向かって進むだろう。

八九年直後の旧ユーゴの解体と東西ドイツの統合は、一見逆の動きに見えて、実は民族国家を完成させる同じ動きであった。

次のステップがEUとしての欧州の統合である。この動きに自信をもたせたのが、昨年のロシア経済危機であった。

常識的には、統一を金で買ったといわれるほど、ドイツはロシア経済にコミットしている。しかし、今回の危機は、「大山鳴動して鼠一匹」という望外のラッキーな結果となった。その理由は欧州通貨EUROが安泰であって、ドイツ一国でなく、全欧州がドイツ経済を支える

形となったからである。

少し視点を変えてみよう。いま欧米の株価は史上最高値。これに対し日本の株価は低迷している。その理由を敢えていうなら「空洞化の遅れ」にある。「地球は有限である」という認識が徐々に広がりつつある今日、大量生産、大量消費の文明は岐路に立っている。

「物」に対する「金」の優位を見せつけたのが、今回のアジア経済危機である。実需の百倍を越えるユーロダラーが飛び交う世界で、市場経済とか自由化というお題目がいかに空しいか、身にしみて感じたはずだ。

欧州を見れば、英独仏は社民党か、労働党内閣、イタリアは共産党政権である。

日本人に求められるのは、政治的にも、経済的にも、物の見方を転換することである。

欧州は神聖ローマ帝国崩壊から二百年の二〇〇六年を目標にEU統合に動き始めている。

歩き人生、この十年

Ⅱ生涯プロジェクトの誕生Ⅱ

三 枝 亭

セカンドライフの課題として取り組んできた「歩き運動」は、記録を取りはじめてから、今年で十年目を迎える。一日五万歩、六万歩と積み重ねてきた結果、歩数の累計（九年分）は、四千五百万歩に達した。いつか一億歩にしたいものである。

毎週の土、日曜日や祝祭日には、朝早く家を出てお経を唱えながら歩き始め、これが、いつの間にか週末の行事となる。この歩き運動を実行しないと、なにか物忘れしたような気分になる。この「歩き運動」は今では、もう私の断ちがたい生涯プロジェクトにまでなってきたようである。

幾年か歩き続けている間に、次のような三原則が自然に出来上がった。

1、原則として毎週の土、日曜日や祝祭日は終日歩行とする。

2、歩行時間は、朝八時から夕方七時までとして、雪、雨天でも決行する。

3、歩行中は、一切家族と連絡をとらない。

元来、歩きには自信があったが、終日という長時間の歩きには、当初苦痛のようなものを覚えた。これを解消して楽しく歩けるようになるには、半年あまりかかった。歩きの主要な舞台は、市川、柴又、小岩などを基点とする江戸川と中川の一帯である。この地域の名所旧跡、社寺仏閣などを目標に繋ぎ歩きなどして気分を紛らわし、だんだん長歩きになれていった。

歩きながら、いろいろな歩行プロジェクトの要件を学んだものである。

その第一は、水分の補給とトイレの地図を作ることである。歩きには、十分な水分をとる必要があり、特に真夏には大量の水がいる。このために、今はやりの回転寿司屋は、安くて、しかもお茶が何杯でも好きなだけ飲めるので、歩きには格好の昼食場所である。また、コンビニ

二にはミネラルウォーターのミニボトルも売っている。他方、近年あちこちに公園や遊技場が作られて、そこには水飲み場やトイレなどの施設が整備されてきたので、その場所を覚えていると便利である。

第二は、頑丈な傘の携行である。傘は、雨雪のためのみならず、真夏の厳しい日射から身を守ってくれる。近年、日本人の間にも皮膚癌の発病が増えているので、長時間強い日射を受けないようにと、医者から奨められた。また、冬場は、日没が早く五時には暗くなるので、傘は用心棒になる。夜道で犬を幾度か叩いた。

第三には、天候状態や季節に合わせた歩行のコース作りがある。例えば、早春には流山からの江戸川下りは絶好のルートであろう。他方、真夏には木陰の多い歩道を選ぶ。市川近辺の梨畑や松戸の常盤平にある大樹の並木道、金町の水元公園の森林浴的な遊歩道などは快適な場所である。冬には北風を背にして江戸川をくだるなどして、天候には逆らわない。いずれにせよ、当日の朝、天候を見てコースをきめる。

海外旅行に出て、この歩き運動は続いている。イン

ドやシリアなどに行ったとき、旅行カバンの中に、歩き専用のスニーカー一足を携行した。

一昨年、インドのデリーを訪ねたときである。午後、メリディアン・ホテルを出て街の中心街のコンノート・サークルに向かった。サークルの手前で、若い三人のパンジャブ美人に出会った。大学生らしい。美人たちがサークルに通ずる地下道に下りていったので、私も跡を追いかける。階段を降りて地下道を通り、向かい側の階段を上ろうとした時、不意に靴磨きの少年が声をかけてきた。

「ルック マスター、ダング オン ユア シューズ」と、私が履いているスニーカーのつま先についている牛糞を指差した。その瞬間、「やられた」と思った。牛の入れない地下道に牛糞が落ちている筈がない。ついっかかりパンジャブ美人に見とれていたもので、その隙を衝かれたようだ。

靴磨きの少年を連れて階段を上り、サークルの入口でスニーカーを綺麗に磨かせた。すると、少年が「三〇〇ルピーよこせ」〔円貨換算約一、〇〇〇円〕と、吹つか

けてきた。そこで、大声を張り上げ『おまえが悪さしながら吹っかけるとは何事だ。ポリスへ行こう』と怒鳴り返した。少年が怯んだ瞬間に靴磨きの相場の『一〇ルピ』をぼいと投げ渡して、美人のあとを追っかけた。が、もう姿は見えなかった。ダマスカスやイスタンブールなどでも、いろいろな面白いハプニングに出合った。

振り返ると、歩くことは心身に良薬である。現役時代は、仕事に追われて運動の機会に恵まれず、しかもよく会食が続いたので、中性脂肪やコレステロールの数値が高いなどと、医者から注意を受けてきた。当時、体重は八四〜八五キロもあり、太り過ぎであった。それが、本格的に歩きはじめると六八〜七〇キロに減り、人間ドックの診断結果では「申し分なし」と、好評を頂くようになる。歩き様々である。

歩きは、習い事にもよい青空教室である。長い歩行中に時折、俳句や短歌のよいアイデアが浮かぶことがあり、句会で先生から褒められるようになる。また、難しいアラビア語の動詞やその派生形の暗記のよい機会となり、その難関を突破して、アラビア語の古典の、「千夜一夜」

を読むことができるようになった。

このように、歩きは足腰を鍛えるだけでなく、脳細胞によい刺激を与え、その活性化に役立つようだ。歩きの虜となった私は、これからも歩き続けていくだろう。神や仏のご加護に預ければ『一億歩』の目標達成も可能であらう。

「これまで」と「これから」の 十年を思う

衛 藤 甲 子 郎

毎日のように「高齢化社会」とか「少子長命時代」と言われ続けていると、わが国はずっと昔から長寿国であったかのように錯覚してしまうが、厚生省の資料によれば、一九三五年（昭和十年）の日本国民の平均寿命は男子四六・九二歳、女子四九・六三歳となっている。約六十年前の平均的な日本人は男も女も五十歳まで生きては

いなかったという理屈になるわけだ。

国民の寿命が八十歳前後にまで延びたのはせいぜい十
年来のことで（平成三年に男性七六・一一歳、女性八
二・一一歳）、これが世界の歴史を通じて先進国が初め
て迎えた本格的な高齢化社会の実態である。つまり、現
在高齢者になっている人たちが生まれたころは、人間の
一生は長くても六十歳くらいまでと考えるのが常識だっ
たのだから、教師や先輩が教える処世の指針もせいぜい
七十歳までしか想定されていなかったのも当然だろう。

杜甫は七十歳を「古来稀なり」と詠じ、孔子は「七十
にして心の欲するところに従って矩を踰えず」と説いた
が、更に長生きした場合の処し方については触れていな
い。わが国でも鴨長明が余命の少ないことを嘆じつつ
『方丈記』を書いたのは六十歳になる以前であり、『檀山
節考』の「姥捨て」はたしか七十歳であったことを思う
と、平均寿命が八十歳にまで達した現在の日本国民が
「高齢化社会」に戸惑っている理由は、急速に延伸した
余生をいかに過ごすべきか、先例が見当たらないまま前
人未踏の道を手探りで歩き続けねばならない心細さにあ

ると言っても間違いではあるまい。

思えば焦土の中で貧困と飢餓に苦しんだ戦後から既に
半世紀が経過している。その間、国民は復興のための経
済発展をひたすら追求する一方で、はからずも世界一の
長寿国となってしまうのだ。そして「高齢化社会」と
いう初体験の政治課題に直面しても、長年の経済万能主
義の影響から逃れ切れずに、対策といえは専ら年金福祉
の財政や介護医療費など経済的問題の論議に終始して現
在に及んでいるのである。

一般に人間は生活体験を重ねているうちに物質的充足
よりも更に大事なものがあつたことを自然に会得するよう
になるものだ。まして、現在六十歳以上の日本人は金銭
や物質に対する欲望の制御こそ倫理道德の基本であると
する戦時中の教育を受けて幼少年時代を送った世代であ
る。この歴史的事実に気付かない政治家たちが「高齢者
対策」を単なる経済問題として処理しようとしたのは国
民にとって極めて不幸なことだったと言わざるを得な
い。

「高齢者対策」として、年金の充実や病弱者の介護・

医療の重要性を決して否定するものではないが、同時に、予想外の健康を保って長生きをしたために却って多くの心の悩みを持つに至った老人の存在を軽視することも許されないはずである。

最近ようやく「老人力」とか「老人よ、花と散れ」などという、これまで経済万能主義に堕ちていたことに對するアンチテーゼが社会的に注目を浴び始めている。老人の心の渴きを癒すには年金や介護医療等の物質的援助よりも、彼ら自身が志を高く掲げて自立の心意気を持ち得るように配慮する方がより大切であるとの意見が出てきたのは喜ばしいことだ。

さて、『企業OBペン・クラブ』の創立十周年が近づいてきた。「十年一昔」という言葉もあるように、十年の歳月が時の経過を区切る一つの単位であることは洋の東西を問わず同じ認識らしいが、クラブの発足から今日までの軌跡はちょうど日本が高齢化社会に突入した歩みと重なっている。これを単なる偶然として見逃してしまふのはいかにも惜しい。

創立以来われわれは、及ばずながらも、六十歳からの

『健康達人』、『趣味達人』、『知的生活』など、後輩へのメッセージを世に問うてきた。だが時代は日と共に移り、当時のメンバーもそれぞれに年齢を加えている。老人の喜怒哀楽や感性を最もよく理解できるのは、同じ世代の人間であることは言うまでもない。いま二十一世紀を目前にして、これまで誰も考えたことのなかった超七十歳の人々の心にまつわる「孤独」「憂愁」「葛藤」などについて、われわれ自身の体験に基づいた高齢者の傾向とその対策とを探究し、外見は健康体に見えても、実際には人知れず悩んでいる年老いた人たちの指針となる「道しるべ」を改めて樹立すべき絶好の機会ではないだろうか。

人類には昔から新しい環境に出会うたびに、その真っ只中に身を置く当事者が自ら英知を働かせて難題を克服し、巧みに処理してきた歴史がある。

曾て自動車や電車などの発明によって先進国で人身事故が多発するようになった時、生活防衛の手段として交通信号が考案された。最初のころは文字と言葉による表示だったが、やがて言語・慣習などを異にする人々でも一様に理解できるように、赤・緑・黄の三色をもつて

『止まれ』『進め』などの意味を持たせたことは画期的な発想であった。そして現在ではスポーツにも浸透して、サッカー場では審判が赤いカードを出せばプレーヤーは直ちに退場しなければならないほど、この三色信号の意味は世界中に浸透し定着するに至っている。正にノーベル賞に値する功績と言えるだろう。

事故が多発した国で交通のルールを定める信号が創設されたように、高齢者の比率が世界一高い日本の今後ますます増加が予想される老人群に対して、その余生となる最晩年の安らぎのために心得ておくべき「老いらくのルールとマナー」を『企業OBベン・クラブ』が創案し、アドバイスする責任と資格があると思うのは傲慢に過ぎるだろうか。



長寿はめでたいか

藤 岡 豊

十年一昔というが、一九八八年にこの世を去ったある友人の姿は、今も鮮明に私のまぶたに残っている。

中学時代からサッカーにうち込み、大学を卒業して某製鉄会社に就職、エンジニアリングの分野で華々しい活躍を重ねた。私にとって悪友の一人であったが、ある面では良きライバルでもあった。

その彼が五十五歳の若さでガンに冒され、転移が始まったのである。医者は死期が目前であることを家族に告知した。そして家族は相談の末、本人にも知らせることにきめた。結局、奥さんがその嫌な役を引き受けて、ありのままを告げたところ、彼は何のショックも示さず、ただ「わかってるよ」と答えたそうである。

私が最期に病院を訪れたのは四月の半ばであったが、

彼は実にさわやかな表情で私を迎えてくれた。何も知らない私は、まさかその一週間後に亡くなるとは思ひもなかった。彼にとって未練はあったと思うが、桜の下で惜しまれつつこの世を去ったのである。

ところが十年経った今、現状はどうなっているのだろう。日本全国で何万人もの人たちが、脳がもはや何の働きもしないのに、また意識が二度と戻らなくなっているにも拘わらず、点滴と人工呼吸のチューブで心臓を働かせ、いたずらに生命を永らえさせているのである。

日本の医学は、この十数年の間に大きく進歩したと言われる。結果として、日本は世界一の長寿国にのぼりつめた。しかし、全く意識のない患者を数カ月ほど延命させたからといって、果たして何の意味があるのだろうか。患者の苦しみ、家族の苦しみを長引かせているに過ぎないケースも多い。考えてみると、医学はいったい誰のためのものなのか、疑わしくなってくる。とどのつまり医者と病院を潤すだけの働きしかないのでは、と思えないもない。

長寿は読んで字のごとく、「おめでたい」とされてい

る。百歳以上のお年寄りはこの十年間に増えつづけ、今では日本全国で一人人を超えているそうである。

このうち元気なお年寄りをスタジオに招き、観客を前にしてその達者ぶりを披露させるテレビの番組がある。顔色もよく、司会者の質問にもちゃんと答えるばかりか、ときにはジョークも交えて人を笑わせるお年寄りもいて、見ている人の心をなごませる。

しかし、このように百歳をこえてもなお元気なお年寄りは、どのくらいいるのだろうか。老人福祉のボランティア活動をやっている、或る人にそれとなく訊ねたところ、「まあ二、三百人に一人といったところかな。そもそもあんなに元気なお年寄りがもしたくさんいるようなら、テレビ番組として成り立たないだろうよ」という答が返ってきた。中高年の人たちは単なる興味で見えるかもしれないが、同年代のお年寄りの中には、自らの境遇をかえりみて、チャンネルを変えてしまう人もいるのではなからうか。

老人のこれからは大変だろう、気の毒だ、との同情の声が聞こえてくる。しかし、あと十年ほどはそれ程では

なく、問題はそれ以降つまり二十年、三十年先である。

まずはおカネの問題だろう。日本の経済は低迷期に入つて久しいが、いつになったら抜け出せるのか、見通しは暗い。当てにならない政府の見通しはさておいて、成長率はゼロ・パーセントを維持するのが精いっぱい。少なくとも向こう数年間はマイナス・パーセントとの間を行ったり来たり、という悲観的な見方が強くなっている。

この結果、私的年金は言うに及ばず、公的年金も破綻をきたすのは必至の情勢だ。企業年金のうち、今後解散を余儀なくさせられる基金はますます増えて行きそうである。また確定拠出型年金に切り換える動きが見られるが、これはとりも直さず、受け取る年金額に保証がないというに等しい。資金の運用を誤ったりすれば、雀の涙にまで目減りするのを覚悟しておかねばならない。

しかし、この経済的問題は、ライフスタイルを少し変えさえすれば、何とか乗り切つて行けそう。子供のころから不便に慣れ、粗食に育つた中高年以上の人の体質は強いからである。

問題は精神的な面、言わば心の支えであろう。老人を

支えているのはいったい何なのか。一説によれば、家族すなわち息子や娘及びその配偶者たちが、親のために払つてくれる心遣い、それに若い人たちの活力だといわれる。

今の中高年、年齢にして四十代、五十代の世代はきわめてタフである。敗戦後の混乱をたくましく乗り越えてきた彼らの活力は、高齢者にとって何よりの支えとなっている。

ところが彼らの子供たちが問題なのである。いま街を行く若者たちを見てほしい。美食や飽食に育つて、見からにひ弱な感じをうけるばかりか、若さや強さが全く見られない。言わば若者たちが老化してしまっているのである。

したがって、この十数年はまだ何とかなるかもしれないが、二十年、三十年先が思いやられる。頼るべき世代の活力が失せ、また少子化も進んで家族の心遣いも得られなくなるだろう。よりどころのない孤独なまま、濡れ落ち葉となつてみじめな死を迎える老人が増えて行くに違いない。

さはさりながら、そんな先のことを憂えていても仕方がない。私共シルバー族は心身ともに健全である。まだまだ世のため人のために尽くすこともできるだろう。もちろん往生の時期はいずれ訪れる。ただしチューブは絶対お断り。願わくば花の下で春死にたいものである。

グローバル市場経済の いまとこれから

櫻井 清治

二十世紀を世界政治、経済の面よりみた大きな特長の一つは、資本主義と併存してこの世紀の前半に機能していた社会主義体制が崩壊したことである。特に、東西冷戦終結後の約十年は、思想的には自由、人権を重視する民主主義、経済的には自由な市場経済を基本とするいわゆるアメリカ型スタンダードが世界基準となり、先進国のみならず多くの途上国までがグローバル市場経済の流れ

れにのることとなった。

今や社会主義体制は朝鮮民主主義人民共和国などごく限られた国に残るのみとなったが、旧ソ連邦に代表される社会主義体制の劇的な崩壊はなぜ起きたか。

一つには二十世紀後半に急激に進んだ情報技術の高度化がある。金融工学（FT）とあいまった情報工学（IT）の高度の進歩は中央統制型の計画経済体制では対応できず、自由競争経済体制に適合していたこと。次に人々がこの体制を信じなくなったという人間の精神的モラルの点がある。

旧ソ連邦をはじめ共産主義体制国が崩れるたびに、その政治と経済の実情が想像していたよりもはるかに悪かであったことがわかってきた。一九一七年のロシア革命以来、社会主義という理想を追った夢と情熱は失われ、いかなる体制の下でも、人類の本能である自由と利己心を押さえることはできないということが、二十世紀における資本主義と社会主義との併存という壮大かつ長期にわたる実験の中で証明されたのである。

いま、世界はグローバル市場経済の奔流にさらされて

いる。高度に発達した情報技術によるグローバルゼーションにより、領土と国民、そしてそれを守るべき排他的な主権という近代国家成立の三要件の意味は薄れ、ヒト・モノ・カネのみならず企業、情報、社会現象、犯罪までもが、やすやすと国家の壁をこえるようになった。また国際機関や国際会議での討議、論決は国家の意志よりも重くなっている。いまや対外的国家の観念はグローバル化と共に変わりつつあり、ある意味での仮想国家（バーチャル・ステート）とでもいえるべき脱国家的国家の時代を迎えている。市場は国家より独立し、さらなる効率を求めて強いものはより強くと現象をおこしている。市場経済の主役たる企業においては、最近の独ダイムラーと米クライスラー、ドイツ銀行と米バンク・オブ・アメリカ、エクソンとモビールほか、国をこえた巨大企業同士の買収・合併が次々行われている。自国産業や自国企業という概念そのものが揺らぎはじめ、グローバルイズムは「強い国や企業の論理」ともいわれる面が出ておいて、国家には行政のための規則や福祉・労働政策など、国民との約束を果たすための役割のあることも

ゆらぐ傾向にある。

このグローバル市場経済は二十一世紀にはどうなるであろうか。結論的には、人類が自由を求め、利己心が人間の強い本能である限り、今後も続くといわざるを得ない。

本年（一九九八年）は、一九四八年国連総会で「世界人権宣言」が採決されて五十周年を迎えた年である。この宣言は「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ尊厳と権利については平等である」としている。かつてはもっぱら国内問題とされていた人権が、時のたつにつれ国際社会全体にかかわる問題とされるようになってきた。いまでも人権を国内問題として処理している国もあるが、自由を旨とする人権は国際政治や経済の基本として、ますます無視できない原則となりつつある。

人間の利己心については、一七七六年に出版されたアダム・スミス著「国富論」の最も有名な一節に「われわれが夕食を得ることができるのは、肉屋、酒屋、パン屋の慈悲によるものではなく、彼らが自らの利益を尊重す

ることによる。個人は『見えざる手』に導かれて、彼の意図しない目的を達成するように仕向けられる。公共の利益のために商売するのだと気づいている人たちは、たいてい役に立つようなことはしていない」と述べている。これはいま世界の流れとなっているグローバル市場経済の根源を表現するもので、この思考は二十一世紀にも変わることなく受けつがれるであろう。

考えるべきは「正義の論理」の面と共に「強者の論理」という側面を併せもつグローバル市場経済の負の部分は是正さるべきことである。この意味で、一九九八年のノーベル経済学賞がインド人であるケンブリッジ大学アマーティア・セン教授に授与されたのは意義深いことである。セン教授は、「多くの経済専門家は経済的インセンティブ（市場経済が提供する）を推奨するが、政治的インセンティブ（民主主義が提供する）を無視する。それは極めて不均衡な基本原則を選ぶことを意味する。政治的インセンティブは経済的インセンティブを補完するために必要であり、これを無視すれば私たちが危険にさらされることを覚悟しなければならない」として「自由」

「権利」「平等」の福祉観という経済学の倫理面を強調している。

いまEU十五カ国の中、十三カ国が左派政権である。しかし、これらは国家統制を目的とする、かつての左翼原理主義政権ではなく、ブレア英国首相の「第三の道」に代表されるように、市場経済を歴史の必然と受けとめつつ、これによる負の面（福祉ほか富の再配分）を政治により補完しようとするものである。

二十世紀末約十年の人類の経験は、個人や企業の自由な活動による経済が、より効率的な成果をもたらすことを実証した。二十一世紀においても、このグローバル市場経済の基本が崩れることはないであろう。問題は、よりスピード化する情報と結合した市場経済によって、さらに強く現れるであろう負の面について、国家や国際社会がいかに対応するかであり、これがこれから十年の重要な課題となる。求めらるべきは市場化や情報化を阻止することではなく、グローバル市場経済と政治的インセンティブとの均衡をいかに保つかということである。

傘寿を前に

中 川 路 明

二〇〇九年二月十日、企業OBペンクラブの短歌サロンの集いである。十年前会長の仕事で疲れないかと心配させた北田氏もますます元気である。そのほかの面々も健康の達人。齢を感じさせない。

私もひまができ、数年前から仲間入りした。感性が鈍り、俳句は浮かばない。ボキャ貧でメンバーから辛口の批評を受けるが、短歌サロンなら口でも参加できる。

例会も、プロジェクト・ミーティングも、情報の交換はほとんどEメールで進められる。しかし、顔を合わせ意見をかわすうちに議論がひろがる。木曜日の午後はいまもクラブの楽しい集まりがある。企業OBペンクラブという名前が時代遅れとか議論をしたこともあった。近ごろの出版界はますます多様化し細分化されて、若手

OB、超OBそれぞれの持ち味でアウトプットの場ができた。

化学各社の特許を調査したOBからの後輩に対する提言を売りものにした「化学各社の技術動向と戦略」の編纂は、細かい特許の字が読みづらくなり数年前にリタイアした。お世話になった業界への恩返しのリタイアであった。厚さ六センチ、一冊六万円を超える年刊の大作は十二冊となり、私の本棚の宝である。一年のうち七カ月は週一回集まり、書くことより語り合うことに重きをおいたペン活動であった。

三十年前、いまさらラグビーもできないとテニス始めた。どうも息切れがすると思っていると、成人病検診で心臓がおかしいと言われた。カテーテルによる検診の結果、血管全体が細く、酸素が十分供給されないとのこと。手術などで治せるものでなし、運動は無理で高血圧と糖尿に注意するよう告げられる。ラグビーの古傷の腰、膝のリハビリはしたいし、ぶよぶよの病み中年では困ると医者の説得し、リハビリスポーツクラブに入った。

二〇三高地で名高い児玉元帥の曾孫で、体育大を出た

ばかりのお嬢さんに、ばた足が少ない省エネクロールを一から習った。彼女の早く亡くなった父親は、私と同時に代の慶応のスクラムハーフであり、奇遇に驚く。

いまも週に二回は近くのスポーツクラブに行く。インストラクターの作ってくれるリハビリプログラムは三十年間ほとんど変わらない。最近すこし負荷を下げた程度で、歳をとった分を考えると健康増進になったいえる。泳ぐ距離は減ったが、アクアウォークといって、プールの中を歩く。浮力で体が軽くなりつまずく心配もなく、立つことさえできる人なら、いつまでも続けられる水中散歩だ。顔なじみと話をしながら二十分近く専用コースを往復する。

気功と太極操は、自分の体調に合わせて体を動かすだけでよい終身フィットネスである。体の中から温まる気持ちの良さのとりこになっている。

退職して、高齢者の手助けになればと社会保険労務士の資格をとり、年金相談をはじめた。一九六一年にはじまった国民皆年金の制度は、国民によい顔ばかりした放漫政策の過剰給付のため、平成不況と共につぶれると騒

がれた。高福祉政策の先進諸国は一斉に給付を引きしめた。日本では、省庁間、政党間、受益者間の縄張り争いから本質的な議論もせずにむだに時間を費やした。

問題は自営業者や被扶養者の国民年金で、保険料不払者が多く、財政の破綻は明らかであった。社会保険方式の積立金運用の権益を手放したくない厚生省は国庫負担の増額にこだわり、政策サイドも消費税アレルギーで、世界の大勢である税方式に踏み切らない。

景気の下げ止まった二〇〇二年ようやく税方式とし、基礎年金は崩壊を免れた。使途面での不安定さを防ぐため福祉目的税と名付けたが、未整備で発足した介護保険をはじめとする社会保障費が増えたため、基礎年金の実態は老後の生活充実の防貧というより、生活保護の救済に近いものとなった。

サラリーマンの厚生年金・共済年金の財政不安は給付と負担の調整で解決した。厚生年金基金は高金利時代に差益で乱投資した厚生設備を処分し、天下り幹部を退陣させ危機を切り抜けた。

経営者も勝手なもので、かつて税の優遇にひかれて作

った基金が負担増になると確定拠出の年金を推進した。米国の四〇一K同様の株価上昇を政府と一緒に頑張って買ったと勘ぐられても仕方がない。鐘、太鼓で拠出型年金をスタートしたが、サラリーマンは自己運用の知識や自己責任の觀念が乏しく、掛金方式の基金時代より運用率が下がった人は多く、虎の子の年金資金を減らしてしまつた人までいる。積立方式は物価スライドがなく消費者物価の上昇も気になりはじめた。

基礎年金番号の採用、税方式とした基礎年金の簡略化、厚生・共済の制度間の統合、情報システムの発達により数年前から年金相談の必要は減つた。一方、積立方式の拠出型年金が普及し、年金社会保険労務士の仕事は積立金の運用相談が主になっている。いま私は年金相談とは無縁になり、おかげで時間の余裕ができた。

マスコミが年金崩壊を叫んだとき、国民年金から個人年金に切り替えたり、保険料を滞納する人に公的年金の安全性を年金相談で説いた。いまとなつて無年金を免れることができたと感謝されている。

傘寿を目前にし、家内も達者である。お互いの生き方

を大切にした二心二体の毎日であつたが、最近は並んで歩く二人四脚も多くなり、そのうちに二人三脚で助け合うことになるだろう。

『この十年・これからの十年』

今 村 亮

一、はじめに

退職五年目（私には即帰国五年目）の元旦を迎える。逆カルチャーショックの克服に二年かかり、やっと退職時に作成したDO LISTに眼が届く昨今だ。それにしても、不景氣覚悟で帰国した日本はますます悪化の度を増すばかり。今年はその最低の年となった。

海外移住する日本人が増えているのに何故好んで帰るのかと米国の友人が不思議そうにたずねた。同じころ、早期退職して日本人の奥さんの出身地に帰化した米人と

知り合い、同志を得た思いで意を強くした。確かに八方ふさがり、せちがらい日本にいるより、風通しのよい米国で自分を試すのもよい。「アメリカン・ドリーム」「ノモ・フィーバー」だ。

帰って間もないお正月に阪神大震災がおきた。陸の便も空の便も大混乱。その後のオウム・サリン事件の発生で日本の安全神話も地価バブル同様吹っ飛んだ。今年は国際信用機関から銀行などの格下げを受け、信頼と尊敬の的の日本が見放され、相手にもされない、そんな危機感に襲われ続けた。日本は、もはや夢の国でも安住できる国でもないのか？

二、ドリームランド

DO LIST #1の中国語学習の関係で中国人留学生数人と付き合った。一人は電子工業省の役人をやめ、私費来日。優秀なので私の元の会社の中国子会社に推薦した。

しかし、中国でなく日本で就職したいと言う。理由を訊くと「日本は未来を先取りしたデイズニールランドだ。こんな素晴らしい国に住みたいし、働きたい」。事実、大学院卒業後、地元カーナビメーカーに就職。もう一人

の友人も名古屋の工業試験所研究員として旅立った。

中国には別にペン・フレンドができた。みんな機会があれば日本語の勉強に来日することを夢見ている。うち一人は、希望がかなって東北の農場研習に来日した。味をしめたのか、今度は本格的な日本留学を願っている。

労働人口の移動は世界の趨勢だ。タテヨコに交流が進む。ボーダーレスのはずだが、どっこい関門はある。一つはNAFTA、ユーロに象徴される地域経済圏の到来だ。日本はどこに入るのか？

三、カントリー・ダウンアンダー

DO LIST #2、「オーストラリア旅行」から学んだことである。九七年十一月のある夕方（初夏の候）、ブリスベーンで泊めてもらった友人の長男、ロバート君の卒業式に招待された。

二年制のカレッジで、ホテル、旅行、保険、看護等実務専門学校で、ロバート君は市内の保険会社に勤めるかたわら、保険科に通学していた。開会・閉会式は赤い儀礼服をまとったオーストラリア軍隊ロイヤル・マーチングバンドのジャズ演奏。華やかな米国の卒業式を数倍

上回る。五百名の卒業生のうちオーストラリア人はマイノリティー。八割以上が外国人学生であった。シンガポール、マレーシア、タイ、ベトナム、インド、中国、台湾、韓国、日本と続く。日本人の卒業生は三十名を数えた。

会場は市の中心のシティーホールを借り切り、壇上には色鮮やかなケープ、ガウンのホスト役女性学長ほか教授連、商工会議所代表、ビジネス後援者が居並ぶ。名前を呼ばれた卒業生は一人一人壇上の学長と握手して卒業証書を受け取る。会場には遠路飛来した両親、兄弟と下級生が列席していた。

キャンパスは風光明媚なゴールドコーストはじめ各所にあるようで、これはブリスベーン地域全体で盛りたてる大プロジェクトに違いない。これこそ、日本が見習い、お株を奪ってでも挑戦すべき良例と感心して帰国した。

四、留学生十万人計画

留学生統計をインターネットで調べてみた。外国に出入る日本人留学生総数は、九五年度十六万五千人。日本に迎え入れる外国人留学生総数は同年度五万四千人であっ

た。三対一で極めてアンバランスである。ちなみに、留学生が最も多く集まるのは米国で、三十万人を超す。二番のフランスは十万人だ。

この十年の留学生受け入れ推移は九〇年初頭の三万人から激増し、九五年、前述の五万四千人に達したものが、これがピークで、九六年は五万三千人と下がり、足踏み状態だ。

文部省ホームページ英文版〈<http://monbu.go.jp>〉に「留学生十万人計画」が颯爽と出ている。調べてみると、実状は次の通りだ。

一九八三年、当時の中曽根首相が東南アジア諸国を訪問し、日本留学経験者と話した際「皆さん、そろそろ子供さんが留学の年ごろを迎えますが、日本に留学させますか」と聞いたところ、色よい返事が返らず、これにショックを受けた首相が帰国後に、これではいかんと一喝し、急遽作成させたプランだそうだ。

目標は二〇〇〇年前までに十倍（八三年当時は一万人）の十万人に増やす掛け声であったので、目下達成率は五〇％である。

日本は少子化が進み大学進学者が激減する。この減少数が皮肉にも十万人と出ている。まさに天運ではないか！ 十万人の余剰キャンパスと十万人の余剰宿舍が利用できるとの朗報である。

日本留学希望者は中国留学生の例のように大勢いる。五〇%という法務局の許可率もその象徴だ。今や産官学が主体となり地方自治体とNPOを巻き込み、留学生受け入れ旋風を起こそう。我々OBも喜んで参加しよう。

五、おわりに

私は米国で長男の大学卒業式に出席した。席上、卒業生に中国姓が多いのはサンフランシスコに近いためと独りぎめしていたが、そうではなく州立大学だと、どの大学でも東南アジア系学生が多い。彼らがシリコンバレーのブレン源となっていることも考え合わせ、これからの十年の外国人留学生受け入れを振興したい。その芽は五年以内には出るだろう。

私が日本を脱出するとすれば、それからでも遅くはあまい。ただ体力に自信があればだが。

第五の人生 自己実現に向けて

深尾 嵐山

「秒刊誌」の時代——はじめに代えて

新世紀は、マルチメディアの時代であり、インターネットの時代である。これまでの「月刊誌」や「週刊誌」の時代から、世界中の誰もが瞬時にアクセスできる「秒刊誌」の時代が、いままさに始まろうとしている。

低成長、産業構造の転換、産業の空洞化、高齢化、少子化などの言葉が、国民それぞれの思いを乗せて、独り歩きしている。日本経済は大丈夫か。ここまでは考えて、ふと思った。

日本経済は別格として、自分自身は大丈夫だろうか。激動する内外の環境変化の中で、自分や家族はどのように対応していけばよいのか、生き残る道はあるのか、

人生の勝利者として、幸福感につつまれて、終着駅に着けるのか。なんとか着きたいものだ、と強く思うようになった。

粗大ごみ、ぬれ落葉候補——この十年——

戦前、小学校に入り、戦中、国民学校を卒業し、戦後、中学校（旧制）、大学（新制）を卒業した。その間、「修身」を学び、老人に親切に、両親には孝養をつくし、上司や先輩の命令には絶対服従を、と教えられた。そのためか、目上の人に褒められると、大変名誉なことだと単純に喜んだ。

この「心情」は、終身雇用制のもとで三十二年間、基本的には変わることなく、給料を稼がせてくれる「会社（私の場合、金融機関）」に忠誠を誓った。国内は勿論、海外に転勤しても、常に個人の生活の前に会社の仕事があり、「お家大事」と品行方正の毎日。最近、定年退職した親友が、「生まれてはじめて、夜、丸の内で赤信号を渡った、俺は自由だ！」と頬を紅潮させていたが、他人事とは思えなかった。「……彼は、自己責任で赤信号を無視したのだ」と納得した。

さて、自分にとってサラリーマン生活が、たとえ管理職や役員になっても、束縛の毎日であったとすれば、この十年間は、徐々に拘束から解放され、より自由かつ充実した人生・生活を取り戻す時期に向かって軟着陸できた期間であった。

社会に出てから、最初の三十二年間を第一の人生とすると、その直後のメーカーでの、さほど変わりばえのない六年間が第二の人生、次に自ら選択した経営コンサルティング業の経営者としての六年が第三の人生。一九九七年秋、すべての役職を退き、独りのコンサルタントとして歩みだしたのが第四の人生。より自由な時間、好きな勉強会、OBの会などに好きなきとき参加し、刺激をうけて帰宅する。けだるい夏の日の午後、ガラガラに空いた郊外電車は楽しく、最高の気分である。

畢生の仕事——これからの十年——

「ひっせいの仕事」、要するにライフワークのことであるが、驚いたことに（私だけかもしれないが）広辞苑第二版（昭和四十四年）に「ライフワーク」という英語が日本語として認知されている。『あなたのライフワー

クはなんですか』とよく聞かれる。ライフワークが話題になることが多い。私のライフワークについて考えてみた。あれもこれもというB型的発想を収斂する時期がきたと思う。

エイブラハム・ハロルド・マズローによると、人間の基本的欲求は、下から順に、生理的欲求、安全・安定性欲求、所属・愛情欲求、尊厳欲求、自己実現欲求が階層をなしており、まず低次の欲求が満たされると、一段上の欲求が高まり、次第に高次の欲求へ移行していく。ただし、最高次の自己実現欲求だけは完全に満たされることなく、拡大し続ける、という。これだ、と思った。自己実現、フレッシュな語感である。自己実現こそライフワークの目標になる。

これから十年、好きなことをやりたい、と思うだけでは全く無意味である。ぬれ落葉という汚名をきせられずに、毎日外出を楽しんでいるだけでは佗しい。やはり、目標を持つことだ。心理学者によると、いたずらに定年後の人生の感傷にひたり、ぬるま湯を楽しむ日常から早期に脱出して「……人生の運転席に自分がしっかりと座

り、自分が自分自身のリーダーになるためには、考え方を变えること」だという。「よし、具体的なことを考え、実行しよう。第四の人生の方向修正をしよう。よりよき第五の人生のために」。

実は、一九九八年正月、自分に刺激を与え、変身するために、次の三目標を決めていた。

①日々の感動を五七五七七の短歌に詠む（感動のない日常を反省して） ②ペンネームを決める（変身のため）
③自分の経験を若い人に伝える。書くだけでなく、語りかける機会をつくる。

シルクロードへ——おわりに代えて——

前項に述べた三目標のうち、この執筆の段階で、二目標が実現した。

①短歌は、良き師と先輩に恵まれ、四月にスタートした。②ペンネームを「嵐山（らんざん）」と決めた。五月に北京訪問の折、故宮博物館の廬長在先生（北京工芸美術学会会員）から、「嵐山は、青々とうるおう山気、青嵐というがごとし」というお墨付きをいただき、即刻、印章をつくった。いま住んでいる武蔵野に比肩する、生

まれ故郷の京都嵯峨野を代表する嵐山（あらしやま）への深い思いが、このペンネームには秘められている。③については、熱を入れつつある各種社員研修への参画に加えて、「学校教育」にも積極的に貢献できないか、具体的には、大学の教壇に立てないか、検討をはじめている。

本稿を終わる前に、さらに二目標を追加したい。第一は、二〇〇一年三月二十二日（七十歳の誕生日の前日）、一九七三年に取得したイギリスの運転免許証の期限が切れる。妻と一緒に、更新の旅に出よう。第二は、最近習い憶えた自己実現のための「自己宣言（アフアメージョー）」の手法を使ってみる……目標の達成をイメージして、一人称現在形で「私は、七十六歳の今日、妻と一緒にタクラマカン砂漠の町カシユガルに滞在し、マルコ・ポーロの足跡をたどる至福に浸っている（注）」。

（注）本来の「自己宣言」は、人には言わないのが原則。七十六歳は金婚式の年。

世紀末ニッポン

中川 十郎

一、若者社会

夏から腰痛のため病院通いで四カ月苦勞をした。そのおかげで日本の政治が高齢化社会を声高に唱えているわりには、高齢者や身体障害者対策が遅れている実情を痛感させられた。

駅、わけても旧国鉄JR系の駅のエスカレーターの設置の遅れに驚いた。日本の社会システムが元氣な若者や、健康な人間中心で、高齢化社会到来への対策が十分でないということだ。

地下鉄の乗換駅で歩かされる距離も、ジョキングや万歩計歩行者並みで、足の不自由な人には泣きたくなるほど遠い。使用する人の立場でなく、造る側の論理がまかり通っている。顧客満足社会でなく、旧態依然たる供給

者満足型社会構造なのである。

車内に入ると、「シルバーシート」とは名ばかりで、五体健全な若者が我がものの顔に占拠している。ケイタイ電話は大声で使いたい放題。騒音をまき散らす車内放送は幼稚園並みだ。

乗換駅を、百年一日のごとく、声高に放送する。駅では、それに輪をかけ「列車が入りますので危険ですから白線の内側で待ってください」。日本の社会はいつから幼稚園児や若者社会に成り下がったのだろうか。マッカーサー占領時代の「日本人は十二歳」以来、金儲けに血眼になって来て、人間としての成長は止めてしまっていたのではないか。

「九カ月の子を背負った男性が男の乗客から席を譲られたことは一回もない。女性や若い女性から席を譲られたこともまれ」（天声人語）というのが昨今の日本社会の実情だ。私も四カ月、杖を片手に痛む左足をかばいながら、車内の吊り革につかまって職場に通った。見兼ねた女子学生が席を譲ろうと申し出てくれたのは一度だけだ。「人を思いやる」、「弱者をいたわる」というあの日

本の美風、美德はどこへ行ってしまったのだろう。

日本の代表的な航空会社N社のフライトで、びっこを引きながら重い荷物を持つ私に、機内の入り口で二、三人で笑顔をふりまいていた若いスチュワーデスはひとりとして助力をしにくれなかった。それに引き換え、十月欧州旅行の際乗ったSASの親切な配慮は、カウンター、機内とも徹底していた。左足が痛い私のために、左側の通路席を用意してくれ、機内では、スチュワーデスが荷物の上げ下ろしを手伝ってくれた。私はこの旅で受けたSASの親切を終生忘れないだろう。

モノ捨て社会

この秋、スペインのマジョリカでの「対日貿易拡大策」講演の帰途、スウェーデン・ルンド大学大学院の「グローバルビジネス情報会議」で講演するためルンド市のConcordiaホテルに二泊した。このホテルのバスルームに掲示してあった次のことばは私に衝撃を与えた。

We care about environment

Towels hung back mean ; I will use it again.

Towels on the floor mean ; please change.

（私どもは環境に留意しています。元通りつるしてあるタオルは 私はこのタオルを再度使う ことを意味し、床の上におかれたタオルは 取り替えてくださいを意味します。）（筆者訳）

要するに「一回身体を拭いただけで、まだ使えるタオルは省エネのために何回も使って欲しい」という願いと解釈される。私は宿泊中の二日間とも取り替えず、同じタオルを使った。

更に驚いたことに、洗面所には固形石鹸ではなく、ビンに詰めた液体石鹸が置いてあった。次の宿泊客も、この液体洗剤を無駄なく使えるシステムになっていたことだ。残り三十センチのトイレットペーパーも、ていねいに折りたたんであり、紙も節約して大切に使いましょうとの気持ちがひしひしと感じられた。スウェーデンといえば森林大国で、世界第三位の紙パルプ輸出国でもある。その資源大国が草の根の段階から省資源に努力していることに感銘を受けた。

それにひきかえ、わが日本は石油、ガス、鉄鉱石、石炭、木材、食料、食品、繊維原料などほとんどの資源、

原材料を輸入に頼っている。その日本がネオンサインは夜通し点け放し。スーパーで売れ残った生鮮食品弁当はほとんど捨てるという「モノ捨て文化」に浸っている。これでいいのか。北欧の福祉国家、未来を見据えているスウェーデンを見習うべきではないか。

三、官・勤社会

自称経済評論家、国際政治学者や金融、証券、財閥系シンクタンク、マスコミで忙しいアルバイト学者や、政府寄りの研究機関などが、年末になると競って結果に無責任な翌年の経済予測を出す。とくにひどいのが政府の経済見通しに責任を持つ経済企画庁だ。

我が国の経済政策策定の基礎となる経済見通しは、日本全体の経済運営に最も重要な指標であるはずだ。にも拘らず、これまでの最悪の予測は官僚あがりの前経済企画庁長官が出した九八年の「桜の花の咲くころ日本経済は間違ひなく好転する」だ。一九九八年を二〇〇一年に先送りしてもおかしくない数字だ。同長官のいい加減な官製大本営発表予測は厳罰に値する。

鳴り物入りで登場した堺屋太一長官は、官僚をスピン

アウトした後、著述業に専念し、実体経済やビジネス現場の経験がない、いわゆる経済評論家あがりだ。

同長官は、狂ったことがないという自慢の「勘」で一九九九年の日本の経済成長率をプラス〇・五％に決めた。OECDやIMFがこぞってマイナス成長を予測する中で、九九年にプラス成長を達成できねば「官と勘」の外れの責任を取り、長官を辞任すべきであろう。

これまでの十年、これからの十年

新 井 進

一。これまでの十年を回顧

今二十世紀の特徴は、技術革新と大量生産の普及であり、十九世紀に得た石油と電気を使って数限りない発明発見を果たした経済発展の世紀であった。その反面、CO₂などの環境汚染物資をグローバルな規模でまき散ら

したことも記憶にあたらしい。

十年前の一九八九年には平成元年がスタートし、海外ではベルリンの壁が崩壊、東欧諸国の共産党指導者が退陣した。以下年代順に事件を追ってみよう。

九〇年にはイラクがクウェートに侵攻し地域紛争に発展。九一年には、大手銀行による金融不祥事が続発。その年一月に米軍を中心とする多国籍軍が反撃を開始した。翌九二年、民主党クリントンが第四十二代の大統領に当選。地球サミット（国連環境開発会議）がブラジルで開催。九四年の日本の政界は目まぐるしくリーダーが変わった。

細川内閣が八カ月の短命で辞任、その後の羽田内閣も二カ月で、次いで村山社会党委員長が首相に指名された。九五年一月に兵庫県淡路島近くを震源とする阪神大地震が発生した。九六年、米大統領選挙でクリントンが、ロシアではエリツィンがそれぞれ再選。日本では住宅金融専門会社（住専）処理のため多額の財政資金が投入され、また同時に関連六法案が成立。九七年初頭にロシア船籍タンカーによる大量の重油が日本海沿岸に漂着し、

深刻な環境問題に発展。また山一証券、北海道拓殖銀行（拓銀）、日産生命、三洋証券などの大手企業の倒産が相次ぎ発生。海外ではロシアの金融不安から東南アジア各国が影響を受け経済打撃をうけた。

九八年、日本では橋本内閣が辞職、小淵内閣が発足。財政改革法を棚上げして経済不況に対する大型減税、公共投資の前倒しなどを実施。しかし、企業倒産、失業率は過去最大を記録。年末近くに米英両軍によるイラク空爆。米国では日本と対照的に、株式が史上最高値を記録し好況を謳歌する。

二。これからの十年は

九七年末の地球温暖化防止京都会議（COP3）で、地球規模の環境破壊の一つである温暖化を防止するため先進各国の削減目標を決定した。この会議の決定をうけて、日本は温暖化ガスの総排出量を二〇〇八年から二〇一二年までの間に九〇年比六％削減することを約束した。その具体策として次の項目が挙げられる。

（１）石油、石炭エネルギーの消費削減

（２）

天然ガス、原子力、水力、地熱そして新エネルギー分野の開発―太陽光発電、太陽熱利用、風力発電、廃棄物発電および熱利用など―

このような政府指針をうけ、経団連は「環境自主行動計画」を発表し、三十九業種の技術的経済的対策を明らかにしている。例えば、鉄鋼業界ではCO₂対策として二〇一〇年までに三兆円を投入して九〇年比で一・五％の省エネルギーを目指す。具体的に原子力発電を中心とするベストミックス、自然エネルギーの開発、電力設備の効率向上などをあげている。そしてその成果を毎年フォローアップすることになっている。

また、別の観点より推進されている国際的環境システムの世界基準の「ISO 14001」に取り組む企業の数が増えてきている。F社の場合は国内は勿論、海外の工場施設などすべてにわたり取得を義務づけている。発売から十三年経過する「写るん」は再資源率一〇〇％といわれる。将来は単に売るだけでなく、環境問題に対する企業の態度が消費者の判断の一つになる。またビール

業界のA社は大量生産、大量消費、大量廃棄からの脱皮を計り、全工場に対し廃棄物ゼロ、省エネの推進、温室効果ガスの抑制、容器リサイクルの促進、環境管理システムの充実などの目標をあげている。ほぼ十年で達成可能という。

自動車は排出ガスの点から環境問題に密接に関係している。日本政府は、ガソリン乗用車の燃費を九五年比で二〇一〇年までに約二三％改善する方針を発表している。それをうけて大手メーカーは燃費効率の向上とCO₂排出削減に取り組むことにしている。

例えばH社の場合は、▽既存エンジンのさらなる向上▽完全燃焼技術の高度化▽車体の軽量化などである。またT社はエンジンと電気モーターを併用するハイブリットカーを発売し、注目をあつめている。しかし、究極のクリーン化と省資源を目指した理想的な車は、燃料電池自動車と称され、二〇一〇年までには実用化されよう。

現在、世界で生産されている化学物質は約八万種類ともいわれ、その生産量は四億トン以上で、この二十年で二十倍に急増している。環境保全にたいする課題は、オ

ゾン層破壊、地球温暖化、ダイオキシン、環境ホルモンなどに対する課題である。化学物質の安全管理には▽ハザード（危険）の評価▽リスク評価▽リスク管理の三点に集中される。化学メーカー以外の半導体企業などが、自主的に化学物質排出、移動登録制（PRTS）を採用し、数千種類に上る化学物質の情報をデータベース化し、管理の徹底を図っている。

戦後の日本の復興を支えた柱の一つに住宅産業がある。今後二十一世紀に向けて想定される課題は「省エネ」「耐震性」「バリアフリー」であり、そのキーワードは「高断熱化」と「高機密性」であり、建設省も省エネ基準を作成中といわれる。省エネは「熱損失係数（Q値）」、「機密性は「相当隙間面積（C値）」を一戸ごとに表示する方法を提案する。建設省は十年後の住宅の冷暖房エネルギーを二〇％削減することを目標とする。そのころには、同時に耐震性、バリアフリーも解決されているだろう。

これからの十年、私の夢と希望

東 与 一

今年、昭和天皇陛下が崩御、いまの天皇陛下が即位されて十年になる。小渕恵三官房長官（当時）が、元号「平成」を発表し、竹下登首相が退陣したのも十年前。企業OBペンクラブの設立も十年前。昭和天皇の崩御を除けば、目出たいづくしである。しかし、この十年間には事件、事故や政治不信、汚職や官僚の不祥事等が多発した。住専・信用組合・生保・証券・銀行などの破綻。阪神大震災、オウム真理教による松本・地下鉄サリン事件、生首を学校の門にさらした殺人事件、和歌山毒物混入カレー事件などがあった。

世相はみだれ、経済は沈滞し、政治は混迷が続いている。我が国は今、不況のどん底にあり、危機の状況だという。

この状況を克服するためには、言論・マスコミ界が、景気回復へのキャンペーンを展開して世論喚起を促すと同時に、政治的には税率の恒久的な引き下げや、金融システムの安定、景気浮揚の足かせとなる因子を排除するなどの改革が必要ではないだろうか。この不況は戦後最悪といわれ、「平成不況」として国民の気持ちを苛立たせている。

不況脱却、経済再生を天命として発足した小渕内閣もいたって評判がよくないので、国民の苛立ちはますます募るばかりである。一日も速い好景気の到来が渴望される。

さて、十年前の私は、沖縄で何の変哲もない生活をしていて。将来の夢とか、生きがいとか趣味活動とか、全く考えたことがなかった。味気のない暮らしだったのである。ましてや、沖縄の政治、経済の盛衰など気にすることもなかった。ただ、鮮明に覚えているのは、年号が昭和から平成に変わったことである。今つくづく思うと、元号「平成」を発表した人が小渕恵三で現在の総理大臣だ、ということである。この平成不況は、小渕恵三に始

まったということなのか。因縁とはこわいものだ。

十年ひと昔という。私の今日までの十年間は沖繩三年、東京七年である。

私の東京での生活の始まりは、平成三年八月からである。そもそも、東京への転居のきっかけは、定年退職した時、その後の生活を維持して行くことにいささか不安があり、この不安を解消するために役立つ技能資格を取得したいという思いからである。そのためには東京へ行って勉強したいという思いも要因であった。東京へ行けるなら、東京での仕事は何でもよかった。折あるごとに職安に足しげく通い、ようやく警備会社の社員寮の管理人に採用が決った。次はどのような資格に挑戦するかである。どのような資格だったら自分に取れるのか毎日思案した。その結果決めたのは、こともあろうに「司法書士」だった。いろいろ調べてみると、すこぶる難関のようである。それでも挑戦してみようと思っていた。

こうして私は意気揚々と単身上京したのである。女房は一月おくれて東京に来了。夫婦二人の新しい生活が始まった。

東京での生活は快適だった。人が多い。せかせかしている。他人かまわずなところは、のんびりずムの私にとっては少し不満であったが、納得するのに時間はかからなかった。

一年間は一生懸命仕事に打ち込んだ。そのかいあって、他人にも馴染み、東京にも馴染んだ。

平成四年四月、いよいよ専門学校へ通う時がきた。学校は、新宿区新大久保にある東京日学院。通学日は毎週土曜日。ついに、司法書士を目指しスタートを切った。一年間がむしやらにみっちり勉強した（自分ではそう自負していた）。しかし、受験するのにはまだまだ勉強不足・力不足であることを学内の模擬試験でわかった。それでも二度挑戦したが、実ることはなかった。落胆の日々が続いた。

そんなある日、上智大学の公開講座の受講生募集の記事を新聞で見つけ、即応募し、受講が叶った。「サラリーマンのための生涯学習考」という講座だった。「生涯学習」という言葉は沖繩ではちよくちよく見聞していたが、どのようなことを学ぶ「学問」なのか理解出来ずに

いた。それが東京で改めて生涯学習の文字を目にすると、なぜかひかれるものを感じた。講座は週一回金曜日の午後六時三十分から始まることになった。

受講生は二十六名。応募者多数のため抽選したと言う。講師は同大学文学部の香川正弘教授で、やさしい先生だった。授業は二カ年に及んだ。講座終了時には同窓会が結成され、「四谷会」と命名された。会員は二十三名。毎年一回同窓会があり、その時は全員が顔をそろえる。楽しい一日となる。

その後、大学の生涯学習ゼミ生、大学院生、卒業生、関係教師、四谷会員の合同で「紀尾井生涯学習研究会」が結成され、たゆまない活動を続けている。

この研究会は、年一回会員の研究発表と外部から講師を招いて講演会を催す。この発表・講演会に、企業OBペンクラブの森田茂事務局長(当時)を講師として招き、講演をしてもらった。これが縁で、私は企業のOBペンクラブへ入会させてもらった。多士済々の知的生産集団で学習し合えることは、私にとって大変な誇りである。いつしか生涯学習という学習の醍醐味に酔いしれ、司法

書士への希望はいつしか消えていた。こうして私のこれまでの十年は終わった。代わって、これからの十年がスタートする。これからの十年は、書くことと心の癒しをよりどころに、夢も希望もある十年にしたい。

私はかねがね、自分がこれまで学んだこと、経験してきたことを、どのように世にフィードバックするかを常々考えていた。その帰結として、小説、エッセイ、論文等を発表したり、百カ所の寺社めぐりを果たすことと、最終的には、終の住み家ともなる施設^{ホーム}を造り、私と境遇を同じくする人たちとの交流の場とすることに辿りついたのである。もとより他人の生き方を干渉するつもりはない。人にはその人固有の生き方があり、人生がある。私は私なりの生き方で、有意義な人生を次の十年につなぎたい。

人生に理屈はいらない。夢が、希望が叶うか否かは、無病息災にして悔いのない残生を過ごすことにある。

今後の十年

松浦 武弘

これからの十年を考えると、自分が過去をいかに生き、どのような価値観を持ち、現在、将来をどう考えているかによって、おのずから十年後の自分の姿が決まってくるのでは無かるうか。

人間は本性的に非連続を好まず、現状が永遠に続くがごとく思いたいものである。しかし我々が死を迎える如く定年も必ずやってくる。

私は、定年後の人生こそが自分自身の最終仕上げの時期であると確信しており、このダイヤモンド・エイジを輝かせたいと思っている。私は、現在五十九歳であり、一年弱に迫った定年前に「定年に乾杯」と胸を膨らませている。その時、こんな挨拶状を出そうと思っている。

挨拶状

拝啓 秋風が心地よい今日このごろですが、いかがお過ごしですか。

私儀、このたび三十五年余り勤務しました、伊藤忠商事（株）を、九月三十日をもって定年退職いたしました。サラリーマンの定年後の生活で「晴耕雨読」が最高とはいえ、二十歳以降ペンより重い物を持ったことのない、我々インテリが、離島や離村で力仕事が出来たわけもなく、せいぜい野菜畑を耕すくらいが関の山であり、また人と隔絶して読書三昧というわけにもいきません。

一九九八年五月、私は「企業OBペンクラブ」に入会しましたが、当クラブは商社・銀行・メーカー等一流企業のOB八十余名から成り、七十歳前後の知的好奇心旺盛な、若々しき紳士たちが主導する集団です。加えてほとんどの方々が海外経験豊富であり、国際的視点よりの話は示唆に富んでおり、仲良し老人クラブという雰囲気は微塵ありません。

現在、私は伊豆の山中にセルフビルトでログハウスを

建設中ですが、一碧湖より五分の所です。ぜひ、お立ち寄り下さい。

「我が庵は 富士山遠く 富戸近く

伊豆の瞳碧 湖畔にぞあり」

「大学に 二年遅れし お陰をもつて

他人より早い 定年祝う」

敬具

平成十一年十月吉日

伊東市十足池の端六一六一二一六

「イトーピア・一碧」内

碧醉亭三楽

ヒンズー教では、人生を学生期・家住期・林住期・遊行期と四分割するが、私もこれまで歩んだ道を、今後も含め四分割して考えている。

学生期

私は昭和十四年広島県の瀬戸内海の小島・大崎上島に生をうけた。五歳の時、戦争未亡人になった母は、祖母のもとで小学校の教師をしながら私と妹を育てた。祖

父母が農業に従事していたので、私は嫌で嫌でたまらない農作業を手伝わされた。

高校時代は大阪で過ごし、二年の浪人の後大学四年間は京都で宇治寮・吉田寮で寮生活を送り、幾多の生涯の友に出会った。

家住期

入社五年目の昭和四十三年五月より十月末まで繊維機械拡販のため、カンボジア、ベトナム、タイ、パキスタン、香港に出張し、意気揚々と帰国したが、既にパキスタン・カラチ駐在が内定していた。昭和四十四年五月に結婚し、七月にカラチに赴任したので、私の結婚生活はカラチでスタートしたと言っている。

昭和四十六年二月、妻は長女を出産したが、当時カラチでの日本人のお産の例はなく、我が社でも初めてで、最後のケースであった。

その年の十二月には印・パ戦争が起こり、日本人のほとんどが日本航空の救援機で帰国した。

昭和四十八年東京本社に移り、昭和五十五年までの八年間、私はソ連・東欧貿易に従事し、毎年六―八ヵ月間

出張に明け暮れたが、昭和五十年、長男の出産に立ち会えたのがせてもの救いであった。その後キンシャサ、大阪、香港と単身赴任したので、家族は母子家庭そのものであった。

平成三年香港より帰国してからは、妻と向かい合い、対話のある生活に務めてきた。

長男もやっと本年四月就職してくれた。

「卒業に 息子と交わす 祝い酒」

林住期

私は企業OBペンクラブの刊行した「六十歳からの知的生活」を読み、素晴らしい知的集団を知り、ぜひ入会したいと切望していた。その後、次々と「六十歳からの趣味達人」「六十歳からの健康達人」等出版された。

執筆者の中に「新井進」さんの名前を見つけ、定年になつたらずひ推薦方をお願いしておいた。昨年五月入会を許され、月例会には欠かさず出席し、本年一月からは運営委員会の末席を汚している。

定年後は、企業OBペンクラブの色々の、プロジェクトに（月例会・運営委員会・小説研究会・俳句教室・短

歌教室・サロン21・何でも書こう会等々）参加したい。この活動が、私の知的好奇心を十二分に満足させてくれることは、言うまでもない。

私は、定年である来年、結婚生活・三十年を迎えるが、海外出張・単身赴任で妻には苦勞をかけた。しかし、一緒にいるときは対話に努め、二人の、また子供の問題もお互いに共有し、SHAREしてきた。

妻は自然を愛し、また土を好むので、私は妻と共に一碧湖畔での野菜作りを柱に、国内外旅行を楽しむかたわら、お互い別々の趣味を楽しみたい。

瀬戸内海の島で小中学校時代、嫌で嫌でたまらなかつた野良仕事、定年後の生活の柱となるなど無想だにしていなかった。

遊行期

さて、林住期の後に訪れるのが遊行期であり、老後の老後たる一番厳しい時期だと思う。しかしながら、遊行期については、企業OBペンクラブの諸先輩の実例を参考にさせていただきたいと考えている。

変はる変る日本語が変わる

石川 正達

「虫 クサン ツキデナイ 羽ノサカサマ…」

「何を呪文みたいなもの唱えているんだ？」

「小学生のころ、ろうそくの『蠟』の字が書けなくて、『虫』^{へんつくり}偏に旁は『く』の字を三つ、それに『内』の上が突き出でないのを書き、下に羽の字を逆さまにして…と分解して暗記した。『亂』の字も、ノツマ カマエテムヌの乙…なんて唱えて覚えてもんだ」

「落語で小僧さんが、平林を『たいらばやしか、ひらりんか、一八十のもつくもく…』と唱えるのがある。それ流だね。『亂』の字も今は『乱』と簡単な字形になった。戦前は漢字を覚えるのに苦労した。でも新聞の漢字にはルビが振ってあったから子供でも読めたな」

「山本有三は、振り仮名なしで読める文章を書けと主張していた。敗戦後、進駐軍から教科書をローマ字にしろとか漢字を千五百字にしろとか勧告され、数年間は国語改革最高潮の時期だった。終戦の年の十一月、読売新聞は社説で『漢字を廃止せよ』と題してローマ字採用を主張。国語学者のSさんも『国字はローマ字にならざるを得ない』と書いたり、志賀直哉は世界で最も美しい言語、フランス語を国語にしたら、と提唱している」

「一九四六年『当用漢字表・現代かなづかい』が告示され、社会一般に使う言葉として、漢字は一八五〇字に制限され、かなづかいは発音通り書くようになった」

「学生時代は旧仮名でノートをとっていたが、社会へ出て、急に新仮名になり戸惑ったな。言葉の癖はなかなか抜けない。企業OBペンクラブの中には今でも『であらう』とか『…といふ』『ある』と書く人もいるよ。もつとも俳句や短歌では旧カナが守られているが…」

「当用漢字は、何万と鉛の活字が溢れていた新聞印刷関係では歓迎された面もあるが、犬があつて猫がない、松があつて杉がない…と批判され、一九八一年、九十五

字増やした『常用漢字表』に変わった。現在の新聞は、これを目安に書かれている。これにも問題がある。例えば馬鹿という字、馬はあっても鹿が入っていないからか平仮名だ。難しい字体も四九年『字体表』で簡略化された。しかし、さっき話に出た、ろうそくの『蠟』の字、ワンプロで打つと『蠟燭』と出てくるが、この『蠟』の字は家にある漢和辞典や国語辞典をひいても出てない。私たちが子供のころ習った難しい字しか掲載されてないよ。国の国語政策が中途半端だから辞書にないような字も通用するんじゃないかな。日本語のいい加減なことだ。言葉の乱れもそんなところから出てくる」

「国語審議会も表外漢字の字体を取り上げるようだ。言葉の乱れ論議は、井上ひさしさんの話では、昭和八年（一九三三年）ごろにも盛んだったという」

「日本が国際連盟を脱退、ドイツでヒトラー独裁政権が確立した年だね。京大の滝川事件があったり、暗い事件が多い。勝太郎の『島の娘』も、娘十六恋ごろを紅だすきと歌わされた。言論弾圧も厳しくなった…」

「この年、小学校の読本が『サイタ サイタ』のサク

ラ読本に変わって、忠君愛国が強調された。言葉の問題では、国語と修身とで仮名遣いが不統一だと指摘されたり、日本はニッポンかニホンか、またパパママ論争もこのころかな。教科書が変われば論争も起こる」

「井上さんの話では当時、言葉の乱れとして超大作とか超特価とか、やたら『超』づく言葉が槍玉に上がったという。この数年前に超特急『燕』が走り、満鉄の超特急『あじあ号』が話題になっていたのが超ばやりの元かもしれない。もっとも超ばよりは昔に限ったことじゃない。孫たちから『超むかつく』なんて言われている」

「言葉の乱れは送り仮名の問題が多いようだ。新聞も以前は各紙バラバラで例えば引上げ、引き上げ、変る、変わる、といった具合だ。それがこの十数年、新聞協会の用語懇談会メンバーの努力で各紙統一された。日本語の正書法を創ろうといった意気込みだ。だが、新聞と雑誌とではまだ表記法に差がある。これらを統一した表記法を確立してもらいたいものだね」

「ところで、企業OBペンクラブ創立の一九八九年とはどんな年だったかな」

「昭和天皇が崩御して平成時代が始まった。ベルリンの壁が壊され、東欧民主革命の年でもある。参院選挙で与野党逆転、おたかさんの『山が動いた』が流行語となった。流行語は他にセクハラ、トレンディー、オヤジギヤルなど片仮名語が氾濫しはじめる」

「広辞苑が七年ぶりに改訂され、第五版が出たが、新しく加わった一万項目のうち三五%は片仮名言葉だそうだ。現代語で、ばついち、どたキャン、片仮名語でガーデニング、オーラ、セクハラ、シングルマザーなど」

「インフォームドコンセント、環境ホルモンなど、和文で、十分な説明に基づく同意とか内分泌攪乱物質などというより言いやすい。世の中、グローバルになれば片仮名言葉や英語が増えてくるのは当然だな。大晦日のNHK紅白歌合戦の曲の三分の一近くが片仮名か横文字だった。歌手もローマ字グループが増えたね」

「日本語は漢字圏から英語圏に移りつつある、というのは現実かな。若い子の会話『あいつ、彼女から声をかけられると目がハートになってパニクっちゃうんだ』なんて聞いているとね」

「この十年で新聞のコンピュータ編集も地についてきた。ポンとキーを押せば難しい漢字も簡単に打ち出せるから常用漢字の枠も外れてくる。『少女ら致される』だと少女が致されると誤読されかねないから『拉致』に、『逮捕』もルビを振って『拿捕』としている。NHKの大河ドラマも『元祿繚乱』と、難しい漢字で登場した。新聞も戦前の状態に戻るのかな。それともアルファベットを加えた横組み新聞が実現するのか」

「中国の人民日報は、もう横組みになっている。十年先、日本語の表記がどう変わっていくか楽しみだね」

「片仮名言葉やアルファベット表記は増えるだろう。でも本質的には漢字圏と英語圏の狭間で揺れながら百年くらいは変わらないのじゃないか。それよりも十年先まで生きていられるか。それが最大の問題だよ」。



老人たちよ、死ぬまでに反省しよう

八木 大介

我々日本人は、終戦後、戦前の軍国主義路線の誤りを反省して、戦後は民主的な平和国家を造ろうと再出発した。今でも一億その気持ちに変わりは無いが、現実の国家態勢はどうだろう。『本当に日本は平和愛好、民主的な国家の道を歩んでいるのだろうか』。結論から言えば、『日本は相変わらず、国家中心主義と富国強兵の道を猛進している』という感じがする。

平和愛好とは武器を執らないだけで、実態は侵略的な経済戦争の連続である。民主的な国家と言っても、官僚や財界など新エスタブリッシュメント（権力構造）が形成されつつあり、彼らが中心に座って、国民は社会の隅

に追いやられている。形や表面の装いこそ民主主義だが、相変わらず全体主義や統治主義で、およそ国民中心や福利民生には程遠い。国の態勢や国民のものの考え方も、封建時代と変わらない。

『日本は共産圏よりも厳しい社会主義官僚統制国家だ』と評した外国人がいるが、戦後五十年、いまだに政府の許認可や諸規制（一万二千件以上）でがんじがらめである。すべてはお上のご都合で動かされている。昭和初期の日本でも、これ程の統制はなかったはずである。

来し方を見ると戦後の日本も政府指導の下に挙国一致、一億火の玉で、経済ファッショに邁進して来た。日本株式会社は鉄砲をソロバンに換えた軍部の進撃と同じだったし、消費者を無視した生産指向と企業育成は軍需産業と変わらない。国家財政を危うくしている建設投資や箱物建築は、大艦巨砲建造と同じである。為政者の権力誇示に過ぎず、軍事費同様、壮大な予算の無駄遣いである。自民党の景気対策は常に輸送船団方式で、既得権

者やエスタブリッシュメント保護であつた。彼らが、努力しなくても儲かるシステムの修復工作である。日本の不況対策は軍需景気に頼つていたようなものである。

教育システムも戦前の軍隊教育そのままである。軍隊教育の特徴は兵に対する必要最低知識の詰め込みと落ちこぼれの防止である。英才教育や個性の伸長は犠牲にしても、使いやすい柔順な羊の大群を調教することにある。優秀なエリートよりも員数揃えのクラーク教育だつた。

『上官の命令は朕の命令』と強制する論理は、今もハイスピードのベルトコンベヤーに長時間猛烈に縛り付けられる作業員に受け継がれている。ムチや体罰こそなくなつたが、すべては会社のためである。教科書検定は教育勅語の代わりであり、忠君愛国から良い子教育、愛社精神、突貫工事、サービス残業、挙句の果ては過労死で撃ちてしまふ、最後は水漬く屍に繋げる一銭五厘（ハガキ代）思想である。東大を頂点にした高等教育も、陸士や海兵並みの中堅幹部養成の域を出ず、レッテルとプライドを持たすだけで真のリーダー教育には程遠い。

民生レベルでも、お上の都合が優先である。老齢年金

も、いまだに『恩給』の考え方である。年金財政が困難なので、将来は年金給付年齢を六十五歳にするとか、若者の保険料を引き上げるなどの論議が当事者抜きで交わされている。年金財政がパンクするのは、日本国民の老齡化と少子化により、受給者と保険料負担者の逆ザヤが生じるためである。厚生省が年金財政の独立採算を考える限り、必然の結果である。問題は高齡世代の過去の経済貢献と資産形成をどう評価するかである。

現在の国民総資産七千兆円は、終戦時には時価にして一兆円しかなかった。それを今の老人達が五十年かけて七千倍にしたのである。働く方からすれば、利益が発生する都度、配分を受けるべきだが、日本の場合は世界的に競争力のある企業を育成する事を要請されたので、利益配分金は一時オリンピック選手（企業）の強化費用として社内留保に回した。その結果は、日本企業は世界チャンピオンになったが、留保された社内積立金は、もともと老人層の資産である。少子化になった今こそ、その慰留資産を取り崩せば良い。具体的には七千兆円の国民総資産に対して二―三%の資産課税を行う。実際には

免税点や非課税対象などの設定が必要だが、法人、個人とも一億円以上の資産に消費税並みの税率を掛けるとすれば、年金だけでなく老人医療費や介護費も賄える。

幸い、我々は戦後五十年間、国家の再建には成功した。我々が養成したオリンピック企業は、見事金メダルを取り、日の丸を揚げてくれたし、新幹線や高速道路、市役所の建物でさえ、壮観さにおいて、真珠湾攻撃並みの感激を齎した。世界競争を平和と民主主義の看板に隠れて経済戦争にすり替えたお陰である。しかしながら、このすり替えも、最近では世界から見破られつつある。対米追従と揉み手商法のタクティックも完全に見透かされている。真剣な貿易の完全自由化や諸規制の撤廃、内需拡大など、抜本的な社会態勢の改革要求である。

我々の世代は、終戦時十歳台で、元より先の戦争に責任はないが、戦後の再建発展には責任があった。その結果に対しては謙虚な反省が必要である。先輩の連中は既に道の誤りに気づくことなく死んでしまった。逆に若い人たちは、戦前を知らないために、戦後の撞着に気が付かない。戦後を反省し、誤りを糺す責任を負えるのは

我々の世代だけである。これは少なくとも、我々が死ぬまでに、反省をしなくてはなるまい。

明治維新の革命は若者の情熱によって成就したが、二十一世紀の平成維新は老兵特攻隊の出番かも知れない。我々の世代は若いときに仲間を特攻隊で犠牲にした。遅ればせながら、いま仲間の後追い出陣を迫られるのも宿命であろう。しかしながら、この改革は口で言うほど簡単なものではない。官僚の、組織を挙げた抵抗があるし、既得権や利権につながっているエスタブリッシュメントや腐敗土壌の中で生息しているばい菌マン達は生活を奪われる。思い切った改革を実行するとなると、閣僚の二、三人は暗殺されるかも知れない。しかし逆に二、三人も犠牲になれば達成出来る程度の改革でもある。ここに、『功なり、名を遂げて、後顧に憂いなく、カネも命も要らない人柱』が求められる。

次の総選挙では、自分たち自らが戦後責任を果たすつもりで、平成維新を断行出来る非自民内閣を打ち立て、そこで死生を全うする特攻閣僚を応援してやろうではないか。

(平成十年八月九日 七十二歳の誕生日に)

ルースキー・チャイ

定直 正光

ベオグラードに来たばかりのころ、紅茶を所望すると、風邪でもひいたのか、と心配そうに聞かれるのが常だった。紅茶のことをセルビアでは、ルースキー・チャイ、つまりロシアのお茶という。また、ポテト・サラダのことをルースカ・サラタという。これもロシア・サラダの意味だ。どうしてロシアがつくのか訝いぶかったものだ。同じ正教国として、共通する文化圏の名残の一つなのだろうか。ルースキー・チャイは、一見して紅茶なのだが、予め厨房で大きな器に紅茶の葉っぱと砂糖を放り込んで沸かした、香りもない甘いだけの熱いお湯でしかない。場所によってはレモンまでも予め放り込んである例もある。だから、土地の人も病気のときの薬ぐらいにしか利用してなかったようだ。もっとも、ティー・バッグが普

及したこのごろでは、紅茶のことをエングレスキー・チャイ（英国茶）とか、インデイスキー・チャイ（インド茶）と称して、区別化が進んでいる。それだけ飲まれる機会が増えてきたのだろう。

日本のお茶にあたるのが、ユーゴの場合はコーヒーである。コーヒーをよく飲む。コーヒーといえば、セルビア以南ではトルコ・コーヒーが普通だ。トルコでコーヒーがとれる筈はないのだが、コーヒーを飲む習慣は五百年近い占領時代に、オスマントルコが残していったものだ。いまでは入れかたがトルコ風であることをいう。銅板をたたいてつくった、ジェズバと呼ばれる、長い柄のついたコーヒー沸かしをコンロに直火にかけて沸かし、日本酒のお猪口よりちよつと大きい、取っ手の無い焼き物のお碗で供する。コーヒー・ミルも独特の、重い青銅製の筒があり、腰にあてて、調子をとりながら豆を挽く。技術指導にきた日本人たちはフィルターされない滓がカップの底に厚さ五ミリくらいは残って、どろどろしていることから、トルコ汁粉と称して、最初から好きになる人は少なかった。しかし、上澄みだけを飲むという飲み

方に慣れると、おいしく病みつきになる。酸味が少なく、外見に似ずあつさりしている。なお、上澄みを飲みきったコーヒー碗を伏せておき、しばらくしてそれを開け、滓にできた模様を読む占いがあり、その占いを得意とするおばさんがいて、人気者だった。

チャイは中国の茶を語源として、スラブ圏や中近東まで広く使われている単語のようだが、セルビアにはシュマデンスキー・チャイというのがある。セルビアのシュマデニア地方のお茶という意味だが、これはお茶ではなく、地酒の焼酎、ラキアに砂糖を入れて沸かしたものだから注意を要する。日本の玉子酒のように、風邪を引いたときに飲むの良いというが、かなり強い酒だ。風邪気味のときは、同じ風習でも赤ワインを熱くしたものが利いたようだ。

食文化のアメリカナイズは旧ユーゴ時代から進んでおり、アメリカ・タバコ、コカコーラ、マグドナルド、ケンタッキー・フライドチキン等と並んで、ネスカフエの名でインスタント・コーヒーも入ってきている。いまの若者たちは、トルコ・コーヒーやシュマンデインスキ

ー・チャイよりもネスカフエやウイスキーのほうを好む傾向にあるらしい。

中国・西寧訪問記

シーミン

吉 寄 清 己

私は一九九八年八月から九月にかけて、塗料専門家として、青海省の国有塗料工場、西寧油漆廠を訪れた。前年に続き二回目である。

省都・西寧市は北京の西一、五〇〇キロにある。二時間十分の飛行で行ける。標高二、三〇〇メートル。八月でも雨が降ると、昼間の気温は二〇度C以下になる。

青海省の面積は日本の二倍。人口は四八〇万である。赤茶けた山に囲まれた道を登り、海拔三、〇〇〇メートルの峠を越えると、山の上は台地になる。そこは青海の名にふさわしい緑の草原である。夏の間、パオが散見さ

れ、ヤクと羊の遊牧が見られる。この草原も近年、砂漠化が進んでいる。

弱肉強食の嵐は一二〇万人が住む西寧市にも吹き荒れている。大口塗料需要家であった国有自動車工場、木製家具工場は倒産した。西寧油漆廠も昨年は赤字に転落、本年度は従業員を三割削減したが、プラスマイナス・ゼロの決算になれば上出来という。

このような状況から、省の管掌部門は西寧油漆廠を集体企業に転換することを決めた。資本金の二〇%を工場の従業員が投資するのである。集体企業は、親方五星紅旗のぬるま湯から脱却して、従業員のやる気を高め、同時に国家の財政負担を軽減しようとするものである。

従業員の出資金は役職により異なる。廠長は二万元、副廠長は一万五〇〇〇元、科長は一万元、一般従業員は五〇〇〇元である。廠長の月給は八〇〇元、一般従業員は平均五〇〇〇元の月給であるから、彼らの給与からみて出資金の支払いは容易なことではない。三年にわたり三回の分割払いと、条件は緩和されたが人々は借金して出資金を工面することになる。親の退職金を当てにする者

もいる。払わないと職を失うから皆は必死である。私が「この集体企業が倒産したらどうなるのか」と副廠長にきくと、彼女は「出資金は戻ってこない」と言う。従業員にとって正に背水の陣である。私は二〇〇〇元を出資した。

払い込みが終わると、会社の名称は青海省中日崑崙塗料有限公司に変わる。崑崙は西寧の伝統ある塗料の商標であり、中日の日は私の技術協力を意味する。

私は九四年から毎年、河南省の開封制漆總廠を訪れている。開封や西寧のような国有中小油漆廠は、いま苦しい経営を余儀なくされている。以下は人口一億の河南省と青海省でみた塗料事情である。

町の自動車修理屋は自動車の塗り替えに、価格がべらぼうに高くても、輸入塗料を使っている。私は修理屋の社長に「技術を国有油漆廠に教えるから国産塗料を買ってください」と要請した。ところが社長は「国産塗料を使っているのは、自動車のオーナーは店に寄りつかなくなつて商売になりません」と言う。私としては「国産品育成に努めないのか」と言いたいところだ。

自動車、家電製品、農業機械などの生産に、工場で使用される工業用塗料は、国有大手油漆廠と外国企業が設立した合弁会社で、外国親会社の強力な支援を受けて市場を独占している。開封や西寧の塗料を売り込みたいが、門前払いを食らうだけだ。

私企業の塗料会社が出来た。塗料販売店は輸入塗料と名の通った国有大手の塗料を取り扱い、販路拡大に成功して、自前の生産工場を建てたのである。河南省に設立した五一塗料公司は、小回りのきく販売を武器に、全国的規模の営業で、国有中小の強敵となってきた。

また、農民は農産物を自由販売して得た金をこつこつと貯め、数人で塗料会社を設立、激安汎用塗料を市場に提供している。彼らの労賃が安くまた自作の安価な乾性油が原料として使えるのである。農民は、国有中小のキロ八・八元のペンキを五元で売ってくる。小売店を経営する私の友人は「品質に多少の不安はあっても、安い仕入れ価格は魅力だ」と、長らく懇意にしてきた国有製を農民製に切り替えた。農民パワーは、あらゆる分野に進出して、安値攻勢を仕掛け、国有企業を倒産に追い込ん

でいる。下剋上の時代である。

受けて立つ開封や西寧は定年退職者に年金を支払い、レイオフ従業員に手当を支給し、おまけに旧式設備を過剰に持っている。さらに共産党員の幹部たちは、管理に重点を置く計画経済のやり方から抜け出せないでいる。私は幹部たちと時々大口需要家を訪問しているが、彼らは塗料の知識を持っておらず、市場の動向がわかっていない。これでは需要先トップへの販売活動は期待できない。

しかし、幹部たちは自社の経営の厳しさをおくびにも出さない。中国の諺に「打腫顔充太人」というのがある。貧乏で碌なものしか食べられず、体は痩せて貧相だ、せめて顔を叩いて腫れさせ、裕福に見せたい、という意味だ。幹部たちの心情を表す言葉であろうか。

私は、西寧油漆廠は専門化しないと生き残れないと思いい、若い工程師（技術員）たちと話し合った。彼、彼女らの力を借り、激安水溶性塗料を開発して、それを西寧の目玉商品に育てようと提案して合意した。

まず塗料の溶剤として大量消費している石油を、無公

害の水に置き換えることにした。この共同研究は青海省・科学技術委員会の支援を受け、私は日本から計画書を送り、エンジニアたちは、その実験をするのである。工業用塗料についても開封と共同研究を進めている。

西寧の崑崙塗料は中国西南部の広い地域に売られている。生産の四〇％はチベット向けである。西寧からラサまでは標高五、〇〇〇メートルの峠を越え、二、〇〇〇キロの山道である。塗料はトラックで四日間かかって運搬される。路線バスはチベタン以外の乗客のために、酸素ボンベを用意しているそうだ。

未刊行拙著「斜めに 読む世界史」のむすび

志 田 渉

アイスランドの国歌の中に、*fyrir honum er
tusindar sem en dagar*（彼〈神〉によつては、千

年も一日と同じである）という一節がある。われわれは、せめて神の一日分だけ、すなわち、来る一千年の間だけ、世界史に対して責任を持ちたいものである。その一千年が経過したら、次の一千年は、後世の人びとに任せたらよい。つまり、二〇〇一年から三〇〇〇年までの世界史は、いま地球上に生存している人類が責任を持たなければならぬ。

ホーキングは「ビックバンの前のことは考えなくてよい」と言った。われわれも、三〇〇一年からあとのことには、考えないでおこう。実際にビックバンには「前」はない。

その一千年間の人類の目標としては、次の五悪の根絶が考えられる。すなわち、貧困、疾病、戦争、環境破壊、人種、ならびに、性による差別である。どの一つを取っても、その根絶には、優に数百年を要するであろう。しかし、もしその根絶に成功すれば、キリスト教徒の願う「至福千年王国」は、キリストの再臨なしに到来するのである。これは、終末観ではなくて、人類の努力目標である。全人類が心を一にして協力すれば、必ず達成でき

るものであり、このためには絶対的普遍妥当性を持つ（キリスト教を除いた）西欧的価値観が前提となる。

しかし、世界には、この西欧的価値観と異なる価値観を持つ集団も多い。イスラム教徒や中国人もこの中に入る。われわれは、これらの人たちが、みずから進んで西欧的価値観を信奉するようになるまでは、これらの人たちの価値観を尊重しながら、辛抱強く、共存のため最善の努力を尽くさなければならない。

湾岸戦争は、武力により、一方的にイスラム的価値観を踏みにじった不幸な事件であった。このために、前述の目標の実現のためには、数十年の後退を余儀なくされたと考えてよい。アメリカのブッシュ大統領（当時）は、キッシンジャー元国務長官の警告を身にしみて痛感したことであろう。

しかし、まだ時間は十分ある。西側諸国の中にも良識ある人は多い。しかし、ロマン・ロランがこの世にありせばの歎きは、やはり強い。今後は、愛情と理解、寛容と忍耐をもって西欧的価値観と異なる価値観を持つ人たちに接し、世界史が、ある宗教の終末観に描写されるよ

うな破局を見ることのないよう、あらゆる努力を惜しまないことが肝要であると考える。

この目的の達成には、原爆と印刷機によるドルを使用する世界支配を追求する、いわゆる「アメリカニズム」の排除と、アメリカの一八九八年（米・スペイン戦争）以前の自国の領土へのアメリカ軍基地の撤退を前提条件とする。イギリスの史家トインビーは「アメリカニズムは世界の悪夢である」と言った。

フランスのデュマ元外相は「アメリカの世界支配を阻止するため、EUは諸外国と協力すべきである」と言った。フィリピン議会は、アメリカに基地を提供する条約の批准を拒否した。ドイツの作家フェルナーは「アメリカニズムが勝利を取れば、百五十年後に世界は滅亡するであろう」と言った。これは、アメリカという国家そのものの排除ではなく、この国の指導原理である「アメリカニズム」の排除を意味する。すなわち、この「アメリカニズム」の存在が、前述の五悪の除去にとって最大の障害となるからである。

ここで、日本は、速やかに、自民党専制、官僚独善の

悪弊を改め、強力にEUと関係し、彼らの「アメリカニズム」排除運動に協力して、「至福千年の王国」建設に最大の協力をなすべきであると考えろ。そのためには、われわれは千年の単位で、ものを考える修練をすべきであるという意見をもつて、この拙著のむすびとしたい。

アナウンサー

黒崎 昭二

「前畑がんばれ！前畑がんばれ！
がんばれ！がんばれ！がんばれ！」

前畑勝った！前畑勝った！

勝った！勝った！勝った！

勝った！前畑優勝！前畑優勝しました！」

昭和十二年。ベルリン・オリンピックの中での歴史に

残る名放送である。河西三省さんがアナウンサー。冷静で澄んだ声の持ち主が、興奮で絶叫していた。

この時私は小学校の四年生、すばしこく走り回る野球好きの少年であった。野球といえば東京六大学リーグ戦が華やかなところで神宮球場へはよく通った。行けない日はラジオにかじりついて実況放送を聞いたものである。

「夕闇迫る神宮球場。ねぐらに急ぐ鳥が一羽二羽三羽。最終回慶応の攻撃。バッターは楠本。ピッチャーは早稲田若原。大きく振りかぶって第一球！」

これは忘れもしない松内則三アナの太い重みのある声。当時のスポーツ・アナ三羽鳥の、もう一人は山本照さん。

「ショートは甲子園の名門、中京商業出身の杉浦。華麗なグラブさばきは、強肩サードの阿瀬とともに明治の誇る三遊間、鉄壁の守り！」

こんな名文句が、心もち鼻にかかりながら、軽やかに流れてくるのだ。

アナウンサーっていいな。ただでオリンピックへ行けるし——。野球も見にいける。ようし、大きくなったら

アナウンサー。それもスポーツ・アナになってやろう。

単純な少年の気持ちがそこに芽生えた。

中学生になった。戦争が始まる。大東亜戦争。

大本営発表。輝かしい戦果の発表。

戦局が不利になる。東部軍管区情報。空襲警報発令。

ラジオのニュースをよく聞くようになっていた。

神風は吹かずして終戦。

敗戦後の混乱期は食うや食わずだった。何とか大学に入る。学生服の襟のマークはT。工学部機械工学科学生として三年間。就職卒業の時期を迎えた。

就職案内の掲示板には、三菱重工、日立、東芝などと募集要項が出ている。日本放送協会はない。

真面目に普通に機械工学の単位を履修したから、技師として進めば将来は洋々のはずである。しかし心の中どこかにアナウンサー志望の灯がともっていた。主任教授のところに相談に行きかけた。その前に同郷の気やすい助教授の先輩に打ち明けてみた。

「実験・実習・製図など工学部の教育には人文系学部と異なり、はるかに費用がかかっているのだぞ。その辺

をよく考えたことがあるか」と突き放される。

結局、勇気がなく、胸のモヤモヤをいったん消して、製鉄会社に就職した。間もなく民間放送が開局。ラジオに加えてテレビもマスコミの一つとして世の中に登場してきた。

ともあれ、製鉄所の生産部門の技術者となった男は、技術ひとすじに生き抜き四十年をすごして勇退。

毎日が日曜日となったが、やることには事欠かない。週一回のテニスを健康管理の核に、花の観察スケッチなど暇を持て余すことはない。ラジオは家では聞かない。テレビはよく見る。ドラマは余り関心がなく、ニュースがほとんど。解説やルポルタージュのほかスポーツものが多い。

そこで、アナウンサーの名前と顔がだんだんに分かってくる。知っているほうが番組がより楽しく面白く見られる。コマーシャルの入る民放はちょっと敬遠。NHKが主体である。

近年の傾向では、ニュースや解説に女性登用が目立つ。夜七時のニュースの顔は森田美由紀アナである。北海道

出身で、認められて中央に来てから随分経つが、落ち着いたソフトな語り口にはすごく好感がもてる。一方、朝七時は親しみのある男性の三宅アナの隣に、女性の武内陶子アナが座っている。明るくメリハリのある話し方で素敵である。時折の、ちょっとしたトチリにも小さく謝って爽やかでさえある。このほか黒田あゆみ、上田早苗など中堅のレディー・アナを私は高く評価している。

ニュース番組のアナウンサーは毎日服装を意識して替えている。それを見ているだけでも楽しい。日本シリーズで横浜ベイスターズが優勝した翌日の朝のこと、武内アナは青いブラウスに金色の星二つのブローチをつけて画面に出ていた。心にくい気の配りよう。

夜九時半からの「クロースアップ現代」は出色の解説番組。キャスターを務めているのが国谷裕子さん。この人がすばらしい才能の持ち主で感心している。話題は直近のものが中心だが、国内外の政治経済からスポーツに至るまでさまざまである。にもかかわらず、ゲストと適確な応答を交わしつつ分かりやすくまとめてしまう。これには全く敬服するのみである。

ここで、古稀をすぎた私の老化防止法もしくは若返り法がある。私は、アナウンサー個人あてに、しゃべり方は勿論、コスチュームも含めて番組について感想の手紙を出す。早い話がファン・レターである。大抵は梨のつぶてで返事はないが。気にしないでいて期待もしているのがファンの心理。丁寧な礼状が来た時は天にも昇る嬉しさ。

最後にアナウンサーに注文。ニュースなどはメモが手元にあってそれを読めばよいのだろうか、実況となると即妙の表現をせねばなるまい。野球の場合、ラジオだと状況を一つ一つ刻々と伝えねばならず多少早口になろう。テレビとなると画面の中に相当の情報が入ってくる。解説者ともども余計なしゃべりは不要である。かえって邪魔なことがある。要するに、視聴者の立場を考えて、抑え加減での添え語りで結構だ。

なりたくてなれなかったアナウンサー。いつまでも、外野から関心を持って応援している。

悪魔のささやき

多田修

一九九三年、その頃には未だ作家であった堺屋太一は、日本経済新聞に『冷戦構造の崩壊とポスト冷戦』と題して「戦後四十五年、日本経済は高度成長を続けてきた。その背景には成長を促す神話が存在した」と述べ、神話の心理的影響と終焉について興味深い記事を載せていた。

今も経済危機の背景に、またも消え去る運命の神話が横行して、デフレをそのかし、雇用不安や老後不安を掻き立てているのではないだろうか。それにしても、政治家も官僚も知恵がない。このままでは結局お金で問題を解決しているだけではないのか。これから目減りした金融資産の穴埋めが大変だ。

神話というのは神様に申し訳ないので、ここでは悪魔

のささやきといっておくが、それを終焉に持ち込むにはどうしたらいいのだろう。後になって単なる神話でしかなかったというぐらいなら、これこれは悪魔のささやきで、それが消滅すればこうこうなると、今のうちに書く人がいないものだろうか。どうせ消え去るなら悪魔でも何でも恐れることはない。皆で渡れば怖くない日本人同士である。早く悪魔狩りをしたい。

今、何が悪魔のささやきなのか考えてみる。その前に、これまで神話といわれたものは一体何だったのか知る必要がある。

我々には、周囲の人々と共有した仮のルールとか評価の基準のようなものが、いつのまにかできている。一度できた価値観とか慣行はいつまでも続くと思ひ込んでいる。これらが神話といわれたり、パラダイムといわれるものの実体であろう。

アダム・スミスは『パラダイム』とは、ある現象を統一的に説明するため設けられた共有された一連の仮説である『パラダイムは世界を説明し、世界の動きを予測する一助になる』と定義している。結論として『あるパラ

ダイムの中にいるとき、その他のパラダイムは想像することさえ難しい」と述べ、やがて消え去る運命でも、次代に及ぼす影響の恐ろしさを示唆している。

第二次大戦中、プロペラ機からジェット機に転換したのは米国であった。日本はプロペラ機の高速化にこだわって方向を誤った。機械式時計から電子式時計へ活路を見出したのは日本であった。スイスは、精密機械にこだわって市場を奪われ、大量の失業者を出した。プロペラ機も機械式時計も、やがて消え去る運命の神話を信じて、悲劇に突っ込んでしまった。

神話とかパラダイムは、アダム・スミスが言う通り世界の動きを予測する一助であるから、その神話が消滅するとき世界の動きをどう予測すればよいのか、それが問題なのである。まず最初の手がかりは、ここという悪魔のささやきがどこからきたのかを洗いだせば何かが判りそうである。その出発点となる病根を知りたい。

少子化と、それにともなって起こる人口の減少も、生まれてくる赤ん坊と死亡者の統計から判っていた。しかし、「世界の人口を見れば増加の一途をたどり、食糧難

は目に見えている」「女性の自己実現に対する願望が急速に進んでいるが、男性の育児にかける時間は一向に伸びてこない」といった難問にどう対策を打つべきか、理性の世界の中で迷っていただけである。その結果、起こるべくして起こった少子化である。

生物が繁殖をあきらめたとき、少なくとも将来に、もやもやとした不安を抱く。老後の不安もそこからくる。お金がからんで年金や社会保障の不安につながった。バブルで生じた不良債権が、金融システム不安にからんで火に油を注ぎ、雇用不安も一氣に広がった。

緊急経済対策は、対症療法に終始している。熱が上がれば、解熱剤を飲ませ銀行に資本注入したり、体力消耗を少しでも減らそうと減税や消費税の一時凍結を考える。病根になっている少子化を絶とうと、アイディアを出す政治家も知恵を働かす官僚も見当たらない。

生物の本能は子孫を増やすことで、バイアグラで老後まで楽しむことではない。楽しむほど不安は余計になる。むしろ、バイアグラの登場は、繁殖と快楽とを分離して意識できる素地を作った。それが繁殖の終焉をはっ

きりと現実の不安に結びつけた。

今では、女性に対して、生めよ殖やせよという戦前と同じ手口では効き目がない。戦いとなれば死を覚悟して武器を持つて立ち、妻子を守る勇気ある男性がいるなら、女性も母性本能を発揮して、苦労はあっても子をたくさん育てるだろう。領土不可侵神話が、恒久平和を信じて疑わぬ日本人にしてしまった。それをやがて消え去る運命の神話ではないといえるほど、周囲は正常な神経の国ばかりだろうか。

そこまで思いつめなくても、「イギリスの女性が望むもの」という世論調査で、五位になってやっと『ボーイフレンド』としての夫か恋人』が出てくる。四位までは男性のことは関心外といってよい。上位は『人から評価される仕事、それが生きがいと生活につながる』『個の自立をベースに自己実現を達成する』などである。女性のブランド指向もたそがれ、マイ・ブランドの創造に関心が移り、生活様式の個性化が根をおろしてきた。

保育や教育に費用がかかりすぎるといふ理由で、お金で解決する政治家やマスコミの議論は、必要な対症療法

であっても、病根を絶つことにはならない。半面、生産年齢人口が減っても知恵と創造力でGDPを増やす方法はある。少子化すればGDPは減少すると考えるのは余りに単細胞である。それでも不安が残るのは、お金ではなく、逃げ道がない生物本能からくるもやもやであろう。

大学教授への転身

西川 永幹

一九九五年六月、私は二十九年間勤務した銀行を退職し、銀行の関係会社である総合研究所に就職した。銀行員としての最後の一年間は調査部長として過ごした。私の経歴は国際関係の仕事が長く、海外もロンドン、シドニーに計十三年住んだ。若いころ、調査部にいたわけでもなく、また、調査部を希望したわけでもない。しかし、誰かが私を調査部長に任命してくれた。そして、おそら

く調査部長であったおかげで、数ある関係会社の中で総合研究所に就職できたのだと思う。

銀行を退職した時、三週間休暇をとり、イギリスに旅した。私の留学時代の指導教官だったレイノルズ先生ご夫妻を家に訪ね、近況を報告した。その時、「私はシンクタンクで調査の仕事をすることになった。しかし、ゆくゆくは大学の教授になりたいと思う」と言った。

「日本には、大学の数が五百以上あり、教授の数はいギリスよりずっと多い。だから私にも教授になれるチャンスはある」とも言った。なぜ突然そんなことを言ったのか、自分ながら良く判らない。久しぶりにオックスフォードの町の学問的な雰囲気に触れて、私の心の奥に潜んでいた気持ちに表に出たのかもしれない。ただし、教授になるために具体的にどうしようといった計画があったわけでは全くない。

大学の先生になりたいと本当に思うようになったのは、総合研究所に勤めはじめて二年過ぎた頃からである。「大学の先生というのは本当に良い。部下とか秘書はいないが、上もない。何をしようと自由だ。自分の時間

もたくさんある」

永年サラリーマンをやった後、大学教授になった知人は、そう言って私に大学の先生になることを勧めてくれた。私の銀行の先輩で、大学教授になっている方も何人かおられる。そういった方たちともお話しする機会も何回あったが、先輩方は皆、若々しかった。

大学の先生は、授業で平素若い人と接していたり、研究で常に「真理」を求めたりしているせいか、頭が柔かく、考えに緊張感があり、若い。総合研究所に勤めているとは言え、サラリーマンである私と比べて、教授の先輩方はとらわれない自由な発想をされた。

「大学の先生になろう」。どうしたらなるのかはわからなかったが、先輩とも相談し、まずは自分の履歴書に大学の先生になれるような経歴を作っていくことを考えた。第一に本の出版である。これは、銀行の経験をもとにプロジェクト・ファイナンスの実務書を書いた（共著）。本を書き始めてから随分時間がかかったが、とにかく一九九七年七月に出版し、うれしかった。

「社会人から大学の先生になろうとする人は、学会に入

るそうよ」

同窓会で高校の同級生（女性）が教えてくれた。私も学会にいくつか入会させて頂いた。一九九七年秋から一九九八年秋までの一年間に、金融関係二、英語関係二、法律関係二の計六つの学会に入会した。何か焦ってがさがさ始めたという感じである。本を出し、学会に入り、後は教歴である。どこかで非常勤講師を経験していると常勤として採用されやすいと聞いた。先輩にお願いし、非常勤講師でもやれたらと思ったが、私の場合これは実現しなかった。

さあ経歴書を作ったとして、次にどうしたら自分が先生になれるのだろう。先輩に聞いてみたが、これだという明快なやり方はないようである。要するに、学会等で色々な人と知り合いになり、顔を知ってもらうのだという。そうすると、どこかの大学にポツと空きが出た時に私の名前を思い出してくれるかどうか、判りやすく言う（本人の実力を前提として）コネの世界ということか。

一九九七年十一月に先輩が「S大学で金融の先生を探している」という耳寄りな情報を伝えてくれる。履歴書

を送った。暫くして「他の人が一足先にその大学に履歴書を送っていたそうだ」と、先輩は不成功の報を伝えてくれた。まずは一敗。これから負けが続くかもしれない。しかし、最終的に、一つどこかに決まればよいのである。だから気楽と言えば気楽。私の留学時代の友人は、現在はロンドン大学教授だが、彼も十年前イギリスやオーストラリアのいくつもの大学の「教授」の公募に応募して、何回も落とされていた。秀才の誉れ高い彼ですら、何敗もしているのである。私の初戦の不成功なんて当たり前のことだ。

「自分がどこかに決まった場合、もっと良いあそこの大学に行けたと思うな。また、自分より力のないあいつがあそこに入ったのだから自分でも行けた筈と思うな」。要するに、どこでも大学が受け入れてくれたら感謝しろ、というのが先輩のアドバイスだった。私にも必ず機会が回ってくるであろう。そう信じて、その時を待つしかない。一敗の後、先輩に一押しして頂いたある大学の採用の件で、二敗目を喫した。大学の教授会のメンバーのほとんどは学問一筋で二十年三十年過ごしてきた学者の方

たちだ。私のように、社会人が外から突然来て採用されてしまうことは、学者の先生方に見れば彼らのポストが奪われてしまうことなのだ。彼らの抵抗は理解できる。むしろ抵抗するのが当たり前であろう。しかし、そう考えると、少し弱気になってくる。

一九九八年の夏から秋にかけて、三回目の機会、四回目の機会がほとんど同時にやってきた。私は幸運にも、そのうちの一つを捉えることができた。一勝―。長期戦を覚悟した就職活動だったが、思ったより早く決着した。先輩方をはじめ、サポートして頂いた方々に感謝している。就職活動は終わり、次は研究活動と教育である。こちらは大変そうである。私には実務経験はあるが理論がない。先が思いやられる。しかし、これは自分でやりたいと思って進んだ道である。これこそ自己責任、自分何とかするしかない。

ミュージアムと博物館学

中洲 靖雄

秋の気配が深まるころ、一カ月の間に二度もミュージアムを訪れる機会があった。日ごろ博物館あるいは美術館等には、さして関心が深くないこともあって、余り積極的にミュージアムに足を運ぶこともなかった私であるが、ふとした機会から、十月初めに大阪・万博公園内の「国立民俗学博物館」へ行き、またその一カ月後には滋賀県信楽町の「MIHO MUSEUM」を訪れたのである。たまたま同じころ、五回にわたって受講することになった居住地川西市の公開講座が、なんと、博物館学研究「ミュージアムへの誘い」だったのである。お陰で実地見学と座学とが重なり、なんだか急にミュージアムに対する関心度が一挙に高まってしまった結果となった。

まず大阪の国立民俗学博物館へは、ちょうど同博物館

の別館で開催中の「大モンゴル展」を見学すべく訪れ、ついでに本館の方も観賞しようと訪問したのがその切っかけだった。

同館は文部省所管であり、厳密な意味でその正体は大学なのだそう。当然、職員・学芸員のなかに、教授の肩書を持つ人もいる由だが、聞くところによると、初代館長（現顧問）の梅棹忠夫氏が国立民俗学博物館（略称・みんぱく）と命名、文化庁の所管から大学として研究の場にするべく、文部省所管となるよう努力されたい。

設立二十四年目の「みんぱく」は、設備的にも立派なものであり、展示品も豊富に取り揃えている上、展示の内容・仕方など、欧米のそれと比較しても、そんなに遜色がないように思われる。

一方、「MIHO MUSEUM」は開館一周年を迎えたばかりの美術館であるが、滋賀県の陶芸で知られる信楽町の町はずれ、山の中にあって、余り宣伝などがなされていないため、その存在を知る人も少ない。

なぜこんな山の中に、このようなユニークなミュージ

アムが設立されたのだろうと疑問が湧くが、その理由はすぐに解けた。それは、ある宗教団体がその本部の敷地に設立したものであったのである。

その背景としては、静岡県熱海駅のすぐ上の方にあるMOA MUSEUMにそっくりと考えれば理解しやすい。MOAの方は既に知る人ぞ知るで、訪れた人も多いと思うが、MIHOの方は実際に行ってみてびっくりなのである。

山あい道路を通って現地に到着、降り立った場所にあるのがレセプション棟である。バス等の乗り物で来る人・帰る人に、飲食物を供し、土産物も売る。いうならば車寄せと待合室的な建物である。

そこから美術館まではトンネルを通り、吊り橋を渡って約三百メートル前後はあろうか。来館者には電気自動車を送迎サービスをしてくれる。本館は一見平屋のように見えるが、実際は山の斜面を巧みに活用した二層の建物を建て、美術品を展示しているのである。

思わず目を見張るのは、視界の広い美術館の大きな窓越しに、浅い谷を隔てて宗教団体の一風変わった巨大な

本殿が見られることである。山の中に、よつきりと建つこの本殿は、異様な建物のようにさえ見える。

このミュージアムの見ものは、焰摩天像をはじめ地蔵菩薩立像等の重要文化財五点、その他中近東、エジプト、ギリシヤなど諸外国からの展示品もそこそこ展示されており、一見の価値はあると思う。

ところで前述のごとく、同時期に博物館学研究と題する公開講座を受講、ミュージアムの学問的体系の一端に触れる機会があった。

講師の園田学園女子大学助教授、一新 朋秀氏によれば、「博物館学とは博物館に関する総合科学である。博物館の理念、機能と社会的役割・使命といった、あるべき博物館の追求と、それを実現するための具体的な方法及び技術的課題を研究し、解決するために要請された学問である」と。

そして、同助教授は、師事した梅棹忠夫氏の博物館定義に立脚し、次のような考え方を述べておられる。お陰で博物館に対する新たな認識が芽生え、関心の度合いも高まる結果となった。即ち、

一、博物館は情報機関であつて、過去を目指したり、復元することではなく、新しい観点から新しい文脈に組み直して未来に送り出す。そのためには広く情報を収集し、蓄積し、変換し、創造し、伝達する。そしてこうした膨大な情報から最新の正確な知識を市民に提供する。それが博物館の仕事である。

二、博物館が何のためにこのような知識・情報を提供するのかといえば、市民に誤りのない世界像を形成する材料を提供し、未来の人間生活を構築することに役立てたいからだ。

三、しかし、博物館は市民に対し、教育の場や啓蒙のための装置と考え、既成の価値を体系を押しつけるのではなく、市民の知性を刺激し、未来の創造に向かわしめるための刺激と挑発の装置だと考える。

などというのがその概略である。

つまり、これまでミュージアムとは、博物館や美術館を指すものとのみ理解してきた。が、社会とその発展に寄与することを目的として、広く市民に開放され営利を目的としない恒久施設、および保存修復の研究機関や図

書館、資料センター等に付属する恒久的展示施設等も、すべてミュージアムであるとされるのだ。

更に自然、考古、民俗学関係の記念物及び保護地域、博物館の性格を持つ史跡・建造物で、収集・保存・教育等の活動を行っているものや、自然保護地域、自然科学センター、プラネタリウムは勿論、植物園、動物園、水族館等もみんなミュージアムなのだ。一言にしてミュージアムとは「知の伝達装置」だと言えるそうだが、せっかくの開眼の機会を、今後大いに生かして行きたいものだ。

タクシーから見たお国柄

都 甲 昌 利

十一月の例会で「プラハのタクシー」というPEN随想が披露された。これに対して、この随想は何を言わん

としているのか焦点が定まらない、という批判の声も聞かれた。確かに、悪質なタクシーに悩まされ、教訓として「プラハではタクシーに乗らず、リムジンを使いなさい」では外務省や観光協会が日本人観光客に配布するパンフレットになってしまう。私は一九八二年、社会主義時代のプラハを訪れたが、この一文で、町は相当変わったな、という印象を受け、興味深く読んだ。

タクシーに対する私の思いは、それはその国や都会の醸し出す諸々の社会の断面を我々に伝える象徴的なものではないだろうかということだ。

私はモスクワ、シカゴ、ブリュッセル、ロンドンと海外勤務を経験し、その他、出張や観光で、正確に数えたことはないが、それこそ何百回、いや千回を超すかも知れないほど、さまざまなタクシーのお世話になった。お世話になったということは、あらためて彼らに感謝すべきものかも知れない。良い思い出、悪い思い出は無数にある。しかし、人は当たり前のこととは忘れ、悪い体験だけを克明の覚えている。

シカゴ時代、全米の会議がニューヨークのエセックス

ホテルで開かれた。会議が終了し、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ダラスに帰る同僚たち四人とケネディ空港へ行くためタクシーに乗った。イタリア系の運転手が、「いま、バン・ウィック・エクスプレスウエー下り道路は事故で封鎖されている。ブルックリンの方を回って行くしかないがよいか」と言う。我々は時間には余裕があったので「仕方ない」と言って乗車した。空港に着いて、空港支店長に道路封鎖のことを尋ねたところ「その事実はないよ」といわれ、初めて騙されたことが分かった。料金は通常の二倍半くらいだった。イタリア人は騙しの天才だと聞いていたが、まんまとやられた。

その後、そのイタリアを旅行した。イタリアは北の豊かさ、南の貧困といわれるが、それはタクシーにも現れていた。ミラノではホテル前のタクシーはスムーズに流れ、私も不愉快な目に合わなかったが、ナポリでは事情が違った。ホテル前には多数のタクシーが行列して客待ちをしている。玄関からお客が出ると、ハゲ鷹のように群がる。需要と供給の関係でサービスが良いはずだが、この時とばかり、メーターを夜間割増し料金にして、高

額料金をせしめる。プラハと同じである。私は「警察へ行って処理をしよう」と言ったら引き下がった。各都市には悪質タクシーに関する苦情処理機関がある。タクシーの印象を良くして観光客を増やそうと必死なのだ。日本人はほとんど苦情を報告しないそうだ。イタリア観光局に言わせると、悪質運転手は東欧や旧ユーゴからの移民が多いという。

タクシーは景気を表すバロメーターという人もいる。ラッシュアワー時や雨天の時に客待ちしているタクシーが多いのは不景気だそうだ。先日、帝国ホテル前で空車のタクシーが泰明小学校の方まで行列していた。一部上場の大会社の上級役員クラスでも、社有車やハイヤーからタクシーに切り替えているというから、タクシー需要は増えたと思ったが、そうではないらしい。ほんとに不景気なのだ。それでも、あまり悪質なタクシーのことを耳にしないのは日本人のモラルの高さからか、まだ生活に余裕があるからなのか。

私の経験では外国でも小さな町のタクシーは親切だ。だから、ローマやナポリのタクシーに乗って、イタリア

全土のタクシーを非難するのは間違いと思う。ボローニヤ近くの小さな町、レッジョ・ネル・エミリアからカノッサ城（カノッサの屈辱で有名）へ行った時、駅前からタクシーに乗った。三〇キロも離れているので、運転手は一瞬変な顔をしたが、「料金はちゃんと払うよ」と言ったら安心したらしく、私を乗せてくれた。カノッサに着いて、つたない英語で城の廃墟を案内してくれた後、帰る際に、私の貧乏そうな身なりに同情したのか「帰りの料金はいらない」と言って、メーターをゼロにして走り出した。本当の理由は「もう今日は二日間分稼いだから」だという。何という生活の余裕なのだろう。これは例外かも知れないが、タクシー料金を半分もまけてもらったのは、後にも先にもこれが初めてである。もう、こんな経験は二度とないだろう。

大都市は悪質なタクシーは多いと言ったが、例外なのがロンドンである。馬車にエンジンをつけたような、背が高い箱型のタクシーは乗り心地は満点である。狭い空間に押しこまれた感じがしない。貴族的気分になれる。運転手が道を良く知っているのも心強い。厳重な地理試

験があり、合格まで二年かかるという。日本では、お客が運転手に道順を教えないと自宅にたどりつけない。食えなくなったらタクシーの運転手にでもなろうという国柄が多いなか、イギリスでは立派な職業だ。ロンドンでの三年間の生活で、タクシーによって不愉快にさせられたことはなかった。大きな荷物も玄関まで運んでくれて、親切だ。

たかが、タクシーというけれど、これを通して人間、社会、国柄が見えてくる。まだ、モスクワ、ペテルブルク、ベルリンなどのタクシー事情を書きたいが、紙面の都合で終わりにする。



晩秋の高雄山

遠藤 俊也

杉林を抜けたあと、山道は羊歯しだの生い茂った雑木林へ
と入る。狭いそま柚道だ。行けどもゆけども目指す古い墓な
ど影も形も見当たらず。何度ひき返そうと思ったことか。
と不意に、数人の制服を着た男子中学生が上手より現
れた。「墓があったか」とのわたしの問いに、「何もない
よ。ついこの先まで行つて戻ってきた」と言う。わたし
は、覚悟を決めて登り続けることにした。

道はますます険しくなる。ことしの夏続いた台風の雨
のせい、V字型にえぐられている。傾斜が急な上に、
岩や木の根っこがむき出しになっているので、一歩一歩
慎重に足場を選んで進んだ。そのうち、息も切れてくる。
ときどき足をとめては大きく息を吸った。

ちよつと明るくなつてきて、雑木のなかに赤松がチラ

ホラ混じつて見える。道の片側に鉄線が張られ、「松茸
の採取を禁ず」と書いた板がぶらさがっていた。そのさ
き、道は左右に分かれ、その角に、かどへ文覚上人の墓左へ
二〇〇メートルとの立て札が眼に入った。ほつとした
登り口から既に四十分以上経っていた

元氣を出して、しばらく歩いて行くと、急に視界が広
くなった。見ると、山の頂きの小さな広場に石の墓が二
基並んでいる。いずれも鎌倉時代に流行した五輪塔だ。

——ことし十一月半ば、京都の西北、高雄山の中腹に
ある古刹神護寺へ紅葉を見に出掛けたときのことだ。こ
としは全国的におくれていた紅葉が、高地のせい、こ
こでは見事だった。

広い境内を散歩したあと、金堂で平安初期の国宝、本
尊薬師如来像を拝観。その帰途、山門近くに立った石柱
に「文覚上人墓入口」と刻まれてあるのに気付いた。案
内パンフレットの略図には、この高雄山の頂上に文覚上
人墓、麓の右手に和氣清麻呂の墓が記されている。大し
た道のりではなからうと思ったわたしは、道を左にとつ
て文覚上人の墓に向かい、山を登つてきたのだった——。

向かつて左が文覚上人の墓だ。へ文覚上人御墓と刻んだ真新しい石柱が石の柵さくの前に立っている。傍らには、建物の礎石と、これも石造りの屋根根にのせる露盤とが置かれてゐる。かつては、お堂のなかに墓があつたに違いない。

右手の墓も同じく石の柵で囲まれているが、その正面には菊の御紋が金色に光っている。横にある木の高札にへ性仁親王御陵 宮内庁とある。

文覚上人は、平安後期から鎌倉初期にかけて活躍した真言宗の高僧だ。若いとき遠藤盛遠と名乗る北面の武士だった彼は、愛人の人妻、袈裟御前を誤って殺してしまい、出家する。芥川竜之助の作品『袈裟と盛遠』はこれを書いたものだ。

上人は、厳しい修行を積んだのち、後白河法王の信任をえて神護寺を再興するとともに、都にある教王護国寺の修理にもたずさわった。しかし、法王の逆鱗に触れて二度島流しに遭っている。思えば数奇な一生を送ったものだ。その人が、ここ下界を見下ろす場所に永遠の眠りについている。

性仁親王は、後深草天皇の皇子である。文覚上人を敬慕するあまり、神護寺に籠こもり、寺運興隆に大いに貢献したという。

標高五〇〇メートルはあろうか。ここからの眺望は実に素晴らしい。南には遙か彼方に、洛北の山々が延々と連なる。眼を下に向けると、清滝川が作った深い谷が常緑の樹々で掩われている。都のすぐ近くで、これだけの雄大な眺めは数少ないはずだ。

微風のそよぐ、暖かな小春日和の昼下がりだった。疲れていた両足を投げ出して仰向けになった。人の来る気配はない。静寂そのものだった。大きく息を吸い込む。心地よかった。

ひと休みしたあと、参道の茶店で買ったおはぎがあることに気が付いた。それを食べたあとのお茶の何とおいしかったことか。

予期せぬ「老いらくの山登り」をしてしまったが、文覚上人の墓にお参りできたし、ひさしぶりに山の爽快な雰囲気をも味わえた。満足だった。

帰りは下り一筋なので、二十分ほどで入り口に着いて

しまった。誰とも行き合わなかった。

(平成十年十一月三十日)

学生全員が独自で参列した校長の葬儀

Ⅱ 幻の学園ストを未然に防いだⅡ

野村 嘉彦

既に戦争機運、軍国色の強い昭和十二年二月の出来事であった。私たちの在学していた大阪商科大学（旧制）高商部の主事（校長格）の織田松太郎先生が突然不帰の人となられたときのことである。

先生は明治四十二年春から勤続二十八年あまり。謹厳実直、柔和なお人柄は高商部内尊敬の的であった。不帰の報せに全学生は呆然自失の状態にあった。

せめて盛大な学園葬で心からのお別れをと期待していた。

わたしは当時二年B組の級委員を拝命していた。折か

ら三年生の級委員から召集がかかった。私はとっさに明日の学葬の準備と考えて、一応クラス全員に私が会合から帰るまで待機するように要請しておいた。ところが、三年生の級委員の報告は意外なもので、学葬は行われないうとのことである。しかも、その説明が要領を得ない。私の主張で、高商部の教授をお呼びして大学の職員会議の討議内容を聞いたが、極めて菌切れが悪い。各級委員の追及に対して、しまいには学葬なんかもつての外と取れる発言が出た。

当時、我々高等商業部の学生には日ごろ大阪商科大学高等商業部は学部（大学本部）の単なる従属機関で、河田学長の提唱される三位一体、即ち大阪商科大学は学部、予科、高等商学部で構成されたユニークな大学である、という定義はまやかして、実際は高商部は付属物で、学部の添え物ではないか。だから、一日も早く独立して名実共に兼ね備えた高等商業学校に生まれ変わるべきだ、という考えが高商部の生徒の中に芽生えてきていた。そして、まずは何事にも自主性を育てたいと考えていた。その矢先、高商部の校長格の織田先生の学葬実施が大

学の職員会議で否決されて、おめおめと引き下がった高商部の幹部教授連の煮えきらない説明に、我々の不満は極に達した。

こんなやからとは問答無用。河田学長とひざつめ談判をしよう、と意見が一致し、代表を選んだ。私もその一人として加わり、大学構内の、約三〇〇メートル離れたところにある建物へと出かけた。ところが、体育科の最も常識的な先生が自転車で我々を追いかけてきて「どうか学長に会うのは思いとどまってください。君たちの気持ちは良く分かっている。いま大学のS学生課長が職員会議の内容を説明に来るから、その話を聞いてから次の行動を起こしてください。くれぐれも軽挙妄動は止めて欲しい」と熱弁を振るわれた。

我々は、勿論ことを荒だてる気持ちは毛頭ないので了承した。程なくS教授が来られて、詳しい説明があった。河田学長は元來、商科大学の「学部、高商部、予科」の三位一体論は変わらないが、大学葬は自分が死んだ時以外はあり得ないとの信念であることがわかったので、それ以上の討議は無用、と各職員が感じて織田先生の葬儀

は学葬とはならなかった。高商部の皆さんの要望に添えなかったのは遺憾だ、と表明があった。この説明で、学校側の事情がわかり、我々代表は一応、納得した。

だが、みんなの気持ちは晴れない。何が自主的高等商業学校か、やはり学部の従属機関に過ぎないのか？という疑問は消えない。この上は我々学生が事実上の学葬にしようではないかと、意見が一致した。再び各自クラスへ戻り、説明の結果、何の異議も無く、直ちに参列の準備にかかった。全校生徒六〇〇名。先生のお宅は、当時南海電鉄の沿線にあった。学校からは約一キロのたんぼ道を歩いて、南海電鉄の我孫子駅から乗車して二〇分を要する。南海電鉄は我々の要請を快く引き受けて、特別仕立ての臨時電車を配車してくれた。

翌朝は幸い晴天であった。全校生徒が校庭に集合し、三年委員の総指揮の下に全員配布した喪章をつけて出発した。

黒い学生服の、黒い喪章の六〇〇名が隊伍整然と、学校からの長いたんぼ道を進み、貸し切り車両に乗り、最寄りの駅に到着。再び行進して織田先生邸の前の空き地

に整列した。ご自宅の中で葬儀が行われている間、一同ほとんど私語もなく、勿論たばこを吸う者もなく、約一時間近くの間、肅然として、全員が心から織田先生の死を悼んだ。

当事者である我々は真剣であったが、他人からみれば異様な光景であったと思う。高商部から来られていたO教授が、先生方を代表して、感激の面持ちでただ一言「ありがとう」と言われて、はじめて、良いこととしたのだな、との実感が湧いてきた。

再び校庭に戻り、三年級委員から全員参加の学生に対して協力への感謝の挨拶があった。清々しい気分であった。「学生には自主独立の行動を起こす力があるんだ」ということを、学園の内外に示し得たことに私自身大きな満足感を味わった。

こうして、一歩間違えば学園ストに突入する恐れを内蔵していたこの事件は無事終わり、学生全員はその翌日から、あたかも何事もなかったかのように平穏な明るい学業を続けたのであった。

もしこのことをマスコミが知れば、当然大きな事件と

なり、私も一時は英雄まがいとなり、やがて卒業、就職にも大きな変化があったのではないかと慄然とすることがある。

それにしても、最近マスコミを一時的に賑わし、あるいは、マスコミが仕立てたのではないかと噂されているある学校の「生徒の開いた卒業式」といった記事を見ると、背筋が寒くなる思いがするのである。

(一九九八年十二月十五日記)

今昔物語

村 田 孝 四 郎

父はさる造船所のしがないサラリーマン技師だった。毎朝定刻に家を出て、夕方定刻に帰宅した。日祭日はもちろん休みで、土曜日は半ドンだった。残業や休日出勤はほとんどなかったようだ。たいした給料はもらってな

かっただろうが、一家五人なんの不自由もなく生活できた。もっとも、家にある電気製品といえはラヂオぐらいなもので、蓄音機は金持ちの家にしかなかった。今は昔、戦前の話である。

その後、技術革新が進み、世の中の生産形態は大きな変革を遂げた。機械化、電化、自動化、コンピュータ化、ロボット化と革新のスピードはとどまるところを知らない。生産形態ばかりでなく事務形態もコンピュータ化によって様変わりした。合理化、効率化の掛け声とともに人員削減も急速に進んで、生産性は飛躍的に増大した。今まで一〇〇人掛かりでやっていた仕事が一人で行えるようになった。

もう、そんなに大勢の人が長時間働かなくてもいい時代が来た。一日八時間労働は二時間労働ですむようになり、週休四、五日制は当たり前になった。定年は五十五歳から四十五歳に引き下げられ、あとは芸術やスポーツや趣味や遊びで優雅に暮らせるようになった。十分な運動と休養、仕事上のストレスの解消で人はみな健康になった。高い教養と思ひやりの心も身につけられるように

なった。「人は能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」という、共產主義者の唱える理想社会の実現がにわかに現実味を帯びてきた。そうなれば高齢化社会も少子化社会も問題とならない。

と、こう夢見たのだが、現実はそうはならなかった。なぜだろう。どこがおかしいのではないか。技術革新の成果を誰かが独り占めしているのではないのか。我々は搾取されているのではないのか。それとも国民に還元されるべき果実が、どこかに捨て去られているのではないのか。過剰設備、過剰生産、大量消費、新製品開発、大量廃棄。無駄なことに使われているのではないのか。軍備、宇宙開発、海外援助等々。はたまた一部のものの懐に入っているのではないのか。農協救済、住専救済、土建業者救済、銀行救済等々。

もちろん、それもあるだろう。だが我々の生き方にも関係があるように思われる。戦前は今は違って各家庭に車やテレビやクーラーやパソコンがあつたわけではないし、冷蔵庫も洗濯機も電話さえもなかった。当時は、それでもさして不便は感じなかった。流行を追ったりゲ

ルメを求めたり海外旅行を楽しんだり別荘を持ったりすることもなかったが、そのことで不満を言う人は誰もいなかった。それなのに、今ではそういうものがなかったり、できなかったりすると生活に不便や不満を感じる人が多い。人間の欲望には限りがない。

そういう、次から次ぎへと作り出される、いわば三種の神器を追い求めて、人はいつまでもいつまでも働き蜂のように働き続けるのだろうか。どこかでこの悪循環を断ち切れないものだろうか。

昔の貴族たちは自ら働くことはせずに奴隷や農奴を使って優雅に暮らしていた。その貴族たちの間から現代人も高く評価するような、すばらしい芸術が生まれ文化が創りだされてきた。あくせく働くものからは何も生まれない。

働くことは機械に任せ、人は文化の創造にのみ専念できるようなにはならないものか。人は朝ボタンを押すだけで、あとは全部ロボットがやってくれるという時代になっても、人はなお働かなければならないのだろうか。

夜九時、サラリーマンの息子に電話してみた。嫁が出

てきて、きょうも残業でまだ帰っていない、と言う。息子は彼の祖父の時代よりも長時間働かされている。休日出勤もあるようだ。過労死が心配になる。世の中どこかが狂っていると思う。

国語を使わない不思議な国

|| シンガポール ||

莊 司 忠 志

インターネット花開く現代の世界にあつて、シンガポールは実にラッキーな国である。歴史的理由から、独立法でマレー語が唯一の国語と定められているのに、実質的には使うこともなく、植民地時代からの英語を標準語として普及させてきた。シンガポリアンの知恵は、ヨーロッパやアジアの一部で見られる不幸な言語紛争やナショナリズムを巧みに避けながら、都市国家シンガポールを今日のように発展させてきたのである。

マレー語は、人口の二三パーセントほどのマレー人社
会で話されているだけであり、華人やインド系社会では、
単純なマレー語は理解されているものの、ほとんど使わ
れていないのだ。独立記念日とか国家行事で斉唱される
国歌「進めシンガポール」『Majulah Singapura』はマレ
ー語のみで、ほかの言語には訳されていない。国歌は小
学校から教えられている。この国歌をマレー語で斉唱す
る時だけが、マレー語を理解しないマレー系以外の大多
数の国民が国語や自分の国の成り立ちを意識する瞬間か
も知れない。

独立以来、シンガポールの言語のあり方はいくつも
の変遷と試行錯誤が繰り返されてきた。政府が、マレー
系以外の国民にもマレー語の修得を奨励したこともあっ
たが、一般には根づかなかったし、「中国語を話そう—
Speak Mandarin」のキャンペーンも長くは続かなか
った。一部の華人社会では、中国とのビジネスのため、
標準中国語の重要性は認識されており、熱心に学ばれて
いるのだが。面白いのは、華人の好きなマージャンでは
中国語と英語のほかにマレー語の単語がたくさん使われ

ていることである。

政府機関では、公用語である英語、標準中国語、マレ
ー語とインド系のタミール語が使われており、各種の申
請書・届け用紙や、紙幣・コインには四つの言葉が印
刷・表示されている。議会ではどの公用語で話してもよ
いことになっているが、実際には英語しか使われていな
いし、議事録も、すべて英語である。テレビやラジオで
は四つの言葉のほかに、中国の方言である福建語や広東
語の番組も提供されている。国の空の玄関であるチャン
ギ空港の表示はほとんど英語だし、ほかの公用語を探す
のは困難だ。

多くのシンガポリアンにとって、英語は母語ではな
いし、マレー系の家庭ではマレー語、インド系ではタミ
ール語が話されている。華人家庭では、英語や出身家庭
の中国の方言である、広東語、福建語、客家語、潮州語、
海南語などさまざまである。といっても漢字を読み書き
できるのは少数派なのだ。英語を第一言語とする華人家
庭でも、親が標準中国語を知っている場合は、できるだ
け中国語を子供の耳に吹き込み、慣れさせようとするが、

幼い子供にとつて二つの言語を聞き分け、理解するのは混乱するし、容易ではない。母語がなんであれ、一歩外に出れば英語やいろいろな言葉が聞こえてくる。子供たちは、不十分でも自然にバイリンガルが多言語に育つてゆくのだ。

かつてのシンガポールは商人の町であり、アジアとヨーロッパの物産の中継貿易で生きていた。当時は大企業や外国からの会社も多くはなく、一般家庭での男の子への期待は商才である。高い教育や十分な英語の知識がなくとも、商才さえあれば生きてゆけた。小学校か中学校を出れば、問屋にでも入って、一から商売を覚えるのが普通だったし、高等教育や外国留学は一握りのお金持ちの特権だった。しかし、経済の急速な発展につれ、外国からの企業が進出し、大きな会社や組織が活動し始めるようになると、企業や組織は高い教育を受け英語のしつかりした若者を求めるようになる。社会全体が教育と英語の知識の必要性に目覚めるようになって、現在では日本や韓国以上に進学熱が過熱している。

シンガポールの男子は十八歳になると兵役の義務があ

る。兵舎で一緒になる若者たちの人種や言語の背景と能力はさまざまである。軍隊用語の一部はマレー語だが、ほとんどは英語で、単純な命令はともかく、複雑な作戦や討論を理解できない初年兵が多い。

会社に向く女性秘書が、夕方大学や英語専門学校の夜間コースに急ぐ。彼女は高校を卒業し、秘書学校で訓練された有能な秘書なのだが、自分の英語能力を自覚していて、さらにレベル・アップしたいのだ。その上で会社に昇給を要求するか、折り合わなければジョブ・ホッピング〈Job Hopping＝転職〉である。男女を問わず、収入に直結する向上心は強い。

オフィスや工場でのコミュニケーションや雑談に、簡単なマレー語や中国語の方言が日常的に使われているが、会議や書類はすべて英語だし、コンピューター用語やインターネットもほとんど英語である。オフィスのオートメーションは充実しているし、その生産性が世界のトップ・レベルにあるのも英語のおかげだ。事務処理が英語で世界と直結できるので、翻訳のわずらわしさもない。

一九八〇年代の初頭、政府は、シンガポールを世界の金融センター、ハイテク・センターにしようと明確な政策を打ち出した。今日、その成果は目覚ましい。複雑な多言語環境を克服しながら「国語を使わない不思議な国シンガポール」は、翻訳を必要としない英語を武器に、インターネットを最大限に利用して世界中の情報にアクセスしている。こうして、小国シンガポールは、ラッキーにも国際語である英語を標準語にし、近隣の国々より、はるかに速いスピードでグローバル化を達成しつつある。

シベリア鉄道と日本（一）

大塚 滋

極東ウラジオストックと首都モスクワを結ぶシベリア鉄道は延長九、二九七キロメートル、世界最長の単一鉄

道である。

建設期の明治初年から昭和にかけて、この鉄道と我が国の間には数多くの因縁があった。

一八七三年（明治六年）ウラジオストックを開港し、太平洋への進出を果たした帝政ロシアは、モスクワとの連絡・補給の手段として鉄道の建設を計画し、一八七五年（明治八年）に建設が開始された。しかし、過酷な自然条件のため工事は遅々として進まず、これに業を煮やした皇帝アレキサンドル二世は本格的着工を命じる親書を作成し、一八九〇年（明治二十三年）ニコライ皇太子出席のもとウラジオストックで起工式が行われた。

ニコライ皇太子はそのあと日本に立ち寄り、一八九一年（明治二十四年）五月十一日、大津市において警護中の巡査、津田三蔵に斬りつけられ負傷した。

有名な大津事件で、明治天皇が見舞うとともに、政府は皇室罪を適用し、津田を死刑にしようとした。司法部は普通謀殺未遂罪の適用を主張して政府と対立、時の大審院長、児島惟謙らはあらゆる手段をもって政府の干渉を退け、結局、無期徒刑とした。明治憲法下、行政の圧

力を排除して司法権の独立を擁護した事件として著名である。

ニコライ皇太子はその後、一八九四年（明治二十七年）ニコライ二世として帝政ロシア最後の皇帝に即位するが、ロシア革命の翌年一九一八年（大正七年）七月十六日深夜、幽閉先のウラル地方エカテリンブルグの民家で皇后、五人の子供たちとともに、レーニンの命を受けた秘密警察の手で銃殺された。

以来約八十年、遺体の行方は謎のままだったが、一九九一年（平成三年）同市郊外で発掘された九遺体についてDNA鑑定などの結果、皇帝一家のものと断定された。この間の経緯と遺体をどこに埋葬するかなどを巡って昨年の夏ごろまでマスコミに大きくとりあげられた。

DNA鑑定で九九・九%間違いないとされたにもかかわらず、多くの疑問も残されているという。例えば、大津事件で津田巡査にサーベルで斬りつけられた傷は相当深かったが、遺骨にはその痕跡がないなどの指摘もある。

皇帝の親書を受けて建設工事は加速されたが、冬は酷

寒マイナス六〇度、無人の永久凍土地帯で、犠牲者も数多く出た。全線中最大の難工事、アムール河の架橋が遅れたため、一九〇四年（明治三十七年）、この区間を避けて満州里から国境をこえて清国を走り、ハルピンを経て再びロシアに入り、ウラジオストツクにいたるルートによって、ようやくモスクワと結ぶことに成功した。

一九〇四年～一九〇五年（明治三十七～三十八年）の日露戦争にこの鉄道がどれほど貢献したか、東部から兵員、武器弾薬を満載した列車が日夜極東に輸送された。その量は日本側が推定した単線鉄道の輸送力を大幅に上回っていたが、その理由が分からなかった。一説によると、極東に到着した貨車は東部に回送せず海に捨て、単線鉄道を一方通行として使ったという。これなら複線鉄道と同じ輸送量が確保されるが、いくら戦争遂行のためとはいえ、鉄道の常識では到底考えられないことである。しかし、今となっては真偽の確かめようがない。

日露戦争は日本の勝利に終わったが、その後一九一六年（大正五年）アムール河の鉄橋が完成し、九、二九七キロメートルのシベリア鉄道が開通した。一九三七年

(昭和十二年)にはアムール河の鉄橋を除いて全線の複線化が終了し、輸送力は大幅に向上した。以後、この鉄道がソ連の極東経営にどれほど大きな役割を果たしたかは改めて述べるまでもない。極東艦隊の母港ウラジオストクや、精銳を誇る日本の関東軍と対峙し、ソ満国境に展開する極東軍への補給をはじめ、資源の宝庫といわれたシベリアの開発にも大きな力を發揮した。

一九三九年(昭和十四年)五月、滿蒙国境ホロンバイル地方の一望千里、無人の草原で国境紛争が勃発した。ノモンハン事件である。約半年にわたる日ソの戦鬪の結果は関東軍が、西部から大量に投入されたソ連の機甲部隊と空軍によって完膚なきまでに叩かれ、局地戦争とはいえ、負け戦で終わった。この時も、関東軍はソ連の補給線に問題ありとみていた。戦場となったノモンハンから鉄道の駅までの距離はわが軍が約二〇〇キロメートル、ソ連軍が七五〇キロメートルであるから、わが方に有利とみていたが、鉄道そのものと駅からの自動車の輸送力を甘くみていたことが後になって判明した。シベリ

ア鉄道で帰国したモスクワの日本大使館付き駐在武官が、貨物列車や軍用列車で予想をはるかに超える数の戦車や重砲が東へ送られるのを目撃、報告しているが、黙殺され(半藤一利「ノモンハンの夏」より)、シベリア鉄道に対する日露戦争の反省はここでも生かされなかった。

日露戦争、ノモンハン事件さらに緊張の続くソ満国境への不断の軍備増強など、軍用鉄道としてのシベリア鉄道の役割のほかに、開通以来永い間欧亜を結ぶ唯一の鉄道として客貨の輸送にも大いに貢献してきた。明治、大正から昭和も戦前にかけて、ソ連をはじめヨーロッパ各地への赴任、出張、旅行などはまだ飛行機の無い時代とあって、シベリア鉄道が専ら利用された。日本内地、朝鮮、満州やシベリア鉄道、ヨーロッパ各国の鉄道の優等列車には外交官、高級軍人、恰幅のいい紳士や着飾った婦人たちが多く見受けられ、飛行機が出現する前の、第二次大戦が勃発する前の鉄道の華やかな第一次黄金時代であった。

しかし、この華やか時代も間もなく終わり、鉄道は急速に軍備強化、戦争遂行一色に塗り替えられてゆく。

〔悠遊〕第七号に続く〕

岐路にたつ日本経済

岡 政 昭

最近とみに銀行の不良債権問題からんだ金融不安と景気の先行き不況感がクローズアップされています。以前銀行に籍をおき、ニューヨーク、ロンドン、シドニーといった国際金融市場で、日本の銀行と円の存在感を体験した者にとっては、やるせない気持ちでいっぱいです。先だつての宇宙飛行士・向井さんからの爽やかなエール「宙返り何でもできる無重力」に対し「宴（バブル）の後は公的管理」では何とも情けなく、「青き小惑星^{おほし}に日はまた昇る」との願いを籠め、岐路に立つ日本経済の将

来を占ってみたいと思います。

二十世紀の初頭、新興資本主義国として台頭してきた経済大国・日本は、政府の緊急経済対策にうたわれたように、二〇〇〇年度に回復、二〇〇一年度以降は成長軌道に乗せて、二十一世紀には円の国際化とか東京資本市場の世界三極化とかいった金融面でも、はたして世界に顔が見える存在となりうるのか、それとも不況が長引き「病める経済大国」のままジリ貧状態が向こう十年程度は続くのか、あるいは少子高齢化とともに活力そのものが失われて経済大国の座から滑り落ち、やがては「アジアにおけるジュニア・パートナー」の地位に甘んずるのか―日はまた昇るのか、傾きかけたままか、沈むのか再生にかけての正念場にあると考えられます。

「あまりにも小出しで、あまりにも遅すぎる（too little, too late）」日本の経済対策は、結局問題を先送りし、平成不況の傷を大きくしてきた憾みがあります。超低金利の継続と追加減税による景気刺激効果については流動性のわなと消費者の買い控えムードがあり、加えて公的年金、介護など社会保障の未来像不足による老後

の不安から、政治、行政に対する不信感とあいまち、循環的な景気対策と構造改革は「もはや待ったなし」の状態になって久しいところ。ビッグバンも織り込み、今回の不況克服をチャンスとした平成改革の断行がまさに国際的に問われています。

現在、フローでみた需給ギャップは、国内総生産(GDP)五〇〇兆円の六％・約三〇兆円にのぼるといわれます。ちなみに、ストックでみた国民総資産では株式、土地の値下がりによるキャピタル・ロスから、GDP二年分余にあたる一、二〇〇兆円程度がバブル期から目減りしたとのことです。国民経済のバランスシートはたいへんな直撃を受けたわけで、不動産、株式を担保とし不動産やノンバンクに対する過剰融資に走った銀行の債権が悪化したのも当然です。これまでの護送船団、奉賀帳方式、タテ割り行政の見直しとともに、さきの金融国会で迂路曲折を経た公的資金の導入も最終的には六〇兆円と決まり、金融システム安定化のための体制も整備されてきましたので、巷間一〇〇兆円と伝えられる不良債権の消却、過少資本の是正、貸し渋りの解消も順次軌道に

のつてくるものと思われます。金融再生の鍵は国会の政治と官庁の行政から民間のビジネスに移ったわけで、鍵は経営者のモラルを含めたリーダーシップと処理のスピードにあります

半面、コンフィデンス・クライシスとも、ガバナンス不況ともいわれる閉塞感打破のためには、需給ギャップを埋めるための景気対策と並んで構造改革が押し進められなければなりません。問題は、バブル崩壊の教訓を踏まえて、需要面で実効性があり、結果が二一世紀につながる潜在需要（例えば住宅のリフォーム、情報通信網の整備、医療介護の充実、大気・水汚染の改善など）を掘り起こすかたわら、ヒト、モノ、カネにわたる供給面で成長力を回復すること、すなわち人材の教育をはじめ陳腐化した過剰の設備、在庫、不良債権を償却するとともに、時代のもとめる新しい産業、商品、市場、資本、技術（例えばシルバー産業、エコ・カー、円市場、ベンチャー・キャピタル、遺伝子の組み替えなど）を提供していく必要があります。幸い、ハードの物作りについては自由競争のもと、「開かれた世界」のトップを勝ち抜い

てきているわけですから自信をもって臨めます。付加価値を高めることにより「国内の空洞化」現象も克服（例：燕のステンレス産業など）してまいりました。今後は技術移転を含む「国際的な共生」を課題としましょう。他方、自由化の洗礼をうけるソフトの分野では、国際標準化や知的所有権への挑戦を含め、これまであまりにも日本的な規制や慣行により、建前はオープンながら本音ではクローズドであった「島国的業界」のスクラップ・アンド・ビルドが求められます。

たとえば「お上伺い・横並び・皆で渡れば怖くない」企業文化にとつぷり浸かってきた銀行部門では、旧体質の完全リストラをはじめとして、本来の信用仲介にかかわる決済と信託機能を高度化する一方、得意業務（core competence）を強化しなければなりません。内外ネットワークを通ずる、いわゆる「マネー・センター」銀行の総合金融サービス、地域社会に密着した「リージョナル」銀行のワンストップ・マネーショップ、あるいは個人、法人の顧客ニーズに応じたプライベート・バンキングや投資銀行の活動、隙間（niche）商品・サービスに特化

したブティック型専門銀行、さらには持株会社など、時代の要請に応じ態様はさまざまでありましょう。しかし、一貫して信用貨幣経済の中核にあり、血液の役割を果たす銀行部門は、不良債権の早期処理による健全化で市場からの信頼を回復するとともに、成長する実体経済への資金供給・仲介者としてリスク・キャピタルにともなうリスクテイキングとマネジメントの技能を研ぐべきです。生き残りをかけた日本版ビッグバンは、資本主義の洗礼をうけた明治日本から継承の企業家精神「殖産興業」の平成版に他ならないと、坂の上の雲に日の名残を仰ぎながら、蟻の思いを寄せる今日このごろです。

（一九九八年十二月十六日「茶の間の経済・金融談義」からの抜粋）



帰巢本能

亀井弘次

「とうもろこし」の入った袋を、炎天下の道に肩からおろした途端に、袋が裂けて中身が無残にもこぼれてしまった。貴重な配給の「とうもろこし」だ。

カーキ色の制服をぬいで、袖をしばらく袋の替わりとし、一粒一粒たんねんに拾って、その中に入れる。

旧制中学のころ、伝書鳩を飼っていた。既に食料難がはじまっていたが、日本伝書鳩協会に登録していた鳩には、軍用に召集（？）される日もあるということ、餌の配給があった。「とうもろこし」「えんどう豆」「麻おの実」の三種類である。その餌を駅から自宅にかついで帰る途中の出来事であった。

当時、所属クラブ主催の伝書鳩レースが盛んに行われていた。レースで勝つためには、第一に血統のすぐれた

鳩を手に入れねばならない。競争馬の場合と同じだ。

血統書には両親、さらに祖父母のレース記録が書かれている。五百キロメートル、千キロメートルのレースで上位を占めた鳩の子供は、当時の金で三十円以上しており、中学生の小遣いではとても手がでない。

しかし、窮すれば通ず。道は無きにしもあらず。まず飛翔力は劣っていても、子育ての上手な番が意を用意する。その上で血統の優れた卵をもらってきて、育て親の産んだ卵とすり替えるのだ。

鳩は春先から必ず二個ずつ卵をうむ。雛が生まれて一月ほだち、巣離れをすると、また次の卵を産む。

鳩の社会では、長男の甚六の正反対で、春、一番目に生まれたものが最も優秀とされている。レースに出すような親は子育ての疲労を避けるため、二番目以降の卵は産むと間もなく取り去る。それを貰ってくるのだ。

しかし、これにも一つの仕掛けが必要となる。

レース鳩の二回目の産卵と、育ての親の産卵のタイミングを合わせなくてはならない。レース鳩の産卵日を推定してもらい、あらかじめ別居さしておいた育て親の夫

婦を、産卵日の約一週間前にお見合いをさせて、ドッキングさせると、ほぼ間違いなくレース鳩の産卵日と近似した日に卵を産んでくれる。そこですり替える。そして、孵った雛をレース鳩の飼育者に公認してもらう。勿論、その飼育者とのコミュニケーション、あるいは信頼が前提となる。私の場合は、近くの大きな鳩舎の持ち主に気に入られ、大変お世話になった覚えがある。

さて、レースに話を移そう。

たとえば二百キロメートルのレースだとすると、五十キロ、百キロ、百五十キロと距離をのばした訓練フライトにパスした鳩たちが集められる。当時、阪神間に住んでいたので、三ノ宮駅の小荷物預かり所にクラブ・メンバーがそれぞれの愛鳩を持って集まる。

そこで数字の刻印された幅一センチほどのゴム輪と、鳩時計を渡される。ゴム輪は出場選手の足につける。

鳩時計は一升枡の一・五倍ぐらいの大きさの木箱で、中に時計と、それと連動して回る円形の記録紙が入っている。時計の時刻を精密に合わせた後で封印される。蓋に小窓がついており、帰ってきた鳩からはずしたゴム輪

を入れ、ガチャんとレバーを回すと、その時刻が記録される。

選手鳩たちは、国体などで鳩を放つ時に使われる大きな籠に入れられ、貨物としてレースの出発地に送られる。クラブの競技委員が現地で定められた時刻に籠をあける。レースに参加した者は、自分の鳩舎で帰ってくる時刻を計算しながら、天を眺めて待っている。

空にいくつかの黒点が見えたかと思うと、群れの中から一羽だけ離れて急降下してくる。最高に興奮する時点だ。鳩舎に飛び込んだきた愛鳩を即座につかまえ、ゴム輪をはずして鳩時計のレバーを回す。この一連の動作が特に百キロ、二百キロの近距離レースだと勝敗の分かれ目になるので、日ごろから訓練を怠らない。

私は二百キロまでしか参加したことがないが、それでも未帰還の鳩が出る。鳩舎の側に立ちつくし、夜を迎えるのは辛いものだ。帰ってくる途中で、隼などの猛禽にやられることが多い。一流のレース鳩は一分間に千メートルのスピードで帰ってくるものだが、隼たちの急降下のスピードにはかなわない。

さて、伝書鳩は何を頼りに帰ってくるのだろうか。

一度、選手鳩たちを放す作業をしたことがあるが、放たれた鳩は集団になって、ちょうどマラソンランナーがトラックを回るように、二、三回空を回ると方向をきめ、矢のように飛び去る。

当時はレースに至るまで訓練フライをすることから、優れた視力による地形記憶説が有力だったが、地磁気説、糞電説など議論がかわされていた。糞電説とは鳩舎に残した自分の糞の発する電気を感じるとするという愉快な説である。

地球上には伝書鳩に限らず、不思議な能力をもつ生き物がさまざまとある。

自分の生まれた場所を忘れず、年を経て帰ってくる鮭や海亀。南極洋から北太平洋まで信じられない距離を行き帰する鯨。気候にあわせながら、シベリアから日本へ、更に南の島へ渡って行く鳥たち。酸素ボンベも持たずにヒマラヤの上空を悠々と越えて行く鶴もいる。

こうして見てくると、地球上で最も賢そうな顔をしている人間が、せせら笑われているような気がしてならな

い。

彼ら動物たちが紛争を起こした話など、聞いたことがない。その彼らの栖すみかを、とめどなく奪っていく人間という奴は、いったいどうなっているのだろうか。

最後に一言。帰ることを忘れて飲みまわった覚えのある筆者も、最近では動物たちの帰巢本能を、専ら真似ることにしている。

西域「敦煌」への旅

上 澤 準 一

平成十年九月二十三日第六回日中経営診断交流会を終えたあと、日本側の中小企業診断士全員十四名は北京から甘肅省の「敦煌」へと旅立った。

敦煌へは北京から西、三、二〇〇キロメートル、空路だと蘭州経由で約五時間の旅である。

ゴビ（土漠）の西端、タクラマカン砂漠の東の入口にあたる。オアシスにできた街で、人口は十八万。その昔は匈奴、西夏、元、トルファンなどの支配を受けた歴史がある。紀元前一一年、漢の武帝が匈奴を討って「河西四郡」を設ける。敦煌郡には屯田兵を置いてシルクロードの出入口を固め、中原の守りとした。以来、漢民族の西部最前線基地となる。現在、人口十八万の内、九五％は漢民族とのことだが、敦煌から西二、四〇〇キロメートルにわたって広がるタクラマカン砂漠の一帯は「新疆ウイグル族自治区」に属する。

北京から空路二時間で甘肅省の省都「蘭州」に着く。滔々と流れる黄河の両岸に発達した西北部最大の工業都市である。AC六二九年インドに旅立ち六四五年西安に戻った唐代の僧、玄奘三蔵や一二七五年、元の世祖フビライの臣となったマルコ・ポーロも、ここを通じて北京に入った。黄河沿いの絶壁には炳靈寺の石窟と大仏像がある。

その蘭州空港で、立ち寄ったトイレの「水」が出ない。敦煌での水不足を恐れた乗客が、にわかにペット・ボト

ル入りの水を買って求めている。

蘭州から更に空路二時間、午後六時少し前、敦煌に着陸する。出迎えの観光会社のバスでは敦煌生まれの女性ガイドがしっかりと日本語で説明してくれる。気温は摂氏二〇度近辺、寒くなく暑くなくちょうどよい。オアシスにできた街ゆえ、水は何とあるという。

ホテルは敦煌四大ホテルのトップ「敦煌賓館」であったが、夕食が始まった途端、停電に見舞われる。ホテル側は慣れたもので、ローソクの明かりで西域めいた晚餐となる。

九月二十四日午前、莫高窟（千仏洞）見学。四世紀から十四世紀まで一、〇〇〇年にわたって切り開かれた洞窟約一、〇〇〇窟のうち、発見保存中のもの四九二窟。西暦三六六年に、僧「楽傳」が夕日を浴びて金色に輝く三危山に千仏の威厳を感じ、隣の鳴しゃ山の壁に石窟を掘り「修行の場」とした、という由来がある。

めばしいもの十数窟。中国人案内役の、これも見事な日本語で見学する。聞けば、観光客のうち中国人は五

三%、日本人は二五%、残りがアメリカ人、韓国人、その他で、日本語の案内役は約五十人いるそうである。十人二十人が一団となって洞窟巡りをする。

薄暗がりに照明はなく、懐中電灯と案内役の声が頼りである。

インド渡来の仏教伝承を洞窟、塑像、壁画の美術展示として、文化遺産として現代にまで伝えた人類の力の大きさを、はたまた漢民族の宗教的情熱の深さ、高さを思いしらされる。弥勒菩薩の大仏も二カ所に二体、涅槃（寢仏）像一体いずれも洞窟の中に壁画や塑像と共にある。涅槃洞窟はそれ自体「お棺」の内部を意味している。洞窟の修復保存には明、清辺りから公私にわたる努力が重ねられた。それでも経典や仏像の盗掘はじめ、放って置けばたちまち痛む。現政権も歴代力を入れており、資料館、研究所を含め、特に近年は重要文化財、観光施設として立派に整備されている。

二十四日午後、敦煌の南西七六キロメートルにある砂漠の関所「陽関」を見学。「更に君にすすむ一杯の酒、西の方陽関を出れば故人なからん」と歌われた陽関であ

る。現在は砂丘の上に回廊の一部と東屋が一つ復元されている。他には崩れた狼煙台が残っているだけ。

だがBC一一一年、漢の武帝（BC一四一―八七）が匈奴を討って「河西四郡」を置き、後方の「嘉峪関」「玉門関」などと共に西域への出入口を確保した記念の遺蹟である。当時としては、西方の最前線であり、陽関から先は文字通りの「砂漠」。駱駝なしには踏み込めない「死の海」である。

ローラン、チエルチェン、ホータン、ヤルカンドを経てカシユガルに至る東西二、四〇〇キロメートルは古来、駱駝の背に揺られて六十余日、隣のオアシス、ローランまで十日間の旅程を要したという。シルクロード三大大陸の内、一番南が「タクラマカン砂漠南辺縦走」の西域南道である。（北辺は天山南路）現在鉄道はなく、あるかなしかのバス道路以外は空路（敦煌、チエルチェン、ニヤ、ホータン、カシユガルに空港がある）のみが頼りの砂漠世界である。

このタクラマカン砂漠にサウジに匹敵する原油埋蔵量が確認された。未開発の世界最大「原油埋蔵地域」とし

て、今後、世界の注目を引くことになるう。

陽関から敦煌への帰途、「狼煙台」「敦煌故城」を見学する。そして、途中バスの中から「土漠の竜巻」や「逃げ水（蜃気楼）」などを体験する。夕食後ホテルの劇場で、やや生々しい西域ウイグルの踊り「飛天（天女）の舞」を鑑賞した。

バリアフリー

藤 井 長 治

バリアフリー（BARRIER FREE）という言葉が眼にとまったのは、いつごろだったろうか。そんなに古いことではないのは分かっているが、それが一昨年だったか、昨年だったか、今年になってからだったかは、どうも定かではない。何からこの言葉を知ったのか、新聞か雑誌か、あるいはテレビか、そこらも茫としてはっ

きりしない。しかし、この語感と、なんとなく分る中身——障害がない——から、この言葉はずっと私の頭のなかに潜んでいたらしい。最近になって、新聞や雑誌や開発ニュースなどに、このバリアフリーという語がしばしば出るようになった。

この言葉は、建築にかかわる用語として、アメリカあたりから出てきた。一九七四年国連障害者生活環境専門家会議が、BARRIER FREE DESIGNという報告書をだした。家屋のなかで物理的な障壁をできるかぎりなくす。床をフラットにする。階段やバスルームに手すりをつける。車椅子で家の外に自由に出入れるよう、階段をやめ、スロープにするなど、身体障害者や病人のための提案がなされたらしい。

日本もここ五、六年、このバリアフリーの思想が建築や交通機関にひろがり、JRなどもプラットホームに点字ブロックを埋めこんだり、エスカレーターを増設している。しかし、車椅子にはエレベーターが必要だが、大きな駅以外はほとんどなく、駅員が四人がかりで、車椅子の人を階段にはこんでいるのをよく見かける。

さいきん眼、耳、肢体の障害者に直接インタビューして、その生活体験をかきとめたレポートが、電通関西支社より発行された。その不自由な十人のうちの半数のかたの、生々しい体験と要求項目の一端を左に述べる。

① 東京 M（女） 43歳、全盲、救急病院勤務。

電車で通勤しているが、あまり苦ではない。それでも駅のホームから3回おちた。ホームの端の滑りどめと、点字ブロックを間違える。ホームドアなり、柵なりにしてほしい。電車を下りたときに、自分の位置がわからなくてほしい。駅の方法を考えてほしい。点字情報を徹底してほしい。駅の階段の手すりの点字では不十分。食品やほかの商品にも点字をいれ、電気製品も点字の説明書がほしい。

② 大阪 K（男） 37歳、全盲、TBS日本福祉放送のディレクター。

通勤は京阪電車、すごいラッシュも慣れてくれば大丈夫。ただ初めての駅はわかりにくい。とくに階段の位置がわからない。探しながらプラットホームを歩いている時が一番怖い。階段に鳥の鳴き声でも電子音でもだして

もらうとよくわかる。人のいない所でも音がほしい。地下街など十時をすぎると人が少ない。出入口に音を流してほしい。トイレは、どっちが男でどっちが女かわからないので困る。男女をはっきりさせる方法はないか。スパーも我々にはとても不便。なにがどこにあるかわからないし、聞く人もいない。アメリカは障害者に対し、日本よりずっといい。「エクスキューズミー」と言えば必ず誰かが来て助けてくれる。日本では「すみませんが」と言っても無視され、近づこうとすると逃げられる。

③ 東京 S（女） 45歳 聴覚障害者、現在二児の母親。

夫婦親子は口話でわかるが、普通は手話。子供が大きくなって、手助けをしてくれ、今は楽だし幸せだが、義母は私が聾啞者であることを理解せず、いろいろな気を使つて大変だ。

一人でいるとき、ブザーが分からないので困る。身につけて振動するようなブザーがほしい。大田区は用事のあるとき通訳を派遣してくれ便利だ。東京のバスは、アウンスだけで文字がでないので困る。神奈川では文字

が出て、あと何分というのもある。

耳が聞こえなくても、誰とでも話ができる世の中になつてほしい。デパートや駅員さん、お巡りさんに手話のできる人がいると助かる。

どんな便利なものが出るよりも、手話の人々がふえるのが一番です。

④ 東京 T (男) 38歳 聴覚障害者、日野自動車組立社員、日野市聴覚障害者協会会長。

車で通勤しているが、ラジオが聞けず、事故や渋滞ニュースがとれないのが困る。FAXはすごく便利。インターホンが聞けず宅配便がきても持つかえられない。不在票がおかれても、電話ができない。必要な情報の伝わるシステムを考えてほしい。手話で伝え合えるテレビ電話がほしい。障害者が不便を感じないですむ世の中ができるという。

⑤ 西宮 A (女) 23歳 肢体不自由者、西宮市役所勤務、通信大学で現在も社会学を専攻中。

オートマ限定の車の免許をとって、車で通学。電動くるま椅子は大きく重く、車にのせられないので、車をお

りてから大変。手動の車椅子でも苦勞している。外で困るのは、車椅子用のトイレがないこと、駅にはほとんどないし、デパートは上階にあり、エレベーターがこむので、どいてくれない。他人に無関心な関西人の傾向か、障害者を助けようとしらない。

服を買うとき、車椅子の入れる試着室がないのは悲しい。駅にスロープやエレベーターのない所が多い。駅員さんに頼むって、なかなか頼みづらい。海外に友達と行くと、向こうは障害者に対し、ほんとにやさしい。まわりの人が親切だし、どの店にいても車椅子で不自由を感じなかった。軽量の、漕ぐのが楽な安い車椅子がほしい。段差のない、広々した家もいいなと思う。

この人たちの生活とのたたかい、その苦勞の実情をきくと、われわれ健常者―この言葉を筆者は好まぬが―の身障者への無神経、無関心、非協力は、現代の日本人の精神の荒廃であり、倫理感の欠如を物語っている。

一九九六年の厚生省の調査によると、身体障害者は三一七万人、精神薄弱、障害者一九八万人。計五一五万人とされ、わが国はバリアフリーの全国展開を、これから、

どうしてもやっていかねばならない。それは、健康人の二十一世紀にわたっての一つの義務である、とさえ言える。バリアフリーの各種施設や有効な器具の存在を、いっそう価値あらしめるのは、障害者への思いやり、親切、手助け、援助であり、これこそがほんとのバリアフリーではなからうか。

言葉と文化

浅野 正春

私が駐在員になる前に、生まれてはじめてアメリカに出張を命ぜられて、ニューヨークのJFK空港に降り立ったのは、昭和四十二年、三十三歳の時だった。午後早い時刻に入国手続きと通関手続きを終えて空港ロビーに出ると、そこには、文字通り雲を突くような背の高い、がっちりした体格の黒人のスカイ・キャップが立ってい

る。

堂々たる八の字髭を蓄え、辺りを払うような貫録の持ち主だ。

あまりの貫録に、私がちよつと躊躇していると、いきなり私の荷物を取り上げて、さっさとタクシーの溜り場に向かつて、大股で歩き出した。私は、ほとんど小走りといった状態で、慌てて彼を追い掛けながら、

「何も聞かず、何もいわずにいきなり荷物を運び出すんだもの、驚くじゃないか」

と弱々しい声で、怖るおそる抗議した。

彼は、私の顔を上から見下ろし、にっこり笑って、

「貴方は、日本人でしょう？」と聞く。

「そうだ」と答えると、

「貴方は、私を一目見た時、どう思いましたか？」

「失礼だけど、あまり貫録があり過ぎるので、スカイ・キャップのユニホームを着ていても、君に荷物を頼みにくくて、一瞬たじろいだよ」

「そうでしょう。日本の旅行者は、皆私の風体を見て、たじろぐのですよ。だから、私が、思いきり積極的に出

て、率先して仕事を取らないと、他のスカイ・キャップに仕事を取られちゃうんですよ。そういう訳なので、お目にみて許してやってください」

と言って、にっこりと微笑んだ。その表情は、不思議にも生まれたての赤ん坊のそのように無邪気なものだった。

堂々たる威風と、赤子のような無邪気さの奇妙にちぐはぐな取り合わせになお戸惑っている間に、タクシーの溜り場に着いた。そこでも、私に全く無頓着に、イエローキャブの運転手に、トランク・ルームを開けさせ、あつという間に荷物を入れて、私が彼への料金を支払うのを待って、私のために車の後部ドアを開けるべく、ドアハンドルを握っている。大男のくせに、どうしてこうも身軽に出来上がっているんだろう！と感心しながら料金を払うと、礼を述べながら、素早くドアを開けて、私を車の中の人にしてくれた。

車の中で、「これだから、大男の黒人は、一般的にいつて、プロ・バスケットボールの選手として、天性の才能を持っているんだな！」等と考えていると、歳のころ

四十五、六歳と思われる白人の運転手が、「お客さん。行き先はどこかね？」と聞いてくる。

イエローキャブの制服と帽子に、きちんと身を包んでいるその運転手は、背は相当に高そうだが、針金のように瘦せている。表情は穏やかで、人が良さそうだ。

私が、「マンハッタン、マジソン街の五十一番地（ファイフティー ファースト ストリート）へやってください」と言うと、

「マンハッタンには、ファイフティー ファースト ストリートなどという所はないよ」とうそぶいている。

私は、一瞬、飛んでもないアメリカの、「雲助タクシー」に掴まったのかと思った。さっきの大男のスカイ・キャブをやり過ごして、ホットする間もなく、一難去ってまた一難だ。

「そんな馬鹿なことがあるか！ マンハッタンにファイフティー ファースト ストリートがないなんていう悪い冗談は止めてくれ！」と言うと、

「お客さん、さつきから、私の英語を聞いていて、アメリカ人で、ちょっと気のきいた旦那なら、私が、ブルッ

クリン子だつて見当をつけて、ブルックリン訛りで、『フィフティー フォイスト ストリート』と言つてくれるんだがなあ」と言う。

「旦那なら、この冗談を理解してくれるだけの、寛大さと茶目っ気があると思つてゐるんだが、どうだろう？」

そこまで言われては、日本男子たるもの、やるべきことは、ただ一つ。深呼吸をして目をつむり、大きな声で、『フィフティー フォイスト ストリート』と叫んだ。

間髪を入れず、くだんの運転手、ブルックリン子の名譽にかけてとばかり私に負けない大声で、

「イエス サー」

と叫んだ時には、車ははやグングンとスピードを上げていた。

はじめての、ニューヨーク出張で、タクシーの運転手と意気投合出来たことは、若かった私を嬉しがらせてくれる出来事だった。

目的地に着くまでの時間は、もっぱら気をよくした運転手が、昨日、マンハッタンでどんな事件が起こったか、今、全米で最もみんなの興味を引き付けていることは何

か、その他、私がニューヨークで、快適に滞在するためのノウハウ等を、実に事細かに教えてくれた。

日本では、東京に出て来ても、永年故郷の訛りで堂々と通している人も稀にはいるが、地方訛りを恥ずかしと思つたり、コンプレックスにまでなつてしまふのが一般的な傾向だが、アメリカでは、地方訛りで話すことを、一つも恥ずかしいと思つていないばかりか、それを、むしろ誇りに思つてゐるような節々がみられる。

同じ南部訛りでも、ジョンソン元大統領はテキサス訛りで、カーター元大統領は、彼独特の、音が半分鼻に抜けるような発音で、ジョージア訛りで堂々と記者会見の席でも、テレビ・インタビューの席でも、なんら気おくれするようなこともなく話をしてゐたのを思い出す。

故ケネディー元大統領は、実に明晰なニューイングランド・アクセントで、国民に力強く語り掛けていた光景も昨日のこのように思い出す。

それに引き換えて、日本の歴代総理大臣は、例外なく見事に標準語でお話になる。中央集権制度の日本では、皆さんが最終学校教育を東京で受け、更にどこかに地方

の訛りや放言を軽べつする風習が根強く残っているからだろう。

ヨーロッパでも、一般的に地方地方の言葉を大切にし、それぞれがその地方の言葉を誇りに思っているという傾向が強い。

このことは、中央集権とか地方分権とかの、政治的な制度のほかに、各地域・地方の風土、伝統、文化をそれぞれの住民が、どう評価しているか、率直に言えば、自分たちの方言・お国訛りに誇りを感じているかどうかの違いだろう。

地方への権力の分散とともに、各地方の人々がブルックリンのイエロー・キャブの運転手のように、自分たちの方言に郷土の誇りを託して、生き生きと毎日の言語生活を楽しんだら、日本はどんなに楽しい国になるだろう。それぞれの地方出身の人々が何の屈託もなく淡々とおしゃべり出来るような日本であって欲しいものだ。

外国語、肺結核との巡り合い

今川 確郎

今日まで学校、仕事を通じて複数の外国語を学び、それが私の一種貴重な財産ともなっているが、いずれも灰色の青春を余儀なくされた戦争と肺結核とに深いかかわりを持っている。

まず英語だが、スバルタ教育で有名な都立中学で五年間徹底的にしばられ、かなり自信をもっていた。しかし昭和十九年三月の高校（旧制）入試には「敵国語」という馬鹿げた理由で排除され、残念な思いをした。

高校文科に入学してからの語学教育は、何の制約もなく自由であった。時の権力機関、特に陸軍が英語を「敵国語」としていたことも影響して、ドイツ語を第一外語とする文乙を選んだ。独文和訳、文法、ドイツ人講師による会話と、週七時間。第二外語の英語も三時間あり、

戦時中としては充実した語学授業だった。戦争末期・戦後の苦しい時代にもドイツ語習得にかなり努力した。

商社に勤務して、ドイツ・ワインの輸入販売を主としていた関連会社に責任者として出向したことがある。ドイツからワイン・メーカーの首脳たちが年二回やってくる。その時には出来得る限りドイツ語で応対した。実用的とは思えなかった高校の授業が実社会で生かされたのには我ながら驚き、三年間の苦労が漸く報われたと思った。「鉄は熱いうちに打て」である。

大学時代には、高校のクラスメートで語学の天才だった親友のA君から強引に誘われて通学の帰路、御茶ノ水駅近くの「アテネ・フランセ」に約一年間通った。この時に習ったフランス語の基礎知識が、後年ミラノ、ローマに駐在（前後十年）した際、同じラテン語系のイタリア語習得に役立つとは思っても寄らぬことであつた。

A君は、敗戦までの半年間、下宿を共にした程の仲だったが、気の毒にも大学二年の夏、肺結核の治療で愛知県田舎に帰省したまま三十二歳の若さでこの世を去った。語学の面で常に私を引っ張ってくれたので、惜しい

友を失ったものと、四十年を経た今日でも、彼の明るい笑顔が思い浮かんでくる。

もう一人、文科甲類のY君のことがある。中学の一年先輩で、下宿先が至近距離でもあり、戦後一年間ほど親しく付き合った。食料事情が極端に悪かった時代で、Y君も肺結核が再発した。東京の親元で療養を続けたが、大学進学の夢を果たさぬまま短い命を絶った。

私も、戦争末期の勤労動員で、労働環境の劣悪な製鉄工場での夜勤も含む過労が原因だったか、あるいは前述の二人と親しく付き合っていたせいか、大学卒業直後から同じ病のため波乱に富んだ道を歩むこととなった。

約五年の入院生活を送り、灰色の青春を余儀なくされたが、右肺上葉と肋骨六本切除の大手術のお陰で、勤務可能な状態にまで完治した。五年間ほどは比較的楽な勤務で身体を慣らした後、同級生より十年も遅れたとはいえ、大学時代から希望していた総合貿易商社に、幸いにも途中採用された。

話は語学に戻る。戦前の英語教育は、いわゆる「受験英語」で、それにはかなり自信が持てたが、実用会話は

全く習得していなかった。大卒（昭和二十五年三月）前
年秋の就職試験では、リーディングと英文和訳のみの、
ある商社に仮採用されていた。一方、関西系総合商社に
いた親しい先輩の勧めで同社を受験した際、大きなショ
ックを味わわされた。

会話試験は、同一大学・学部卒業予定者二人に対し
同時に行われた。試験官は終戦後幅をきかしていた日系
二世らしく、アメリカ英語でペラペラ質問してくる。

二人とも、何を言っているのか分からず、ポカンとし
ていると「君たちは学校で英語を勉強しなかったのか」
と詰問された。私は「中学では英会話の授業はなく、高
校ではドイツ語を学んだので、英会話の経験はありません
」と率直に返答。もう一人は「高校は文丙で、フラン
ス語を学んだ関係で終戦前後ベトナムでフランス語の通
訳をやらされ、英語には縁がなかった」と答える。

試験官はムツとした顔つきとなって「君たちはドイツ
語やフランス語で世界を相手とする国際貿易に従事でき
ると思っているのか。海外取引の国際用語は英語なんだ
ぞ。顔を洗って出直して来い」と声を荒立て席をたつて

いってしまった。もちろんその会社は不合格だった。

一方、前述の仮採用されていた商社の身体検査では、
胸部に陰りのある肺浸潤と診断され、結局は不採用とな
り、灰色の長い闘病生活のスタートを強いられた。

その後、数年にわたる入院生活と手術により社会復帰
することが出来、通産省の、とある外廓団体で働くよう
になったが、貿易商社への夢は捨てられない。また前述
の「顔を洗って出直してこい」との屈辱の言葉が頭にこ
びりついていた。

この勤務先での仕事は、通常五時に終了するので、一
念発起して「英会話学院」のイブニング・クラスに週三
回通った。二年間ほとんど休まず出席したお陰で「通訳
免許書」を取得できた。

その一年後に、中途採用試験のあった総合貿易商社で
の面接の際、予想通り「英会話はどうかね」との質問を
受けたので、例の「通訳免許書」を提出。面接者はちょ
っと目を通しただけで「では身体検査の結果次第だね」
ということパスした。途端に十年ほど前の二世らしき
試験官の顔が目には浮かんできた。あの厳しい言葉がなかった

ら、後日、英会話の勉強に精を出しただろうか。文字通り「災いを転じて福となす」の諺が実感された。身体検査の方も「手術をして徹底的に治療したのでOK」と診断され、無事途中入社できた。あの当時、思い切った手術を受けていなかったら、ここまで治癒はしていなかったかもしれない。

運命は自分で切り開いていかなくては良い結果は得られない、と身をもって体験した。その後も、二十歳代の灰色の闘病生活からの立ち上がりを基にした「七転び八起き」をモットーとして人生を歩んできた積もりだ。

旅とチョコレート

西 島 力

汽車の旅にロマンがあるとすれば、それは窓が開くからである。

列車の窓が開かなくなり、扉が自動になった時、鉄道はロマンとの縁を失った。そして今、新幹線という名のあの索漠とした乗り物は、「旅」という情のこもった言葉すら血の通わない無機質な響きに変えてしまう。

一九五七年、つまり昭和三十年代の始めごろは、大阪から東京に出張するビジネスマンはほとんどの場合夜行列車を利用した。もはや戦後ではないと為政者は説いたが、まだ何となく戦争の後遺症はそここに見られ、一般乗客用つまり三等の寝台車はまだ全面的には復活していなかったと思う。

平社員の私でも夜行で行く時には会社は、二等寝台は出ないが二等、つまり後にグリーンと呼ばれる座席代は出してくれた。当時は特二等と称して、現在同様のリクライニング式の、あの床屋の椅子のような座席の車両もあるにはあったが、本来の二等車の古典的なボックス・シートの方がはるかに豊かさゆとりを表現していたと私は信じている。

大阪発の、その夜行急行の私の席から見えるプラットフォームに、一人の女性がこちらを見つめてひっそりと

立ち尽くしている。年の頃は二十七、八か。早く言えば栗原小巻のような感じの女性である。年が合わないことを敢えて無視すれば、あれは本当に栗原小巻ではなかったかと、今となつてはそう思うことにしている。

どういう訳か、その日の二等車は私の周りにはほとんど客がいなかったから、知らぬ人が見たら栗原小巻は私を送りに来ていると思つたであらう。

発車ベルが鳴り始めた。すると栗原小巻はつかつかと私の窓際に寄つてきて静かに一礼した。私は即座に窓を開けた。

彼女は言つた。

「あなた様の前の席に座る筈の人を見送りにまいりましたが、大阪では乗車いたしませんでした。もしかしたら、京都から乗るかもしれません。もし乗りましたら、これはチヨコレートでございますが、まことに恐れ入りますが、これをお渡しただけませんかでしょうか。もし京都でも乗車しないようでしたら、失礼ではございますが、あなた様がお召し上がりになって下さいませ」

ゴトンと列車が動き始めた。旅がロマンであるために

は、ここはどうしてもゴトンでなければならぬ。そしてゆっくりゆっくりと速度を上げてゆく。栗原小巻は控えめに笑顔を作り、頭を微かに横に傾け、片手を胸のあたりに上げて小さく振つた。その姿は次第に遠ざかり、やがて視界から去つて行つた。

京都を過ぎて列車が東山トンネルを抜け、山科盆地にかかった時、デッキの扉が開いて一人の中年男が二等車に入つてきた。彼は事もあらうに私の前の席に座つた。遂に問題の男が現れたのである。しかし、どう見てもこの男があゝの栗原小巻と「訳あり」の人物と考えるには程遠かつた。私は慇懃に尋ねた。

「ここはあなたのお席でしょうか」

男はその途端、まるで蜂に尻を刺されたように跳び上がった。そして「いや、あの、その」とか何がなんだか分からぬような言葉を連ねて、あたふたと二等車を出ていった。

私はチヨコレートの包みを丁寧に解き、一つだけお毒味をすると、また丁寧に包み直し、リボンをかけた。

翌朝早く東京支店に着くと、女性社員が一人、掃除当

番で机を拭いていた。私は「チョコレートをどうぞ」と言つて例の包みを差し出した。彼女は私の真意を計りかねたように、しばらく私の顔を見つめていたが、「ありがとうございます」と言つて受け取った。

バレンタインデーなどという面妖なしきたりが世を毒す以前の、貧しくてもロマンに満ちた良き時代の話である。

歴史の不思議

『江沢民少年を咬んだ犬』

佐藤 正男

十月十四日付「英文毎日」のMichael S.F. Gorman氏の「Emperor or King」という投書を見てちょっと考えさせられた。彼（経歴、国籍等不明）は、天皇が金韓国大統領歓迎晩餐会におけるスピーチで「日本書紀」をひいて「渡来者」が仏教のほか多くの文化を我が国にもたら

したと述べられたことに關して、次のように主張している。

前段で「渡来者」とは、英国の例をあげて實際は征服者であり、四世紀の百濟、扶余からの「渡来者」『征服者の子孫がこんにちまで日本を支配しているという事実を、この傲慢で頑固な日本の宮内庁が認めるのは何時の日かと、また後段では帝国が消滅したこんにち「天皇」は「国王」に名称変更したほうが近隣諸国の信頼を得るのではないかと述べている。彼は「太安万侶」にも触れているので、この問題について研究しているのではないかと思われる。十五、六年前、仕事でKorea Airにしばしばソウル出張していたころ、機内報の日韓の歴史のなかに任那の日本府のことが出ていないので、本当はなかったのかなと思つたことがあつた。前記のような歴史認識であれば当然のことかも知れない。

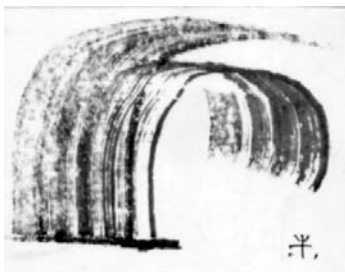
そこでちょっと古い（昭和五十二年版）高校の日本歴史教科書を調べてみたら、高句麗の好太王（広開土王）の碑文をひいて、倭（日本）は半島南部をその勢力下におさめた、これが任那である、と記されている。ただ当

時（青銅器から鉄器への時）は現在のような国家意識はなく、いろいろな部族が半島南部と倭国を往来し、経済的文化的に元氣のあるものがその時々覇権を握っていたのではなからうか。このように、歴史認識の立場、観点が違えば、歴史上の事実も異なってくる、歴史認識の難しさを感じた。

こんなことを考えていた時、ちょうど江沢民主席の初の公式訪日を迎え、歴史認識について紛糾し、ついに公文書に署名しないということになった。関連記事のなかに、江主席の日本嫌いは少年のころ、日本の軍用犬に咬まれたせいだとするものがあつた。（後に取り消しにはなっていたが）、これを見て、即座に“アイツ”だと思った。“アイツ”とは一九四三年北京生まれのジャーマン・シェパードで、我が家での呼び名はシャラ。血統書名はヘルギー・ホン・シヨウナントウ（昭南島）、品評会で入選したり、なかなかの血統であつたが、父親ゆずりの咬み癖で値が出ないと言われていた。訓練士がきて調教も終わり、すくすくと育っていたが、時々咬み癖を発揮し、事件を起こしていた。威風近傍のチャウチャ

ウどもを圧倒していたが、一九四五年五月召集令状がきて、豊台の軍犬隊に入隊し、河南作戦に出征していった。終戦後帰って来るかと待っていたが、江少年に咬みついて銃殺になったか、帰路黄河で溺れたか、遂に帰ってこなかった。

“左氏伝”を読んでいると、二千年以上も前のことなのに、某將軍が兵車の下に寝て、蛇に咬まれて肘に傷つき、それが戦況、ひいては歴史に影響を与えたことを、見てきたように書いてある。一匹の蛇、一匹の犬が、歴史にかかわることもあるのかと、あらためて歴史の不思議さを感じたわけである。



第四次中東戦争のこと

中 村 爽

一九七三年十月、私はシリアの首都ダマスカスで、シリア政府と同国の農業開発プロジェクトについての交渉を進めていた。当時、イスラエルと周辺のアラブ諸国間では領土問題をめぐって一触即発の情勢にあると報道されてはいたが、現地ではそれほど差し迫った雰囲気は感じられなかった。しかし、やはり十月六日になり、のちに第四次中東戦争と呼ばれるイスラエル対エジプト・シリアの戦争が始まり、はからずもその戦火を経験することになった。最近の中東の動きを見ると、しきりに当時が思い出される。

十月九日の昼近く、市内北部の丘の上にある日本大使館を訪れた帰りに、一階の出口にむかって階段を下りかけた時だった。突然落雷のような轟音が頭を叩きつける

ように落ちてきた。反射的に、私は階段を駆け下り、ロビーの厚い壁の隅に身を寄せた。途端に爆発音がグオーンと腹に響き、建物が震動する。前庭の向こう側の丘の下から太い黒煙の柱がモクモクと吹き上がってくるのが見える。気が付くと、玄関先に三十センチ角ほどの溶岩に似た鉄のかたまりが落ちていた。瞬間のことにように思えたが、こうして、私はイスラエルによる空爆の洗礼を受けたのだった。

この日の空爆で、ダマスカス市内では国防省や放送局を含む多くの建物が破壊された。当時の私のメモに次の記述がある。

「市内の爆撃の跡を見て回る。無残に壊れたビル、アパート、学校、病院など。ひしゃげた車や焼け焦げたバス。壁に直径二メートルもの丸い穴を打ち抜かれた家屋。爆風で巻き上げられ、ねじ曲がったブラインドとメチャクチャに割れたガラス。広場の中央にえぐられた大穴。すべてが悪夢のようだ」

空爆の翌日、私は会社の同僚と、内陸にあつて、より安全と思われるアレppoへ避難することにした。アレppo

ポは、ダマスカスの北約三百四十キロにあるトルコとの国境にも近いシリア第二の都市である。ところが、交通手段がなかなか見つけれない。空爆で定期交通は麻痺し、タクシーは乗車拒否である。運転手達は「敵襲の中に家族を残して遠路出かけられない。死ぬなら家族と一緒に、生まれ故郷のダマスカスで死にたい」と言う。

止むなく、アレppoの知人に連絡を取り、ようやくアレppoの車をダマスカスまで回してもらうことができた。だが、この日も国内の重要拠点に対するイスラエルの空爆は続き、移動の途中、ミサイル攻撃による製油所の火災や、イスラエルのファントムとシリアのミグとの空中戦など目の当たりにし、肝を冷やすこともあった。再びメモの記述。

「車でアレppoへ向かう。道を通る車両はほとんど無い。軍の施設の脇を通る時、なんともいやな不安。ホームスの町に近づくと、地平線にキノコ雲のような黒煙が見えた。製油所の火災だ。近寄るにつれて、メラメラと燃える炎の音がする。黒とも灰色とも形容し難い煙が猛烈に吹き上がる。煙は空に大きな天の川のように覆いかぶ

さり、反対側の地平線にまで下りている。黒雲を背景に、日の光に銀色に映えてファントムが飛んで行く。煙のためホームスの町は薄暗く、夕暮れのような。貴重な石油が無駄に燃えつきてゆく」

幸い、到着後のアレppoでの滞在は無事に過ぎたが、この間ゴラン高原やシナイ半島では激戦が続いた。BBCやVOAのラジオ放送は貴重な情報源で、ニュースで聞く戦況の推移に一喜一憂しているうちに、十月二十三日に至り、参戦三カ国が国連決議を受諾して、停戦となった。

この戦争で各参戦国はそれぞれに多くの血を流した。高価なジェット戦闘機や戦車をはじめ、多くの兵器が失われたほか、人的損害は非戦闘員である一般民間人にも及んだ。

シリアは軍事施設以外にも製油所、発電所、飛行場その他の民生施設が破壊され、ダマスカスでも停戦後も一カ月以上停電や断水がひんばんに起こり、物資不足で市民の日常生活は大きく影響を受けた。

また、停戦はしたものの、翌年の六月に正式な停戦協

定が調印されるまで、断続的に局地的な交戦が続いた。これだけの犠牲が払われたこの戦争の代償は一体何だったのだろうか。

当時この戦争について、家族を愛し平和を望む一方で敵には厳しいシリアの知人達から、さまざまな意見を聞いた。そして、ユダヤとアラブ民族との対立の根元には、部外者の知り得ない宗教的信念の相違と、数千年にわたる長い歴史に由来する宿命的な確執があることをあらためて知らされた。しかしそれでは、彼等から見ると傍観者に過ぎない異邦人の私としては何も言えなくなる。なぜならユダヤとアラブのどちら側に正義があるのか、または、どちらの掲げる大義が正しいのかの判定が出来ないことになるからである。

また、依然として「目には目を」の掟や、「敵を憎み、恨みは忘れない」といった考え方が人びとの意識の中にあるように思われ、戦争の正否を問うことよりも、むしろ両者間の和解が将来的にも可能なのだろうかという疑問を持つに至ったのであった。これは今でも分からないのが正直なところである。

その後も中東情勢はなかなか安定せず、各地で局地的な内戦やテロが多発し、破壊と流血が続いた。そして、イラクを起因とする地域の争いが多国籍軍の介入を呼び込んで湾岸戦争が起こり、更には米英のイラク攻撃となつてしまった。攻撃が繰り返されるたびに新開発のハイテク兵器の実験場と化するのを目にして、中東で知り合い、アラビアン・ホスピタリティーで温かく迎えてくれた人達の顔が目につかび、一日も早く地域に平穏な日が来るようにと願って止まない。

紙魚の咬き

吉井 米三郎

①散骨のすすめ

無宗教のアインシュタインの脳は現在もアメリカに保存されているが、遺言によって遺骨はアデル川に流さ

れた。ヒンズー教徒のガンジは暗殺され、ガンジス川辺の火葬場で焼かれ、骨はその場から川へ押しこぼされた。周恩来夫婦は遺言により、墓・記念碑のたぐいは一切拒否、遺骨は中国大陸上空より散骨された。ライシャワー元駐日大使も「われ、日米の架け橋とならん」とのこと、一部が太平洋に散骨された。

戦後、儒教思想、とりわけ家族主義の崩壊と核家族化、宗教離れ、人口増と地価上昇等々から、葬儀の形骸化、埋葬と墓の問題が頻繁に採りあげられは始めている。しかし、わが国には世間はあるが社会が無いと言われる通り、多くの人は葬儀と墓にこだわっているようだ。その部分の減少が保守政党の衰退につながっていくと指摘する識者もいる。

二十一世紀には形式的な葬儀や墓建立も大幅に後退するであろうし、これは国民社会の構造改革の一端ともなるのかも知れぬ。

②永平寺食の勧め

「成長の限界・人口爆発（食糧危機）」でローマ・クラブが警告を発したのは一九六八年である。一九八九年

には冷戦の終結をみたが、民族間抗争の噴出が果てしなく続き、一方、一極支配による金融経済グローバルスタンダード化は環境問題そっちのけで地球のカジノ化を進める結果となっている。

アメリカ人平均摂取カロリーはインドの八倍といわれ、米国で年間捨てられる食物はインド人の四千万人分の年間摂取カロリーとされている。さすが消費者は王様の国である。

さて、一二四四年に宋から帰国した道玄は現在の曹洞宗本山永平寺の地に修行道場を開山した。寺へ詣でて気が付くのは、修行僧たちの血色の良さ、機敏活達な動作で、心身ともに健康な青年たちであるということである。

修行のことは省くとして、その毎日の食事は、朝は粥一杯、昼はご飯一杯に一葉とたくあん二切れ、夜は昼食に汁一杯、さらにもう一葉がついたもの、ということである。これで一日の修行青年のカロリーと栄養が摂れるというのである。その背景には、宋で修行した道玄が、併せて修行者の食事についても深く研究・体験・会得していたことがある。それは大豆蛋白食品を中心と

する精進料理である。

土地のカロリー生産性を穀類と牧畜で比べて見ると、前者は牧畜の七倍とかで、従って価格も大幅に安くなるはずである。

一切の生物との共生を世界観とする地球に優しい仏教の精進料理―菜食主義―が二十一世紀に大いに普及することを期待したい。

③喫煙縁起

それはB C三千六百年ごろのユカタン半島のマヤ人集落での秋の出来事である。

チコリは十五歳。前年秋、嵐の夜、落雷で燃えさかる裏の林に走り込み、焼死した姉の連れ合いの後添いとなり、三ヵ月が経った。身ごもったせいとか、ひどい悪阻に悩まされている。姉が燃えさかる林の中に飛び込んだ嵐の夜も、悪阻に悩まされていた。

ある日、チコリは夢を見た。姉がジャガーに跨がって昨秋焼け死んだ林に向かって疾走して行く。何かくわえており、くわえたものが煙を出している。

その煙が悪阻をとり払い、天界へ誘うような……木天

蓼（またたび）の実の落ちている大地に体を擦りつけ、歓喜・恍惚のジャガーになったような……。目が覚めてみると、その匂いが流れているのだ。途端にチコリは林に向かって駆け出していた。やがて彼女は、煙っている、枯れたいたどりのような茎を手に、それに鼻をくつつけんばかりにして家に戻って来た。

連れ合いも目をさまし、チコリのいないのに気付कि、昨秋の悲劇が甦って飛び起きた。そこへチコリが、くすぶる茎に顔を埋め、夢遊病者のように戻って来た。彼は思わず、チコリを抱きしめ、チコリの匂いとタバコにくすぶる匂いが素晴らしいことに気付いた。

ある文化人類学者が語った。人類にとってタバコは猫科の動物と木天蓼のような先天的な関係があるのかも知れない。それはどの古代文明にも見られる人類が本能的に持っている金を選ぶ性格、つまり金選好のように。

また、彼はタバコを喫う人に片っ端から喫煙の動機と常習となるまでの経過を調査したという。例外なく好奇心、大人ぶって見たい、ナルシスト、格好いい、匂いが好き、というのが男女・老若共通の喫煙動機。ところが、

喫いはじめの共通点はめまい、頭痛、吐き気、むせ返りを繰り返し、それを乗り越えて常習・中毒者となる経過を辿っていることだ。ところが、ある時、それまで嫌煙の老女が悪阻からタバコに引きずり込まれ、舅・姑の仕儀で離婚にまで進んだという。案外タバコからサリドマイドに代わる悪阻の特効薬が抽出できるのではないか。

米国からの輸入が急増する中国での喫煙人口の増勢は経済成長率と同水準とのこと。一方、アメリカでは禁煙環境網が着々と絞められているが、二十一世紀末の地球の喫煙政策はどのようになっているのだろうか。

戦時下の歌舞伎

関 谷 裕 彦

私の歌舞伎の見初めは昭和十八年二月。菅原の筆法伝授・車引き・寺子屋・藤娘・どんつく・小学校四年生で

ある。演芸画報で十分下見をしていたので、すべてが感激であった。菅原の伝授場というのは結構珍しいもので、意地悪公家の左中弁希世にふんした中村吉之丞が好演であった。菅相丞は六世尾上菊五郎、武部源藏は初世中村吉右衛門、どちらも悪かるうはずは無い。車引きも絵のようで、子供にとっては最高の見物である。

松王丸（菊）、梅王丸（七世板東三津五郎）、この人は得意な舞踊を見せる機会がなく中途半端な役ばかりふられていたようだ。桜丸は尾上菊之助（後の七世尾上梅幸）、美貌と明るい芸風で私はいっぺんで気に入ってしまった。この菅原上演は古典の正しい演出の趣旨で情報局国民演劇賞に選ばれ、賞金三、〇〇〇円を獲得した。三月、千本桜、菊五郎のいがみの権太熱演。七世松本幸四郎の高時。天狗が出てくるので子供には面白い。そうして菊五郎の娘道成寺。鐘入りで押し戻しを幸四郎にまかせ、堂々たる演技である。

戦時下の歌舞伎は、受難の時代であった。まず上演題目が制限される。濡れ場（ラブシーン）等とはとんでもない。従って化政度（文化・文政期）の名作、四世鶴屋南

北の作品等はまず上演の見込みがない。時代物は忠孝を鼓吹するので比較的安全で熊谷陣屋・盛綱陣屋・千本桜（初音旅・鮎屋）忠臣蔵等がよく出た。そのほか、勤皇風土記・忠霊・名和長年等あまりありがたくない狂言も出た。「演劇」というものが観客を対象として提供されるべき時代では無い。国家的な意義をもつもの、国民の戦力を増強、撃ちてしまんの精神を高揚するもの、観客をして怠惰と戦力減退の念を起こさしめ、あるいは、安逸に陥らしむるような演劇は絶対に存在を許されない」（警視庁興行係主事―検閲係りの立場から）のような文章が新聞、雑誌に出る時代であった。

四月、一五世市村羽左衛門が三ヵ月ぶりに復帰、先代萩の勝元を演じ、観客を魅了した。菊五郎の仁木弾正との対決はまさに天下一品。菊五郎という役者は世話物では写実な芸をみせるが、スッポンからせり上がって、カッと眼を見ひらいた時の仁木のすごさや、船弁慶の知盛の霊の不気味さなどは真に例が無い。六月、七月は新派の大御所、喜多村緑郎が出演、一本刀のお薦をやった。相当なご年配で最初はいささか閉口したが、やはり芸の

力は大了なもの、暫く見てみると取手宿の酌婦はこうなのかと思えて来るから不思議だ。七月は真景累が淵、と絵島生鳥という魅力ある狂言の筈だったのが、時節がら不謹慎ということで、妹背山の御殿と素襖落に差し替えた。どちらもそこそこ面白かったが、評判の喜多村の豊志賀、菊五郎の新吉で怪談がみられなかったのはいまだに残念である。八月、九月は、安宅関・海軍・黒塚・名人かご屋・佐藤兄弟の母・実録先代萩・名和長年等戦時時局物ばかりで、パス。九月十日、座頭格で十二世片岡仁左衛門、市村家橘（十六世市村羽左衛門）、片岡菅燕等と八月から巡業にでていた六世大谷友右衛門が巡業先の鳥取市で大地震に会い圧死した。敵役、老役が得意で好感の持てる俳優であった。享年五十八歳。

十月に入って、羽左の盛綱で近江源氏、菊五郎の保名、そして菊畑、羽左の虎藏、菊の智恵内が絶品だった。夜の部は八世市川団藏襲名公演で毒茶丹助、これは作品が地味過ぎ、肝心の団藏も陰気で結局この役者は戦後瀬戸内海で入水自殺してしまう。吉右衛門の松浦の太鼓もそれほど面白くない。しかも菊五郎の筆屋幸兵衛、貧困の

元士族の狂人振りがあまりに真にせまり、何か前途を暗示するようであった。十一月、昼はなぜか切符が手に入らず、夜は吉右衛門の大蔵卿に、菊の累、羽左の与右衛門の木下川堤で、与右衛門に鎌で惨殺された累が与右衛門に祟る場面がもの凄かった。花道から揚げ幕に消えた与右衛門が怨霊により再度舞台まで引き戻されるのである。十二月羽左は石切り梶原を出し、さっそうとしたところを見せ、前月より続演の勧進帳は、七世松本幸四郎の一世一代の弁慶、羽左の富樫、菊五郎の義経と真に結構至極。この時の公演は映画に撮影されて保存されている。

戦時下の歌舞伎座は節米励行のため食事持参を奨励、わざわざ場所を提供したので塗物のお弁当箱に鯛の摘入のおかずで食事をしたのは廊下続きの別館三階食堂であった。別館には通路も含めて売店があり、俳優のプロマイドが並んでいる。私は廊下鳶（とんび）をやりながら、お気に入りの羽左の写真をかなりそろえた。残念なことにこれらは一枚残らず焼いてしまった。

昭和十九年一月、昼夜に分けた菅原の道明寺と賀の祝。羽左の桜丸が美しく、菊之助の八重が可憐であった。そ

して忘れ難いのは菊五郎の茨木、幸四郎の綱での茨木。菊五郎の鏡獅子は豪快な毛振りが印象的で、菊之助、中村芝翫（六世歌右衛門）の胡蝶の精も良かった。そうして二月、昼の部はなぜか良い席が取れず、十二世仁左衛門熱演の淀君と、さっそうたる羽左の木村長門の桐一葉、吉右衛門の八陣守護城の清正を二階席から見ると羽目になった。しかし夜の部では軽妙な菊五郎の五斗兵衛と羽左の泉三郎で腰越状、何度見てもよい鏡獅子、そして二つ蝶々の相撲場。これで歌舞伎座の公演は終了したのである。

三月は菊、吉、幸の熊谷陣屋、二条城の清正、うづは靱猿、湖水乗切り、春日龍神、雲染む屍等で幕を開けはしたものの、決戦非常措置で上演中止となり、十九年十月歌舞伎座は東京都の臨時公会堂になってしまったのである。

私の戦中の最後の歌舞伎観劇は、十九年十月、明治座で、十二世仁左の義賢、羽左の実盛で布引滝と羽左の権八、仁左の小紫で権上、夜は菊五郎の船弁慶と文七元結。昭和二十年五月六日、戦前・戦中の花形役者、十五世市村羽佐衛門が疎開先の信州湯田中の宿で逝去した。この名優の死と共に江戸歌舞伎の生命も失われたのであろう

か。五月二十五日夜半、B 29、二百五十機の猛爆をうけて歌舞伎座は消失した。大正十四年一月四日開場の豪華な古典演劇の殿堂は見る影もなく焼けただれ、残骸をさらした。同じ夜、我が家もまた二度目の戦火を受けたのであった。

思いがけない旅の収穫

Ⅱ ミャンマー旅行にて Ⅱ

齊 藤 勁

旅をすると、出発前には予想もしなかった妙な発見をすることがある。これがまた旅の楽しみの一つになっている。

十二月中旬より福井 律氏（本会会員）と、ミャンマー仏教遺跡六日間の駆け足ツアーに参加した。見学先は、パガン、マンダレー、ペゲー、ヤンゴンであった。パガンを除く仏教遺跡は、さして興味もひくこともなかった

が、ビルマ人の最初の王朝が出来たパガンの遺跡には、強い印象を受けた。

そもそもビルマ民族の原郷は、中国雲南省西部の山岳地帯であり、八世紀ごろまでのビルマは、イラワジ川全域にピュー人、下ビルマにはモン人が、インド文化の影響の下に、おのおの小さな国家を建て、統一された国家は存在しなかった。八世紀後半、中国雲南省の南詔国がビルマに侵攻し、南詔国も唐帝国に滅亡させられた。その空白期にビルマ族が西進して、パガン地方を埋めたように思われる。

ビルマ族は、ピュー人やモン人の持つ文字文化を消化して、ビルマ文字を作り、彼らの信仰する上座部仏教をも受け入れ、イラワジ川を中心とする交易権をも手中に収めて力をつけた。一〇四四年、アノワラータ王は、パガンを中心とする初のビルマ統一王朝を作り上げた。今に残るシュエズイーゴオンパゴタはこの王の時代に、アーナンダ寺院は次代のチャンスイッター王の時代に、それぞれ建築された。それ以後のミャンマーの宗教建築の中心骨格を完成させたものと言える。

爾來二百年余り、建寺王朝とも言われるパガン王朝は、四二平方キロメートルのパガン地区に、数千の寺院パゴタを建てたと言われている。一二八七年、モンゴル帝国フビライハーン率いるモンゴル軍の侵攻を受けて滅亡し、政治権力の中心は東方に移動し、パガンは二度と昔日の繁栄は戻らなかった。

現在、世界遺産に登録されているパガン遺跡の寺院パゴタは二千を超えており、最盛期には、五千に達したであろうと推定される。

わずか一日、数カ所の見学では心残りが多く、歴史に通じた良いガイドと共に、数日間滞在して時間軸に沿って歩いて見たい思いが強い。

なお、その後のビルマ建築は、より美しく、より大きく、より色彩豊かな流れの中にあるように思われる。

次に、パガンの寺院で得た一つの収穫について記す。寺院の内部に、狛犬的動物が置かれているのは特に不思議ではないが、その狛犬が特異なものには一驚した。狛犬の元祖とも言はれるスフィンクス以来、一頭一身が通常であるのに、なんと一頭二身で、男性の生殖器を持つ牡

であった。しかも、この形式は、パガンのみで見られ、マンドレー、ペグー、ヤンゴンでは一頭一身であり、後代になるほど、生殖器の表現はなくなり、最近のものは平板化し、中性化してしまっている。そう言えば、沖繩のシーサーも同様の運命であった。

一頭二身の狛犬的動物の存在は、先住民族ビュー人の精霊信仰の根深さを示すと共に、ビルマ人の創造した、これに打ち勝つ強力な呪力を有する動物の存在が、必要とされたものと思われる。しかし、モンゴルに敗れたことにより、呪力は失なわれ、通常感覚に戻ったものと思われる。

わざわざミャンマーまで出掛けて、妙な狛犬を発見したことは、この旅を印象づける最大の出来事であった。

最後に、東西の大交易路として有名な、北のシルクロードに対し、インド―アッサム―ビルマ―雲南―長江に達する、南の大通商路の存在が強く印象に残った。これは南伝仏教の道であり、古くは稲の道であり、宝石の道である大交易路であった。この道は、もっと研究されねばならない、と深く感じた次第である。

平成十年極月の雜記

水 谷 汎

秋はいぬ風に木の葉は散りはてて

山さびしかる冬は来にけり

実朝

毎年冬がくると、この歌が心に沁みてくる。

一日に千里を行く虎の寅年にふさわしく、今年は例年になく日の経つのが早く感じられた。

十二月に入ると、喪中の挨拶状が毎日のように到来するが、中にはあの人……と、わが眼を疑うものもあり、年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからずを痛感し、寂然となる。

そして十二月八日がくる。昭和十六年十二月八日の諸事が昨日のごとく想起される。

この日、未明までの勤務のため十時ごろ起床して独身

社員寮の洗面所へ行くと、入り口の右側の壁に「本日未明、米英と戦闘状態に入れり……」云々の大本営報道部発表のニュースが掲示されていた。

これを読んだ途端、わが身が暗雲に包まれたようになり、ああ、これで日本は滅亡し、アメリカの属国になるのか、と重苦しい、暗然とした心裡になった。

米国と戦えば敗北必定。従って、米国との戦いはないと思い込んでいたので、一生のうちで最大のショックを受けたのであった。

次に浮んできた想念は、自分はこの戦争で死ぬだろう、ということであった。

そして、街頭でも職場でも、緒戦の成功に酔っていた。猛虎の尾を踏んだ後の恐ろしさなどは全く知らない世相であった。

必敗の戦争をなぜに始めたのか？ アメリカが経済的に仕掛けてきたので、やむなく戦端を開かざるを得なかったとか、諸説紛々としているが、この究明は近、現代史研究の大きな課題であると思う。

翌十七年の一月十日に京都深草にある自動車隊に徴兵

入隊することになり、生きては帰れぬわが身、と思い、親戚、知人、友人に挨拶まわりをした。

その時、祖父の従弟Mから開口一番、日米戦争の帰趨について質問された。

「今度の戦争で日本が勝てると思っているのか？ 君も高等教育を受けているのだから、そのくらいことは、わかっているだろう」と、日本敗戦を予測した質問だ。私はこの質問に答えなかった。日本は敗北すると広言したら、直ちに憲兵隊に拘引されたであろう。

Mは、何故に日本の敗北を予測していたのか。それは、Mの友人、親類の多くがアメリカに早くから移住していて、その人たちから米国事情を詳細に知らされていたから、諸情勢に盲目ではなかったわけである。一介の市井人であっても、世論に惑わされず、見るべきものは見ていた人だった。

十二月十四日は義士祭だが、浅野内匠頭に同情が集まり、吉良上野之介が悪者に仕立てられている。浅野が勅使の将軍訪問の直前に、吉良に対し刃傷に及んだことは

全く狂気の沙汰だ。

将軍が立腹して超法規的に即日切腹を命じたのは、勅使に対する手前からも当然であろう。

そして、大石良雄たちが吉良を殺害しやすいように幕府は仕組んで行く。浅野事件に対する幕府の処置への反幕的世論を解消し、かつまた士道高揚を狙った一石二鳥の謀略ではなかったか。

吉良は、高価な茶道具を手当たり次第に買い、その支払いを上杉家に負担させていたので、上杉家も困却していたという話も無視できない。

義士祭は、暗殺是認の臭気芬々たるものだ。

このように説くと、大石一派を支持する人たちは怒るであろうか、お互いに頭を冷やして世事を見よう、と言いたい。

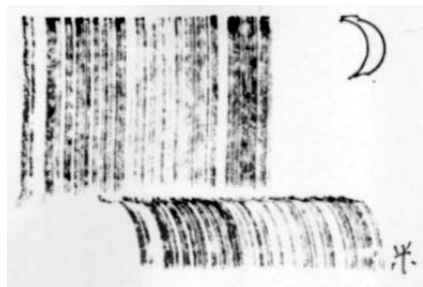
大石たちが、吉良の首を泉岳寺の浅野の墓前に供へたら、その場で切腹して死なず、おめおめと幕府の処置を待っていたのは、大石の汚点ではないかと思う。

クリスマスも結構だが、灌仏会（かんぶつえ）が昔は

ど盛んでないのは淋しい気がする。

子供のころ、二十五日の朝、目ざめると、枕もとに、おもちゃなどが靴下に入れて置かれていたことを思い出すと共に、花祭りで、小さなおしゃか様に甘茶をかけたことを思い出す。その甘茶の何とも言えない甘味が実になつかしい。

除夜の鐘を聞きつつ思う。百八つの煩惱に因んで百八つ鳴らすというが、人間存在そのものが煩惱ではあるまいか。



うなぎ捕り

竹内 京一

昭和十七年の春、東京での戦火を避けて、両親の生まれた高知へ疎開することになりました。途中、二見浦を見て、五十鈴川で手を洗い、伊勢神宮で必勝の祈願をし、一路土佐に向かいました。当時は蒸気機関車で、高松と高知の間にはトンネルが九十カ所もありました。

父は漁の名手で荏原郡（現在の矢口の渡し）あたりは川魚の宝庫であり、いろいろな小魚の捕りかたを見ました。

川魚でうまいのは鰻で、川エビ及び鱈（どじょう）、そして鮠（はや）がその次でしょう。

現在、鰻は養殖がほとんどで、天然物は一〜二割と聞いたことがあります。

鰻を捕る方法で、一般的なものは竹筒を沈めて中にいれる方法。それから釣る方法。そして第三は水（堰床）のカエボシ（川干し？）といって、川の水を掻き出して鰻を捕るのです。追いこみ竹筒と釣りには餌を使いますが、餌にはミミズ、イナゴ、オタマジャクシ、タニシ、ドジョウを使いました。

川干しはさておき、竹筒の場合は、これで生計を立てるプロは竹を一年間土の中に埋めて、竹のくさみを取ったものです。こうすると、たくさん捕れるといいますが、直径七十ミリ、長さ約七百ミリぐらいの物です。入り口は竹の返しをつけて、入った鰻が出られないようにしますが、後には、セルロイドで弁を作り、針金で留めて一方通行にしました。

竹筒の一方の切り口は木で栓をします。この中に餌を入れて、鰻が入れば出られず、それを引き揚げて、木の栓を開けて鰻を出すわけです。

ミミズを餌にする時は十〜十数匹をワラで縛って、竹筒の中に入れました。イナゴの場合は生きているのをそのまま入れます。しばらくはバタバタしています。タニ

シの場合、父は多少つぶして香りを出させる、と言いました。オタマジャクシはそのまま入れますが、これも鰻の好物です。

春にはオタマジャクシ、夏から秋にかけてはイナゴやタニシ、またはドジョウ。ドジョウはワラで縛ったり、切ったりします。冬にはミミズでもOKです。追いこみ餌が豊富にある春から夏は竹筒を五十本から七十本を仕掛けますが、鰻は夜行性ですから、池や泉にいつも夕方から、六、七時に沈め、早朝に引き揚げました。

漁の多い時は一本の竹筒の中に四〜五匹いたもので、栓を開けても取り出しにくいものでした。

この竹筒はただ仕掛けてもダメで、仕掛ける場所を選ばねばなりません。他の人々より父は仕掛ける場所の選び方を知っていましたが、私がそれを会得するには至っておりませんでしたので、お伝えできないのは残念です。

もう一つの捕り方は「ヒゴ釣り」ですが、糸を付けて釣るわけではありません。竹ヒゴの先に直接鉤（つりばり）をつけますが、この鉤には返しがありません。当時はテグスで竹ヒゴの先に巻き付け、卵の白身を塗り、固

めたものです。これにミミズをスッポリとつけ、石垣の隙間を一つ一つさしこみ、探ります。すると、ガブと食いつき、手応えがあり、胃まで入っていることがあります。時には引き出すとナマズが掛かっていることがあります。ナマズは臭いので、私は好きではありません。

以上は成鰻ですが、白子（シラス）捕りもしました。

白子は鰻の子供で、七センチ以上はあります。立派に鰻の形をしています。浜松あたりで売っている二〜三センチのシラス、小さい白いものではありません。現在は無理ですが、当時は五月ごろ川下から川上に上がって来ました。これをブツタイと言う器具を使って捕りました。

ブツタイは竹ヒゴをシュロで編んだもので、これを使い、足で追い込んで、すくうものです。これを洗って味噌汁か、すましにして食べました。

鰻料理は西洋や中国にもありますが、和風の蒲焼きに尽きるようです。戦時中、私の通っていた小学校に本土決戦用に、満州から関東軍の虎の子部隊が来ました。

ある日、将校さんの炊事班長が私に、鰻を捕って来い

と言いました。父に相談して、生きている大型の鰻を十匹ばかり持って行くと、炊事班長は感謝して、当時、入手不可能の牛肉をたくさんくれたものです。

現在、高知市で鰻店の多い所は大橋通りと繁華街で十数軒あります。また、土佐名物の皿鉢料理にも必ずこの鰻は添えてあります。

セミナー・プロデューサー

高橋 孝蔵

セミナーのプロデューサーをつとめるのは楽ではない。セミナー事務局は各社から集まった混成メンバーである。気を使うばかりで、報酬は少ない。セミナーが近づくとき、有無を言わさない突貫工事の仕事が急増する。一方、わずかな不手際でも非難される。やっつけられない。しかし、終わってみれば、次回もプロデューサーをつと

めたいと思うから不思議である。

米国にNAB（全米放送事業者協会）という組織がある。そのNABがラスベガスで開催する毎年四月のNABショーは放送業界にとつては世界最大のショーである。大規模な展示会場には所狭しと、開発されたばかりの新鋭機器が並び、カンファレンス・ホールでは三百近いテーマで放送業界はどうあるべきかの論議がたたかわされる。期間は精々数日間だが、全世界から十万人以上の放送業界人が集まり、日本からも数千人が参加する。放送業界の管理職にとつては毎年必ず訪れたいメッカといえる。

さて、展示会とセミナーのNABショーから、セミナーだけなら東京でも分科会を催すことが出来るだろうと、一九九七年に第一回NAB東京セッションが開かれた。九八年が第二回。キャッチフレーズは日米トップセミナー「デジタル・パワーが創る新時代」である。セミナーは二日間。

そのセミナー・プロジェクトのプロデューサー役に私が推薦された。だが、正直なところ、私にプロデューサ

ーの器量があるかどうかは、甚だ疑問である。しかし、取り柄もある。それは企画書を作成するのが大好きなことである。誰がどんな仕事を何時までに行う、これをユニットとして計算し、さまざまな人と仕事をパッケージとして組み立て、プロジェクト全体のスキームを作り、仕事の流れをシミュレーションする。紙の上で、起こりうる諸々の出来事を想像し、対応策を講じていく。企画細部を想像しているときはとても楽しく楽しい。

そう、私には空想癖がある。親父が鉄工業ブームに乗り、地方の成金にのし上がった絶頂の時代、生まれてきたのが娘ばかり五人。六番目にやつと跡継ぎになりうる男子が生まれた。それが私。欲しいものは何でも手に入る。玩具でうずもれ、部屋に閉じこもり、空想に耽る虚弱な少年が出来上がるのは不思議な話ではない。幸い、体の方は後年大学でボートを漕ぐ程変えることが出来た。だが、空想癖は直らない。例えば、野球は大の阪神タイガースファンである。タイガースが春のキャンプに入るころ、頭の中では既に開幕第一戦の架空の

ラインアップが出来上がっている。第一球から試合終了までのゲーム・シミュレーションが行われる。架空世界では、弱い阪神タイガースも王者である。

講師、講演テーマ、後援団体（四省庁、二十五の民間団体）、資金を提供する二十六の協賛会社承認取り付けから、講師がつけるピン・マイク、演壇上の照明の位置、同時通訳装置レシーバーへのバッテリー詰め細部に至るまで、私の企画書に落ち度があるわけがない。更に、講師である大臣の車が何時何分に到着し、誰が迎え、案内し、来賓室では誰が対応するか、警備との打ち合わせなどのスケジュールが分刻みで作成される。

いよいよセミナーの日。三十名近い各社から派遣されたメンバーとアルバイトに各部署ごとの責任と仕事の内容を説明し、細かい指示を言い渡す。そして最後に、プロデューサーの役割は万が一のトラブルに対処することだけだと付け加えた。

それが、セミナー冒頭から大トラブルに見舞われるとは夢にも思わなかった。

最近では、講師はOHPもスライドも使わない。パン

コンを使う。パソコンとスクリーンが直結され、図表や写真が映し出される。そのパソコンがスクリーンに繋がらない。早朝から機器のチェックを行っていた技師陣だが、故障原因が掴めない。早く修理できねば、初日のセミナーはキャンセルに追い込まれる。

一方、セミナー開始の時間は刻々と迫る。頭の中が少しずつ白くなっていく。とにかく一番必要なのは修理のための時間を稼ぐこと。まず講演開始を遅らせる。次に、総合司会をつとめる高名な放送評論家に事情を話し、急場を救ってくれるよう懇請する。驚いたことには、パートナーと共に壇上に駆け上がり、即興の掛け合い漫才で放送評論を行ってくれた。

一息つく。だが、これで何分持つのだろうか。予定外のコーヒー・ブレイクを入れよう。会場近在の喫茶店に四百人分のコーヒーを注文するが、短時間には作れないと拒否される。では昼食を繰り上げさせよう。ホテルに連絡するもそんな器用なことは出来ないと無粋な返事だ。ドタバタしているうちに修理が出来た。結果として、幸いなことに講師一人がパソコン画面が不鮮明だったと

カンカンに怒ったことくらいで済んだ。

二日目。寝起きざまにつけたテレビのニュースに不吉な予感を覚える。米軍のイラク攻撃開始だ。会場に着くと、早速通産大臣秘書から電話が入る。予定通りに行くが、緊急閣議の召集がかかれば、キャンセルする。穴埋めをどうしよう。しかし、その後緊急の電話はかからず、大臣の講演は無事終わる。だが、もっと心配なのは午後に予定している人気キャスターの筑紫哲也氏だ。彼の講演を聞きたがっている聴講者は多いはず。やきもきするが、予定の時間に、微笑みを浮かべ、来場された時はほっとした。彼に付き添っていた私の友人は、イラク攻撃という突発事件が発生した以上、今日のセミナーはキャンセルすべきではないかとTBSから問い合わせが入ったという。

筋書きに書いてないことが起こるのが現実だ。そして、舞台裏を知らない人より危機管理体制が十分でなかったと非難されるのも現実だ。そういうときは全く割が合わないと思う。

しかし、その後、あのセミナーはレベルが高く、随分

と役に立った、次回も続けて下さいと賛辞の入ったメッセージを頂くと暗い気持が一転し、忽ち舞い上がってしまった。私には空想癖だけでなく、煽てに乗って舞い上がる癖もあるようだ。

国際会計基準の本質と精神

許 斐 義 信

企業会計という窓から観るビジネス活動は数字で表されていることもあり、明確な像が浮かび上がってくると想像される向きもあるが、実はそうではない。

そこから見える日本企業の経営は、「損失飛ばし」や「不良債権隠し」といった類の不透明な側面があらわになっている。問題は、そのような悪質な操作が横行しているだけではなく、公式な側面でも制度疲労が起きていることである。

ここでは制度に従って現実に作成されている計算資料を概括し、その作成根拠とその違いから来る問題を披瀝させて頂きたい。

第一に、どの会社も作成が義務付けられている営業報告書は、配当可能利益を計算するもので、法的根拠は商法にある。それに則って『個別企業ごと（単独決算）』に作成されるのが営業報告書である。

第二に、上場会社に限定して公表を義務付けられている有価証券報告書がある。それは単独決算ではなく『連結決算』を重視する方向に変更された。確かに世界の趨勢は、単独決算から子会社を含めた連結決算の時代に大きく変革を遂げつつある。その精神は、「連結外し」と呼ばれるような損益の関係会社への移転といった類の処理による不透明性を排除し、実質的に経営を支配している構造に立脚して、企業業績を説明することが眼目となっている。しかし優良子会社を持つ企業集団でも、本社利益が出ていなければ、単独決算を根拠にして支払われる配当にはあずかれない。つまり連結決算の情報は「その業績を反映して上下する株価に関心のある投資家

に対して作成されるものであって、『個別企業ごとの業績』に対応して配当を受ける立場の既存の株主に対するものではない」ということになってしまふ。最近「連結決算を基礎にした国際会計基準」なるものが注目されているが、連結決算とは、キャピタルゲインを狙った投資家に対しての情報提供であって、健全な意味でのインカムゲイン即ち配当を考慮した投資家を対象にしないことになる。

第三に、上場会社ではキャッシュフロー、つまり稼得資金の高が法的監査の対象になってきたが、実は税金差引後の利益資金は、法人税は『個別企業』を対象にしているため、連結決算のキャッシュフローとはその計算根拠が合致しない。最近では「税金も連結利益を基礎にして算出すべきだ」という意見が聞かれるが、それはもったもなことである。連結決算上の利益の上下と現実の儲けとが関係なければ、連結決算の意味がない訳だから、連結納税制度の導入は当然のことで、本来は議論するまでもないことなのである。

つまり上場会社では、証券取引法による経営情報開示

では連結決算、商法による配当可能利益算出のための営業報告書は単独決算、そして所得税算出のための納税申告書は単独決算という具合で、三種類の決算書が混在することになる。「連結の時代だ」と経営の変革を迫る議論を頭から否定するものではないが、三つの決算書の計算根拠は、連結だったり単独決算だったりという具合でバラバラであるという不思議な現象を呈している。専門家では、この問題を、三角形になぞらえて「トライアングル問題」と呼んでいる。

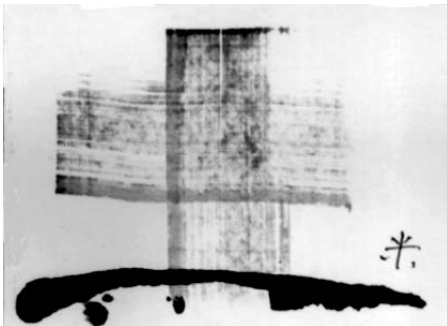
ある著名な専門家は「銀行中心の情報開示の時代」から「投資家主体の情報開示の時代への変革」で、世に言う「間接金融の時代が終焉し、直接金融の時代に変革を遂げつつある時代を反映している」と説いているが、その議論が通じるには、商法の改正も不可避となる。つまり、配当が基本的な投資に対するリターンならば、配当が個別決算であってよいはずはないし、持株会社が非上場会社で連結対象企業が株式公開企業という摩訶不思議な現象が許されるはずはない。連結決算導入の本質は、

投資した事業が所与の成果を上げ、その利益の分配に預かれるか否かを明確に説明せねばならないはずである。そこに制度改革の本質的な狙いがあるはずではないか、と思う。

さて『国際会計基準』が作成された意図は、主として欧州の大陸諸国が職業会計士の努力を後押しし、『投資の国際化』に適合すべく、「どこの国の企業でも、その事業成果を公正に比較評価できる素地を作る」ことが狙いであった。しかし忘れてはならない点は、米国の証券取引法による会計基準に対抗して欧州大陸諸国が対抗手段として持ち上げてきたのが、国際会計基準であるという側面である。国際会計基準と米国基準との大きな相違点の一つが、年金会計である。実は、米国基準では「将来発生することが明確な年金などの負担をも費用として計上すべきだ」ということになっている。つまり米国基準では「会社は売買の対象であり、決算書はある意味で会社の売買価値を示した」ものと考えてもよい。しかし、長期雇用を前提にした欧州諸国や日本の雇用制度を前提にした場合、その累積損失は、時として膨大となる訳で、

数年前、ニューヨーク証券取引所に上場しようとしたダイムラーベンツは、その折、決算書を米国基準に作成し直す必要に迫られ、大幅な赤字決算をせざるを得ない羽目に陥った。

日本の会計制度は、その欧州よりも、租税特別措置法や税法優位の決算を行うという慣習（税法の逆基準性）など、各種の特殊要因が加わり、更に複雑に絡み合っている。問題の本質は、『雇用制度の相違』という『文化摩擦』にも配慮しながら、関係法規の整合性をとり、一貫した理念で統一することであり、個別に欧米諸国に追従することではない。



短歌サロンのこの一年

細川 謙三

今年は小林正憲さんが休まれ、新たに深尾榮助さんが参加された。

皆さんの作品は年々味わいを加えて来ていることご覧のごとくだが、短歌は言葉による芸術であるから、語感の錬磨が何よりも大切だと私は思う。一読胸をうつような感情の流露感のある作品をつくるよう努力して行きたいと思う。会は和やかな雑談の場でありながら、互いにきびしい批評の交換の場でもある。

ご興味のある方の参加をお待ちしています。

アブドルカーター 栄子

秋緑の雑木林にひっそりと山藤の花咲きしずまれり
霧晴れし峠の道にひともの薊の花はつやめきてあり
大きなるリュックを背にし乳呑子と成田空港に娘は降り
たちぬ

奇声にも似たる片言発しつつ全身五感一歳半の児は
美智子妃の「読書の思い出」美しく胸を打つなり朝のテ
レビに

北田 純一

ひたむきに一夜の女の月下美人気高きまでの白き命を
借りものの自由の女神右手かかげ人工島にポーズとりお
り

ベトナムかタイ語ならんと聞きたいしが少女らの話す日本
語なりき

カンナ咲く兵学校の校庭に浅紅色の雲を見たりき

カトレアはメキシコの花華やかに裳裾の揺れるマリアッ
チの舞

藤岡 豊

ありし日に榮華きわめしウインザー城衛兵の声ひびく虚ろに

霧の中車が走る馬が行くマンチェスターの春はつめたし
亡き友の形見のネクタイ締めて行く旧き仲間の夜の集い
に

ゆく秋の京に佇む永観堂杉の木立に香のただよう
若き日の熱き思いの甦り南禅寺堂の落葉ふみゆく

三 枝 亨

群青の中に咲きたる山帽子山寺の旅思い出さしむ

姫羊歯の葉裏にひそむ黄金虫両脚つよく動くことなし
文法書読みかえし来て五年経ちアラブの古典今日読みは
じむ

雨の日は歩くをやめよと妻言えば宮沢賢治と我は答えつ
冬枯れの哲学の道横切りて肩寄せし舞妓坂を下りゆく

深尾 榮助

春おそき弥彦をたずね息をのむ信濃川べりのおいらん桜
に

山あいの素朴な村で嫁が売る浅漬けセロリ歯ごたえかる
し

テニアンにマリリンゾートの夢描くチャモロ男の顔は輝
く

夕焼がきれいなのと繰返すチャモロ娘の歯並び白し

その昔プールサイドのおかっぱはいま菓子工房サブリエ
のママ

西川 知世

ミシン踏む窓べの光移りゆきひと日ひと日の短くなりぬ
掌にのるほど小さき鉢植えのセントポーリア朝々に咲く
へび坂と呼べる坂をくだるとき音乾きつつ落葉降りく
る

落葉掃く音単調に聞こえる朝の日溜りにバス待ちおれ
ば

花茎の真直ぐ伸びし水仙の開かんとする力羨しも

山 田 紀美子

鬱々と心ざわめく日のありてひたすら草をむしりて過ぐす

頑なに己が主張をいう君も子を語るとき涙ぐみたり
願事唱える間なく星流れとりのこされしごとく見上ぐる

目 黒 美保子

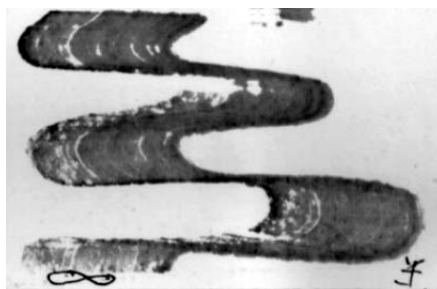
突然に秋めきし朝夏草の花々庭にうなだれて咲く

音たてて秋雨の降る公園にサフィニアの残り花四輪ほど
十三夜の月照らしている楡並木葉擦れは優し木下行くとき

平 木 幹 夫

チエ・ゲバラ逝きて三十年人々に「均しき豊かさ」尚成
りがたし

街角に葉巻くわえし老人は階段に坐り身じろぎもせず
歯切れのよきラテンのリズムに楽団員はすべて公務員と
ふと思ひおり



ペン俳句充実の一年 Ⅱ個性ある佳句をⅡ

平間 真木子

毎月の句会報は、この十二月にて六十五号と回を重ね、充実の手応えを感じることが出来る。月に一度のその会の日を待っておられる気配があり、第一木曜日の午後の会議室は楽しい。吟行は、春の飛鳥山桜狩の一回のみであった。なにか新しい試みの一つとしてはじめたのが「忌日俳句」を作るということである。その忌の人物について多方面より勉強を試みる。俳句を通じて歴史・社会など視野を広く見てゆきたい、と思っている。さて成果はいかがであらうか。

ウズベキスタン行

平間真木子

チンギスハーン駆けし大地の棉の花

大草原九月の雲の翳りあり

コーランの声榆の木の子陰より

回教の跪拝の長し西日中

木の実落つレーニン像の無き広場

ナンを焼く榆の落葉を集めては

国境や戦車ひまわり畑に置き

秋深し吾と濡れる紀元杉 浅野 正春

胡桃割れば疎開の日々のそこにあり

カルデラの水翠なりいわし雲

尻焼のいで湯のありて青すすき

甚平着て京の団扇を取り出しぬ

句会の兼題に「胡桃」が出た折りの作品には佳句が多

かった。正春さんの「疎開」の句には、それを体験した人の実感が籠もっている。疎開と胡桃、この取合せの意外性に真実のある不思議さ。第五句にある俳諧味は、いままでの作者には無かったもので、楽しい期待を覚える。

五月雨や運河へ低き橋いくつ

池田 耕治

西日さす退任の日の執務室

パナ帽少しななめに自由の身

年金の暮しまたよし胡桃割る

大家族なりしは昔衣被

この花を見せたき人の今は亡く

石川 正達

キャミソールルックの街や原爆忌

胡桃割る記憶の母の腕細く

一葉忌やまと言葉の遠くなり

戦争孤児の記事に見入りぬ冬立つ日

悪霊を払ふどんどの火の猛けし

上澤 準太

袖口を濡らし芹摘む子供らよ

老骨の身に添ふ帽子炎暑なる

登攀や頼る鎖の灼けてゐし

息荒く来て山中の岩清水

いよいよ退任のその日となった。「西日の執務室」という表現には万感の思いがある。ミラノのお洒落帽子を被り「自由の身」というのもまたよからずや、ですね。「衣被」の句には日本人の郷愁がある。「昔」とはついこの間のことだったのに。

第一句目は故「林篤二さんを偲びて」の前書がある。さくらの花には、こうした思いをかき立てるものがあり作者のこの率直な一句は、ささげて何よりであろう。流行の「キャミソールルック」を取上げ「戦争孤児」の記事には目を離せない元記者の眼は生き生きとしている。

ロシアへ中国へと、お忙しい仕事を抱えておられるが俳句にも熱心に取り組まれている。どんど火を「悪霊を払う火」と表現されたのは少し驚いたが、いかにも準太さんらしい。二句目の、子供にそそぐ眼のあたたかさ

はなんとも好ましい。

芽吹く丘横浜港に巨船あり 亀井 弘次

せきれいの尾羽根の叩く春の水

菖蒲湯の昔のほどは匂はざり

薫風や解き放たれし犬駆けて

胡桃追ふ子猫するどき爪もてる

春眠し講師の声のはるかにて 岸本 義生

コーヒーの香の濃き日なり五月憂し

原爆の日や「夢千代」を忘れ得ず

残りゐし胡桃一個をまだ割らず

乾きたる駒下駄の音一葉忌

座を正し自在と大書初硯 北田 純一

この国のかたちの見えず葉の花忌

ゴビ万里長城万里いわし雲

鬼胡桃天山南路晴れわたり

自販機のホットコーヒー山眠る

横浜に住まわれている作者には、もっと横浜の句を作
って頂きたいと思っている。芽吹く丘そして横浜港の巨
船、明るく楽しい景がそこにある。「菖蒲湯」が昔ほど
には匂わない、というこのささやかな発見が俳句となる
ところに、作者の俳句人生が感じられる。

あとからこの会に入られたことが嘘のように、皆さんに
伍して譲らず、元氣な質問を投げて下さる方である。
「一葉忌」の兼題が出れば、早速に本郷を歩き、一葉旧
居を尋ね、その周辺の年配の人から話を聞いてくる、と
言う熱心さ。俳句は足で作るものといわれる所以である。

大人の風格が増して、作品もまた文人風になられた。

「葉の花忌」は司馬遼太郎の忌。没後間もなくより「葉
の花忌」として多くの作品が見られるようになったが、
未だ歳時記に定着していない。よい例句が欲しいもので
ある。「山眠る」の句には違う一面を示されている。

丹前のぬくみに母を思ひをり

三枝 亭

天を指し白木蓮の芽のふくらめる

天守閣下の小店にところてん

アルプスの嶺の見えゐて蕎麦の花

一年の巡る速さの新茶かな

五句それぞれに違った感じの作品であるが、作者の対象へそぞろ眼はやさしい。「白木蓮の芽」「小店の心太」「アルプスと蕎麦の花」など、やさしい視線だけではなく、ゆったりとした息づかいと的確な写生があり、勉強の成果を見る思いがする。

葉牡丹や旧き医院の車寄せ

西川 知世

花散らす雨に狛犬濡れてゐし

五月来る少女の胸の貝釦

朝露や磨き込まれし乗馬靴

岩木富士へ双手を伸べて林檎もぐ

若々しい情感、明るく元気な作品である。他のおじさま方を牽引する力があるので頼もしい。基本の骨法を身につけ、しっかりと写生することを学ぶ姿勢は何よりと思っている。「乗馬靴」「岩木富士」の二句は句会にて高評を得た作。ここに記録して残して置きたい。

企業OBペンクラブのあゆみ

Ⅱ平成十年（一九九八年）Ⅱ

年 表 （原則として敬称略）

- 一月例会（二十一日）
 - ・入会 大野 昶
 - ・会員講演
 - 東前田原 与一
- 「沖縄苦難の歴史——戦争・移民族支配・基地」
 - ・本の紹介
 - 新井 進 「巨木は揺れた」
 - ・会の今後の基本方針発表
- 二月例会（十八日）
 - ・会員講演
 - 松浦 武弘
- 「文明興亡の法則——東西文明、八百年周期交代——」
 - ・本の紹介

年 史

- 一・新役員人事（任期二年）

会 長	北田 純一
副会長（会計担当）	上澤 準一
副会長（事務局総括）	亀井 弘次
副会長（運営委員長）	中川路 明
理 事	櫻井 清治
事務局長	藤岡 豊
運営委員長補佐	都甲 昌利
監 事	遠藤 俊也
運営委員は二十一名	
- 二・新年度の基本方針

アウトプットに重点を置き、その活動を強化する
- 三・新規施策
 - ・Eメール利用方法の検討

野村 嘉彦

「ベトナムのころ」

・退会 相澤益二 岸田 健 清水 喬 長谷川正男

三月例会（十八日）

・入会 榎本喜三郎

・会員講演

多田 修

「パソコンと通信がもたらすもの」

・本の紹介

北田純一「死語ノート」他

・「悠遊」第五号完成、配布

四月例会（十五日）

・会員講演

玉山和夫「インパール作戦」

・本の紹介

深尾榮助「日本語ウオッチング」

・退会 田岡義計 奥村正右衛門 織田純一郎

（四月一日現在の会員数七十七名）

・何でも書こう会の強化

・月例会の講演は会員講師を主体とする

・小説研究会の発足

四．会員数

新入会員は十名、退会者は七名で、九八年末現在の会員数は八十五名となった

五．新規出版

（一）「オーストラリア暮らし入門」が七月十日大修

館書店より出版された。編者はICS国際文化セ

ンター、定価は一六〇〇円、初版三〇〇〇部（プロ

ロマネ 森田 茂）

（二）同人誌「悠遊」第五号が三月十八日に発行された。（編集世話人 石川正達・中川路 明）

六．プロジェクト

（一）単行本

・クラブ創立十周年記念として、「年金の知恵」（仮称）の出版を計画、執筆を開始した。（プロマネ

北田純一）

・「ホントの話」九九年中の出版を目指して、原稿執筆を開始した。（プロマネ 北田純一）

五月例会（二十日）

・入会 佐藤正男

・ゲスト講演

小川寿夫「出版に未来はあるか」

・本の紹介

遠藤俊也「仏教とは何か」

六月例会（十七日）

・入会 千葉義道

・ゲスト講演

佐々木康人「脳の働きを画像で伝える―核医学の

挑戦―」

・本の紹介

桜井清治「大河の一滴」

七月例会（二十二日）

・入会 三宅 劭 中村 爽

・会員講演

高橋孝蔵「二十一世紀のソフト戦略」

・「外国語に強くなる虎の巻」（仮称）ハウツーもので百編方式、体験記をベースとしたものを起

案中（プロマネ 三枝 亨）

・「悠遊」第六号は九九年三月発行予定（発行世話

人 石川正達・中川路 明）

（二）雑誌

・アジア調査会出版の月刊誌「アジア時報」への寄稿（プロマネ 石川正達）

・TKCの月刊誌に「エグゼクティブの国際マナー」

を寄稿（プロマネ 北田純一）

・経営政策研究所の「経営コンサルタント」月刊誌

に随想を寄稿（八月に終了）

・月刊「日本」に投稿を開始（初回は九九年二月、

プロマネ 八木大介）

七 ミーティング・勉強会

・内外情勢勉強会（マネジャー 上澤準一）

「アジア経済危機とグローバリズム」「景気は上向

くか／世界と日本」「信用収縮とヘッジファンド」

ほか内外の主要トピックスを中心に勉強会が行われ

・本の紹介

亀井弘次「武家と天皇」

八月例会（休み）

・入会 杉山 修一

九月例会（十八日）

・退会 丸山 暢謙

・会員講演

黒崎昭二「鉄よもやま話」

・本の紹介

莊司忠志「マレー・ジレンマ」

十月例会（二十一日）

・入会 今川確郎 定直正光

・会員講演

莊司忠志「最近のインドネシア情報」

・本の紹介

森田 茂「地球温暖化とその影響」

・同人誌「悠遊」第六号のテーマ

た。

・何でも書こう会（マネジャー 浅野正春）

会員寄稿の短編随筆をもとに出席者による率直な相互批評を行い、会員の文章力向上に寄与した。

・サロン21C（マネジャー 北田純一）

「民族の潜在意識と二十一世紀」「地球誕生」「環境ホルモン」ほか自由テーマにより、新世紀を迎えて未来を展望する勉強会を行った。

・小説研究会（マネジャー 八木大介）

小説による表現の勉強会で、新規発足以来成果を上げていく。

・Eメール勉強会（マネジャー 八木大介・多田修）

当クラブの活動に対し、インターネットを利用して何ができるか何が問題かを検討する会。新たにパソコンをセットした会員を含め今後の進め方を検討中。

・短歌サロン・俳句教室

細川謙三、平間真木子両先生の指導により作品の質が向上、四月には西川知世がNHKテレビの番組

「この十年・これからの十年」に決定

十一月例会（十八日）

・入会 芦刈 克

・ゲスト講演

織田善行氏「自己実現」

・本の紹介

東前田原与一「日本人の境界」

十二月例会（十六日）

・入会 酒井忠之

・会員講演

岡 政昭「岐路に立つ日本―茶の間の経済・金融

談義―」

・本の紹介

上澤準一「七つの習慣」

・忘年パーティー

恒例の忘年パーティーを丸ノ内養和クラブ第一・二
集会室で開催。 アジア調査会、日本実業出版、

書苑新社、TKCの関係者と懇談

「俳句王国」に出演した。

八・会員ニュース

・西川永幹著「イギリスの英語」「ベターハーフ」が、
ごま書房から出版（二月と三月）

・石井正紀著「石油技術者の太平洋戦争」が光人社
（NF文庫）から出版（二月）

・深尾榮助著「外為自由化時代の「外為渉外のハンド
ブック」」がビジネス教育出版社から出版（四月）

・森田 茂が一木会で「地球環境とエネルギーの選択」
と題して講演（七月）

・榎本喜三郎が新版「ジョンブル気質」を自費出版
（七月）

九・まとめ

当クラブ創立満九年を経過したが、出版界の不況は依然として続いており、そのあおりを受けて厳しい局面に立たされている。この中において、単行本の発行、雑誌への投稿のほかは会員の講演、各種勉強会など活発な活動を続けてきた。これはいづれ九九年以降、当クラブの発展に大きく寄与するものと思われる。

執筆者名簿 (五十音順)

氏 名	(カッコ内は本名)	出 身 会 社	生 年
浅野 正春	あさの まさはる	日立製作所	1934
アブドルカーダー 一栄子	アブドルカーダー えいこ	ニューサウスウェルズ州立コレス ボンダンススクール日本語教師	1933
新井 進	あらい すすむ	伊藤忠商事	1931
池田 耕治	いけだ こうじ	第一勧業銀行	1927
石川 正達	いしかわ まささと	毎日新聞	1921
今川 確郎	いまがわ かくろう	兼松	1926
今村 亮	いまむら りょう	京セラインターナショナル	1931
岩崎洋一郎	いわさき よういちろう	三菱レイヨン	1929
衛藤甲子郎	えとう こうしろう	住友商事	1924
榎本喜三郎	えのもと きさぶろう	三井物産 三井船舶	1914
遠藤 俊也	えんどう としや	東京銀行 丸紅	1924
大塚 滋	おおつか しげる	国鉄	1929
岡 政昭	おか まさあき	東東銀行NBD	1926
上澤 準一	かみざわ じゅんいち	三菱商事	1927
亀井 弘次	かめい こうじ	キリンビール	1928
岸本 義生	きしもと よしお	兼松	1927
北田 純一	きただ すみかず	三菱商事	1928
黒崎 昭二	くろさき しょうじ	新日本製鉄	1927
許斐 義信	このみ よしのぶ	三菱商事	1944
三枝 亨	さいくさ とおる	三井物産	1927
斉藤 勁	さいとう つよし	呉羽化学工業	1925
櫻井 清治	さくらい せいじ	三井物産	1926
佐藤 正男	さとう まさお	協和発酵	1929
志田 渉	しだ わたる	伊藤忠商事	1919
(山辺 武磨・やまべ たけまる)			
莊司 忠志	しょうじ ただし	石川島播磨重工業	1932
定直 正光	じょうじき まさみつ	兼松	1937
関谷 裕彦	せきや ひろひこ	ローヤル・ネドロイド・ラインズ	1932

氏 名	(カッコ内は本名)	出 身 会 社	生 年
高橋 孝蔵	たかはし こうぞう	丸紅 松竹	1936
竹内 京一	たけうち きょういち	トープラ	1931
多田 修	ただ おさむ	横河電気	1929
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空	1933
豊前 華	とよまえ はな	三井物産	1933
(大野 昶・おおの ただし)			
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業	1929
中川 十郎	なかがは じゅうろう	ニチメン	1935
中洲 靖雄	なかす やすお	三菱レイヨン	1927
中村 爽	なかむら そう	日本工営	1933
西川 永幹	にしかわ ながみき	さくら銀行	1941
西島 力	にしじま つとむ	住友商事	1930
野村 嘉彦	のむら よしひこ	三井物産	1917
林 洋	はやし ひろし	日本自動車研究所	1931
東 与一	ひがし よいち	全日警	1940
(東前田原 与一・ひがしまえだはら よいち)			
平間真木子	ひらま まきこ	日本機械輸入協会	1925
深尾 嵐山	ふかお らんざん	富士銀行	1931
(深尾 榮助・ふかお えいすけ)			
藤井 長治	ふじい ちょうじ	三井物産	1919
藤岡 豊	ふじおか ゆたか	三菱商事	1932
細川 謙三	ほそかわ けんぞう	東京銀行	1924
松浦 武弘	まつうら たけひろ	伊藤忠商事	1939
水谷 汎	みずたに ひろし	満鉄・友愛信用組合 横浜メキシコ名誉領事館	1917
村田孝四郎	むらた こうしろう	新日本製鉄	1934
森田 茂	もりた しげる	出光興産	1930
八木 大介	やぎ だいすけ	三菱商事	1926
(木本 平八郎・きもと へいはちろう)			
吉井米三郎	よしい よねさぶろう	三井物産	1926
吉畠 清己	よしざき きよみ	関西ペイント	1925
西川 知世	にしかわ ちよ	企業OBペンクラブ事務局	1948

企業OBペンクラブはことし十一月、創立十周年を迎えます。それを記念する意味も含めて特集テーマは「この十年、これからの十年」となりました。それぞれの思いを込めて寄せられた原稿は特集テーマ十九編、自由テーマ三十編。合わせて四十九編はこれまでの最多本数です。質量ともに充実してまいりました。しかし、会員数が八十五人を超すほどになっていることを考えますと六割弱の参加です。来年の第七号には、出来れば全会員が参加され、公募エッセイに当選できるほどに筆力を磨きたいものです。毎号本誌を飾る表紙の絵及びカットは新井進さんと吉井米三郎さんの力作です。ありがとうございました。

原稿整理に当たっては、原文を尊重するよう心掛けましたが、思わず新聞流に手が走ったり、校閲の見落としなどがあるかも知れません。その点はご寛容のほどお願いいたします。

〔編集世話人〕

石川 正連

中川路 明

〔事務局〕

西川 知世

事務局から

西川 知世

悠遊も数えて第6号になり、同人誌の発刊が企業OBペンクラブの春の行事になりました。今回のテーマは「この十年・これからの十年」、二十一世紀を目の前にして、ますます充実を心強く思っています。ふりかえれば、私の事務局の手伝いも五年が過ぎました。多々お目こぼしいただき、今日にいたっています。去年から本格的にEメール勉強会が始まりました。私も恐る恐るマウスに触りつつ、パソコンと格闘しています。なんとかEメールを使えるようになりました。俳句、短歌、そして今回はパソコンと、私の未知なることへの窓口が、近ごろはすべて企業OBペンクラブになっています。この集団のパワーを一番感じつつ享受しているのは私かも知れないと密かに自負しています。事務局として、力不足ではありますが、皆さまのご指導を得て頑張りたいと心を新たにしております。企業OBペンクラブ創立十周年を迎え、会員皆さまの力がますます結実して、大きく前進されることをお祈りいたします。

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第七号

二〇〇〇年三月二十八日発行

編集・発行者 企業OBペンクラブ「悠遊」刊行委員会
代 表 北 田 純 一

印刷所 株式会社毎日整備産業
東京都千代田区一ツ橋一―一―一
TEL ○三―三二一六―五四八九

連絡先 企業OBペンクラブ事務局 中 村 爽
茅ヶ崎市高田三二二二十一（〒）

TEL ○四四―九五五―〇〇四五
口座 第一勧業銀行丸の内支店 企業OBペンクラブ
（普通 1633830）

頒 価 一、〇〇〇円